324
545

始

324-545

帝國圖書館藏

小野清秀著

宗教哲學

東京 廣文堂書店發行

大正
6. 10. 24
内交

自序

異教餘宗の人師が、日蓮宗及日蓮聖人を誤解、若しくば惡解して之を論難するは、固より深く咎むるに足らざるも、既に宗旨に歸依し、聖人を崇拜するの人士、若しくは特に日宗通と稱せらるる學者識者にして、之を誤り、往々最負の引倒に類する言說を敢てするものあるは、頗る憾なきに非らず、由來日蓮宗は絕對の信念を表とし、裏に深遠の哲理を含むものにして、聖人も亦矛盾せる智情兩性を調和統一するに、絕對の人格即ち强健なる意思の力を以てせるものなる故、此の矛盾と統一との意趣を咀嚼し諒解するに非らざれば、決つして其眞相を確むること能はずして、其宗旨に對しては或は迷信視し、或は偏理主義(コヂツケ)と爲し、又聖人に對しては其偉大なる人格を偏狹ならしむるに非らざれば、徒に阿諛し、却つて之を汚すが如き、一つとして其本領眞髓を闡明せるものあることなし、吾人不肖固より其任に非らざるも、此等敎界の恨事に對し敢て之を默視するに忍ひず、玆に本書を公にして以て聊か素懷を述べ、謹で先進後哲の是正を仰ぐと爾云

大正六年初秋

小野清秀識

因に本書は從來のそれと異なりて、可成著者の持論評說を少なくし、日蓮聖人の書述を多く引用し、又聖人以下の所說はたとひ卓論と雖も、餘り採錄せざりしは、謂までもなく聖人を中心とし、聖人を明らかならしめんとするの微意に出づ、爲に述作の體裁上不整の點あるも、亦止むを得ざるなり

日宗哲學

目錄

緒論……一
第一章　傳統篇
第一節　起源……九
第二節　內外相承……一四
第三節　系統史要……一七
第四節　日蓮聖人の一生……二六
第五節　分派と其由來……三二
第六節　派祖及中興諸師……三七
第二章　典籍篇

第一節　法華經……四四
第二節　開結二經……五一
第三節　天台三大部……五二
第四節　錄內錄外……六〇
第五節　未釋要書……六二

第三章　判敎篇
第一節　宗名と其の意義……六五
第二節　五時八敎……六七
第三節　自他二敎……七二
第四節　三種の敎相……七五
第五節　四重及五重の興廢……七八
第六節　宗敎五綱……八八

第四章　折伏篇
第一節　攝折二門……九四
第二節　諸宗無得道……九八
第三節　天台批判……一〇一
第四節　四箇格言……一〇八
第五節　現代評說……一二六

第五章　宇宙篇
第一節　十界互具……一三四
第二節　十如是……一四〇
第三節　一念三千……一四三
第四節　理具と事造……一五二
第五節　三諦三觀……一五六

第六章　人生篇
第一節　性修善惡……一六〇

第二節　善惡の標準……一六三
第三節　無常と常住……一六八
第四節　現世と未來……一七五
第五節　三世無礙論……一七九
第六節　人道論……一八四
第七節　求道論……一九六

第七章　佛陀篇

第一節　佛身觀の變遷……二〇一
第二節　三佛身觀……二〇八
第三節　三身相即論……二一四
第四節　久遠實成……二一七
第五節　本迹と分身……二二五

第八章　三秘篇

第一節　本門の本尊……二三一
第二節　人法勝劣……二四六
第三節　本門の題目……二五〇
第四節　本門の戒壇……二六二

第九章　成佛篇

第一節　三軌と四種……二六五
第二節　五種の妙行……二六九
第三節　六度と三學……二七三
第四節　自力と他力……二七八
第五節　祈禱と回向……二八二
第六節　六即の廢立……二八九
第七節　三得と三佛……二九二
第八節　娑婆即寂光……二九六

第十章　國家篇

第一節　國體と國王……三〇一
第二節　神祇と本迹……三〇七
第三節　王法と佛法……三一四
第四節　世界中心と其統一……三二三

日宗哲學目錄終

日宗哲學

小野清秀著

緒論

人法不二は獨り理論の上に於てのみ然るに非ず、佛敎と釋尊の人格とは相一致し、孔子と儒敎、基督敎と耶蘇、回敎とマホメット、孰れも然らざるはなく、淨土宗の敎旨と法然上人の性格は全然不可分的にして、弘法大師と密敎とは殆んど不離なり、親鸞聖人は死せるも、七百年來眞宗の宣傳は、悉く是れ親鸞聖人の動作に非らざるはなく、日蓮宗より日蓮聖人の人格を取り去らば如何、縱令敎義ありとするも、そは一箇の學說若しくは宗敎組織法の雛形に過ぎずして、宗敎そのものにはあらざるなり、左れば活ける宗敎を求めんと欲せば、敎義そのものよりは、先づ敎主たる者の人格を知らんこ

とを要す、日蓮宗の敎義は固より大乘佛敎の眞髓たる天台哲學を基礎とせるものにして、理論としては天台のそれと大差なしと云ふも不可なし、然れども其實際的方面卽ち宗敎としては、獨り天台のみならず、他の各宗と全然其趣を異にし、獨得の見地に立ち、特殊の方式を執れり、而して此等の特色は悉く是れ日蓮聖人の特性そのものゝ反射に他ならざるなり、此を以て吾人は本書に於て其敎義を解說するに先ちて、劈頭第一に聖人の人格を略叙せんとす

一、聖人の學識　小僧時鄕里安房の眞言宗寺院淸澄山に在りて、求聞持の法を修し、生身の虛空藏菩薩より大智慧を給はりし事ありと云ひ、南部北嶺にて數回大藏經を繙けり、八宗竝に一切經の勝劣粗是を知りぬと云ひ、又法然善導等かゝきをきて候はどの法門は、日蓮こは十七八の時よりしりて候と云へり、又大智慧の者ならでは、日蓮が弘通の法門分別しがたし云々と、其一生涯に屢々爲せし法論等にて、每に他宗の名師を壓せしが如き、人格の力もあるべけれど、其學識も亦拔群なりしを證すべく、世又聖人を以て奇激なる感情家の如く見做すものあるも、實は極めて理性に富みて、其著作の如きも、說の當否、見の廣狹は暫く措き、意義は總て徹底し居れり

二、折伏主義　聖人は當時王法亂れて逆臣權を恣にするを見て、此れ正法の行はれるに起因せりと爲し、又一方には僧侶の墮落を憤慨し、猛然として起ち、宗敎界にも政治界にも大革命を企てたり、念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊の格言も此に依て稱へられ、源平を王の門を守る犬二疋と云ひ、義時を謀反人と責め、民權太夫と罵り、而して自らは種々の大難出來すとも智者に我義破られずば用じとなり、其外の大難風の前の塵なるべし、我日本の柱とならむ、我日本の眼目とならむ、我日本の大船とならむと叫び、以て國家と敎法との廓淸を自任せり、故に其初めは他宗に對して敢て一宗を開かんとの意志には非らざりき、妙密御消息には、日蓮は何れの宗の元祖にもあらず、又末葉にもあらずと云へり。

三、信念と忠實　聖人は法華經を以て佛の本懷、諸經中至上のものと信じ、此に依つて卽身成佛を信じたるは謂ふまでもなく、此の法華經を信受せず、又眞言淨土の如く、他佛他經を以て法華經及釋尊以上となす者を折伏するは、釋尊竝に法華經に忠實なる所以と確信し、遂に自己は釋迦の御使なり、上行菩薩の再來なりとの自信を起すに至れり、蓋し末法の初め日本に法華經の本門を流布すべきは、佛勅に依れる上

行菩薩の天職なるに鑑みたるものなり、又其幾多の迫害あるべきも佛の豫言せし所にして、此の點は不輕菩薩のそれにも增したるより一層佛の豫約と經說の適中するを感じ、益々自己の使命の重大なるを確かむるに至れり、開目鈔に皆法華經のゆへなれば耻ならず、愚人に譽られたるは第一の耻なりと云ひ、御振舞書には此身を法華經に替ゆるは石に金を替へ、糞に米を替ゆる也と稱せしが如き、日本國に第一に富める者日蓮なるべし、命は法華經にたてまつり名をば後代に留むべし云々と唱へし等、以て如何に法華經に忠實にして、其信念の堅鞏なるかを知るべし。

四、國家主義　天晴れば地明らかに法華を識る者はそれ世法を得べきかとて、先づ宗教中心の國家主義に基づき、國家を宗教化せんとし、國は法に由て昌へ、法は人に因て貴し……先づ國家を祈りて須く佛法を立つべしとか、或は王法佛法に冥し、佛法王法に冥し等と唱へて、政教の一致を主張し、一切の大事の內に亡國を第一と爲し、敢て諸宗を蔑するに非ず、但此國の安泰を計るばかり也と云ひ、國家の不祥事災厄は總て國王政治家其他一切國民が正法に歸依せずして、却つて之を誹謗するより起るものと爲し、又正法法華の行者たる自己は、日本國の一切衆生の慈悲の父母也と信じ、日蓮は日本國の柱なり、日蓮は第一の忠の者なり、肩をならぶる人は先人にもあるべからず、後人にもあるべからずと誇れり、要するに聖人は國家を宗教化、否、法華經化せんとするに在り、從つて法華經行者、本門法華の開顯なる日蓮は、至上至高のものたりとすに在るなり。

五、抱負と理想　聖人の抱負の絕大なる、其希望理想の遠大なるは、一言にして之を盡せば、自己は末法時代に於ける世界の唯一人なり、又法華經を以て世界を征服し統一せざるべからずとするに在り、卽ち教主釋尊の御使なれば天照太神八幡宮も頭をかたぶけ、手を合て地に伏し給ふべき也と云ひ、日蓮は世間には日本第一の貧者なれ共佛法を以て論ずれば一閻浮提世界全體第一の富者也と稱し、日蓮は日本第一の法華經の行者、蒙古國退治の大將たり、於一切衆生中亦爲第一とは是也と叫び、日本國一同に日蓮が弟子檀那となり、我弟子等の出家は主上上皇の師とならん、在家は左右の臣下に列せん、將た又一閻浮提皆此の法門を仰がんと誇り、世界とは日本なり、日本は法華經有緣の地にして、八萬の國に勝れたり、世界第一の戒壇を此の國に立つべしと云へるが如き、皆以て其志の在る所を察すべきなり。

六、眞勇と熱烈　日蓮が弟子は臆病にては叶ふべからず、彼の經々と法華經と勝劣淺深成佛不成佛を判せん時爾前迹門の釋尊なりとも物の數ならずと云ひ、畜生の心は弱きををどし強きをおそる、當世の學者は畜生の如し、智者の弱きをあなどり王法の邪をおそる諛臣と申は是也、強敵を伏て始めて力士をしる、惡王の正法を破るに邪法の僧等が方人をなして、智者を失はん時は獅子王の如くなる心をもてる者必ず佛になるべし、例へば日蓮の如し云々と云ひ、日蓮が流罪は今生の小苦なればなげかしからずと稱し、何なる乞食になるとも法華經にきずをつけ給ふべからずと告げ、詮する所は天もすて給へ、諸難にもあへ身命を期とせん……法華經の肝心諸佛の眼目たる妙法蓮華經の五字、末法の始に一閻浮提に弘まらせ給ふべき瑞相に日蓮魁したり……今度頸を法華經に奉りて其功德を父母に回向せん、其餘りは弟子檀那等に配當すべし云々。

七、謙遜と至情　日蓮聖人を單に秋霜烈日の如き猛烈一方の者と見は偏見なり、聖人の孝道、聖人の慈心は世既に之を知れり、其謙遜至情は人能く之を察せず、今其一端を示さん、土牢御意に曰く、日蓮は明日佐渡の國へまかるなり、今夜のさむさに付ても、ろうのうちのありさま思やられていたはしくこそ候へ、あはれ殿は法華經一部色心二法共にあそばしたる御身なれば、父母六親一切衆生をもたすけ給ふべき御身なり、法華經を餘人のよみ候は口ばかり、言葉ばかりは讀めども心によまず、心にはよめども身によまず、色心二法共にあそばさるこそ貴く候へ、天諸童子以爲給仕刀杖不加毒不能害と說れて候へば、別の事はあるべからず、籠をばし出させ給はゞとく〳〵きたり給へ、見たてまつり見へたてまつらん、恐々謹言、又日蓮は泣かねども涙ひまなしと云へるか如き、又持戒破戒にも闕て無戒の僧、有智無智にもはづれたる牛羊の如くなる者也と謙遜し、日蓮も又かくせめらるゝ先業なきに非らず……何に況んや日蓮今生には貧窮下賤の者と生れ、旃陀羅か家より出たり……身は人身に似て畜身なり云々と稱せる如き、自ら責むるの甚しきものあり。

八、兩面と一貫　日蓮聖人は常に表裏兩面を有す、卽ち秋霜烈日の如き半面には、和氣靄々たるあり、熱烈火の如き裏面には綽々たる餘裕あり、諸宗を一切無得道として破斥する半面には、之れ悉く法華に誘引するの方便なりと認定し、國神は崇敬すべしと云へる半面には神祇は是れ自家の番人なりと稱し、國王を尊び國家に忠愛す

るべしと極力主張する半面には、亡國の呪咀あり、誇大自負、倨傲僭上を極めたる裏面には、自讓謙遜、乞食非人を以て自ら居れり、斯の如く一見矛盾の甚しきものあるも、此の矛盾は聖人の聖人たる所以、即ち聖人が常に自己を兩樣に考察し、二箇の立場を認むるに依れるものなり、例へば聖人が子孫臣民として國神國王國家に對する時は、飽迄崇敬忠愛を說き、又その如く自己も實行するを怠らざるも、若し夫れ法華經行者、絕對久遠の本佛たる釋尊の使者として、法華の大白法を流布すべしと爲す自信立場よりする時は、神は門番と均しく、法華を信せざる國家は穢土惡國にして、國王は惡王、政治家は亂賊たるものなり、之れと均しく日蓮宗の敎理にも亦與奪の兩門ありて、折伏攝受互に交叉せり、而かも其一貫せる大主義は、法華經中心にして、國家も王法も一切の宗敎道德も、悉く之を法華化せざれば止まざるに在り

以上の八項を以て日蓮聖人觀察の方式と爲し、又日蓮宗研究の指南と爲さば、或は以て其眞相を窺ひ、其妙味を體得するに幾からんか。

第一章　傳統篇

第一節　起源

三千年の昔、世界の先進國にして、當時文明の中心たりし印度の中央、恒河に沿へる加比羅衞の城主、淨飯王の太子に悉多なるものあり、人生問題に就て深酷なる懷疑を起し、煩悶の結果、遂に儲位妻子を捨てゝ出家せり、之れ正に十九歲の十二月八日の夜なり、爾來あらゆる學者宗敎家を訪ひ、其意見を叩きしも、一つとして宇宙の眞相人生の歸趣を解決するに足るべきもなし、玆に於てか印度在來の習慣に倣ひ、自ら苦行を積み、以て得る所あらんことを期し、六年の間日に一麻一米を喫するのみなりしが、後ち思らく、道は慧解によりて成じ、慧解は根に依る、根は食に依りて補はる、斷食苦行は道を得るの正因に非ずと、遂に河に浴して身を淸め、乳糜を求めて體を養ひ、氣力稍々回復して、心身頗る爽快なるを覺ゆ、卽ち佛陀伽耶なる菩提樹下金剛座に結跏趺座し、玆に六天の魔王と激烈なる戰爭を開始し、終に悉く之を降伏して、一夜初更の頃、大智眼を以て三界十方の無量世界を觀じ、其二更には神通力を以て三世の實相を觀じ、三

更には三界の因果を洞觀し、四更明星の出づると同時に、一切種智を得、三界は是我有なり、其中の衆生は皆我子なりと覺智し、此に無上菩提を成じて、三界の大導師と爲れり、此の時三千大千世界は六種に震動し、六金色の光輝は十方に輝き、諸天は蓮華を散じて供養し、王子悉多は大聖世尊無上正覺の釋迦牟尼如來と化し、一切衆生の爲めに不死の門を開き、久遠本有の生を始現せり、此れ實に釋尊三十歳の二月八日なりき。

史家は釋尊の誕生を今より二千四百七十四年前の四月八日にして、二十九歳出家、三十五歳二月八日成道と謂ふ。

釋尊は既に大覺成道せるも、三七日の間、猶樹下に在つて、得る所の殊妙の大法を自受法樂し、更に又說法の機と方法とを考へ、三七日の後ち遂に座を起ちて說法に着手せり、此の三七日の自受法樂は、所謂華嚴の說時にして、對機說法の最初は、史に徵すれば波羅奈斯國の鹿野園に於ける四聖諦の說法を以て、憍陳如等の五比丘を度せしに在り、卽ち阿含時の起首と爲す。

爾來約五十年、阿含、方等、般若、法華涅槃の順序に依りて、說法敎化を怠ることなく、其八十歳の二月十五日、拘尸那城附近なる驩蘭若河の堤上娑羅樹の間に於て入滅せり

史には成道第三十七年靈鷲山に於て法華經を說き始め、八年を經て第四十四年に至り完結せりと云ふ、此れ成道三十五年、說法四十五年間とするより來りし說なり。

釋尊の說法の順序及其用意に就ては、後章判敎篇に於て充分之を開明すべきも、今其大要を喩示して以て前後の脈胳關係を知るの便に供せん。

抑々佛敎は八千余卷の經論、八萬四千の法門、八家九宗と云ひ、今日日本に現在する佛書は十萬卷を超へ、十四宗五十四派の多きありて、其間正反相排し、紛々擾々殆んど收拾すべからざるものあり、卒然として之れに臨めば、其浩瀚なる、其複雜尨大なる、殆んと亡羊の歎あり、然れども釋尊の說法そのものには、自ら一定の秩序あり、脈胳あり、決つしてしかく混雜せるものに非ず、依つて今其理路を極めて了解し易からしめん爲めに、左に戰陣の一喩を設けて之を開示せんに。

第一自受法樂の華嚴說法は、自己の本營を撰定せしが如きものなり。

第二時の阿含卽ち小乘敎は、敵の情勢を探る爲め、卽ち被敎化者の機根如何を知らんとする斥候戰の如きものなり。

第三時の方等卽ち權大乘の法相宗の如きは、前衞戰なり。

第四時の般若卽ち權大乘の三論宗の如きは、主力戰の準備として、前衞諸隊を左右に移し、戰場を整頓するが如きものなり。

第五時の法華涅槃は、主力の接戰にして、其中法華は敵の本營を奪取し、涅槃は殘徒の處分を爲すが如きものなり。

釋尊一代の說法を終始連續せる一大戰鬪と見做す時は、法華經の說法が主力戰に恰當して、一切の戰鬪、一切の說法の中心眞髓たるは、固より明瞭なると俱に、複雜にして而かも相反的なる佛說も、其裡に自ら一貫の理路ありて、前々淺權、後々深實の修養的敎化的の階程を實現し居れるを察し得べきなり。

因に禪は不立文字を云々し、佛心を傳ふと云ふ、此は大本營の參謀と見るべきか、不立文字、不言說は如何にしても實戰者にはあらざるなり。

又淨土敎は明らかに別働隊にして、釋尊の一代より論ずる時は、(其宗敎として如何なる價を有すとするも)決つして中央主隊に非ざるは謂ふまでもなき所なりとす。

又眞言密敎は其議論としては、頗る偉大なるものあるも、茲は始めより釋尊の正系には非ず、與へて之を云へば一大援軍なり、奪つて謂はんか、佛敎に化裝せる新宗敎、若しくは開發革正せられたる新波羅門敎と云ふべく、又日本の密敎は、日蓮宗、眞宗のそれと同じく佛敎の名を冠せられたる、日本の新宗敎たるものにして、孰れも釋尊と相距ること、甚だ遠きと同時に、其敎權を奪ふも宗敎としての價値は、大なるものあり、要するに眞言と眞宗とは佛敎と云はざる方、自家の得策なり。

十萬の述作、五十餘派の佛敎も、其眞髓は法華經に在り、而して其法華經も乃至一切佛敎も詮する所は、悉く觀心の一句に在り、之れ禪家の不立文字を主張する所以なり、然れども經は棄つべからず、何となれば大聖佛陀が說法の規範と、吾人凡夫が成佛の範疇は、之れに據るを以て便と爲すものあればなり。

要するに法華經は佛敎の中心なり、此の經は印度にては、龍樹、天親等法華論を造りしも、弘く行はれず、支那にては慧文、慧思相受け、天台大師に至つて大に發揚せられ、日本の傳敎大師其後を承け、天台宗としての敎義は完成せり、然るに日蓮聖人は之を全然宗敎化し、時代化し、日本化して、以て日蓮法華宗を大成せるなり。

第二節　内外相承

日蓮宗の法脈相承に二種あり、曰く外相承、曰く内相承是なり、外相承とは印度支那日本の三國に亙りて、獨り法華を宗とし、之を宣傳せし者を撰んで、左の系統を立つ。

本師……釋迦牟尼佛――迹門付囑授職灌頂……迹化藥王菩薩(印度)――天台智者大師(支那)――傳敎大師(日本)――日蓮大菩薩(日本)

又内相承とは、直ちに法華經の法師品神力品に依り、多寶塔中、本門内證眞實の法脈相承の旨を示して、左の系譜を立つ。

本師……釋迦牟尼佛――本門付囑授職灌頂……本化上行菩薩(天竺授職灌頂)――日蓮大菩薩(日本授職灌頂)……以下

此の法脈に付て日蓮聖人は左の如く論せり。

釋迦如來靈山事相の常寂光土に於て本眷屬上行等の菩薩を召し出して付囑の弟子と定め、寶塔の中の多寶如來の前に我が十方分身の諸佛を集め上の證人と爲て結要の五字を以て之を付囑す、三世の諸佛之を誹ふべからず、何に況んや菩薩二乘人天等をや、問ふ本眷屬地涌の大士親しく靈山寂光土に於て結要の付囑を受けて末代弘經の時何れの土に於て付囑を宣るゝや、答ふ付囑の法は卽ち妙法なれば付囑の土も亦寂光土なり、爰に知らぬ末法弘經妙法の者の其の土豈に寂光ならんや。

傳敎大師云く淺きは易し深きは難し釋迦の所判なり、淺きを以て深きに就くは丈夫の心なり、天台大師は釋迦に信順し法華經を助けて震旦に敷揚し、叡山の一家は天台に相承し法華宗を助けて日本に弘通す等云々、安州の日蓮は恐くは三師に相承し法華宗を助けて末法に流通す、三に一を加へて三國四師と號す。

問ふ法華宗の名言之れ同じ何ぞ天台を高祖と爲さゞるや、答ふ今外相は天臺宗に依るが故に天臺を高祖と爲し、内證は獨り法華經に依るが故に釋尊上行菩薩を直師と爲すなり……諸宗皆内證を以て師資相承の血脈を建立す、今當家の相承大旨天台の相承に附順すべしと雖も、内證眞實を以て釋尊上行菩薩を高祖と爲し奉るのみ。

問て云く天台傳敎の弘通し給はざる正法ありや、答て曰く有り、求て云く何物ぞや、答て云く三あり、末法の爲に佛留買き給ふ、迦葉阿難等馬鳴龍樹等天臺傳敎等

の弘通せさせ給はざる正法なり、一には本門の教主釋尊を本尊とすべし、二には本門の戒壇、三には人ごとに有智無智をきらはず一同に他事をすてゝ南無妙法蓮華經と唱ふべし、云々。

又田中智學氏は、三國に亙つて、眞正なる法華經の行者は四人にして、卽ち印度の釋尊、支那の天台、日本の傳敎、日蓮なり、其外に意見講說上に於て、正統に貢献したるものは、之が傍系として功績を認むべしとて、之を圖表せり、其表左の如し。

- 釋迦牟尼佛（天竺）
  - 龍樹（天竺）（有『法華論』不到）
  - 天親（天竺）——（『法華論』）
  - 須利耶蘇摩（沙勒）——羅什（龜茲）——道生（支那）
  - 慧文（支那）
    - 慧思（支那）號南岳大師
      - 聖德太子（日本）（『法華義疏』）
    - 天台大師（支那）諱智顗、字德安（『玄義』、『文句』、『止觀』）
      - 道宣（支那）——鑑眞（支那、歸化日本）
      - 章安（支那）諱灌頂、此間三傳至湛然
      - 妙樂（支那）諱湛然、號荊溪尊者
      - 道邃（支那）
      - 行滿（支那）
    - 傳敎大師（日本）諱最澄
      - 義眞（日本）叡山第一座主
      - 圓澄（日本）叡山第二座主正統斷絕
      - 蓮長法師（日本）後更日蓮

第三節　系統史要

支那南北朝の時代に北齊に慧文禪師あり、龍樹菩薩の大智度論中に說ける三智（一切智と道種智と一切種智を謂ふ、卽空假中の三智なり）一心中得といへる文と、中觀論の因緣所生法、我說卽是空、亦名爲假名、及び名中道義といへる偈文に依りて、恍然大悟し、頓に一心三觀の深旨に達せり、是れ天臺法華宗の發源なり、左れば天臺の法門は、龍

樹の系統にして、即ち三論宗を一段向上の域に進化發達せしめたるものなり、文師は自身了悟の心觀を以て、自ら之を南岳の慧思禪師に授けたり、思師は元魏南豫州武津の人にして、魏の宣武帝の延昌四年(梁の天監十四年十一月十一日を以て生れ、而して北齊の天保五年より天統四年に至るまで、十四年間、大蘇山に在て衆の爲めに講說し、陳の光大二年(北齊の天統四年)大蘇を去て南岳に入り、十年間此に於て徒を聚めて敎化し、陳の大建九年六月廿二日壽六十三歲にして入寂せしが、道德高邁、一世に卓絕し、法華三昧を發得して、圓敎十信の位に進み、六根清淨を得たり、其著書は四十二字門、無諍行門、大乘止觀、安樂行義、立誓願文等なり。

天臺智顗師は梁の大同四年を以て荊州華容縣に生る、十八歲にして出家し、二十歲の時に具足戒を受け、陳の天嘉元年、時に年二十二歲、慧思禪師の抗州大蘇山に在りて說法敎化せらるゝを聞き、即ち往て謁す、思師相見て笑て曰く、昔日靈山同聽「法華」宿緣所追、今復來矣と、依りて敎ふるに法華三昧を以てす、顗師、敎の如く心を硏き、二七日を經て、法華經藥王品の諸佛同讚の文に讀到り、豁然として法華三昧を發得せり、其證悟する所を以て思師に告ぐれば思師歎して曰く、非汝弗證、非我莫識、所入定者、法華三昧前方便也、所發持者、初旋陁羅尼也、縱令文字之師、千群萬衆、尋汝之辯、不可窮矣と、前方便と云ふは、地上の眞修に簡ひたる言にして、正しく觀行五品(天臺に六即位を立る中の第三位なり)の位を指す、乃ち顗師は此時に右の位に證入せしことを知るべし、持と云ふは、具に總持と云ふ、陁羅尼の翻名なり、經に三種の陁羅尼を說く、其中の第一を旋陁羅尼と云ふ、(第二は百千萬億陁羅尼、第三は法音方便陁羅尼なり)即ち空智なり、顗師は年三十歲にして、思師の許を辭し、金陵の都に出て、大に講筵を張り、八年の後、即ち陳の大建七年、三十八歲にして天臺に隱れ、專ら修行を凝せり、然るに其後十年餘を經て、陳主が數々使を遣して懇請せしかば、止むを得ず再たび金陵に到り、帝王百官の爲めに、仁王經智度論等を講せり、陳の禎明元年、光宅寺に於て法華文句を講ず、時に年五十歲なり、隋の開皇十一年、晉王廣後に帝位に即き煬帝と云ふ)の爲めに菩薩戒を授く、王仍て顗師に智者の號を與ふ、後世顗師を尊て智者大師と稱するは是がためなり、開皇十三年、荊州の玉泉寺に於て法華玄義を說く、其翌年又同寺に在て摩訶止觀を說けり、時年五十七歲なり、此の法華玄義と摩訶止觀と、前の法華文句を併せて、所謂三大部となす、玄義は五時八敎の敎判を開陳し、文句は出世本懷たる妙經の深旨を解釋し、止觀は

已心中所行の三諦三觀の解行を詳說したるものにして、顗師の立敎開宗の根本的講義なり、然るに其講演は唯一回に止まらず、其次第も亦唯に今の所列の如くならざるべし、蓋し今の所列は其編輯者たる章安尊者が所聞の分のみを、其年時に從へて記したるものならん、顗師は摩訶止觀の講演を畢へて、三年弱を經て、開皇十七年十月に至て、疾を發し、同十一月廿四日に入滅せり、春秋六十歲なり。

顗師は法華玄義及文句、止觀等の講演を爲し、敎觀二門善美周足し、以て大に宗風を揚げたれども、是皆所謂說法即ち口述なり、曾に右三大部のみ然るに非ず、他の述作も、多くは口說に止り、自ら筆を執りて記錄せるものは、頗る稀なりしが、門下に章安尊者灌頂あり、常に顗師に從ひ、其講演を親しく聞き、悉く之を筆錄編輯せり、章安尊者は陳の文帝天嘉二年に生れ、年二十歲にして具足戒を受け、後ち顗師に謁して侍者となり、常に函丈に侍せり、その法華文句を金陵の都に聽きしは、二十七歲の時なり、顗師入滅の後、盛に遺說を講敷し、大に師德を顯揚して、一時の名匠皆風靡せり、而して唐の貞觀六年八月、壽七十二にして入寂せられしが、其法燈を嗣げる者を法華尊者智威となす、智威の下に天宮尊者慧威あり、慧威の下に左溪尊者玄朗あり、此三人は皆守成の賢者なり、師練の諸宗志に、二威緘默而守といへり、玄朗の次に出たるものを荆溪尊者湛然となす。

然師は台宗中興の大宗匠にして、唐の睿宗の景雲二年に生る、玄宗の開元十五年、十七歲にして始めて玄朗の門に入れり、當時佛心、華嚴、眞言、法相等の諸宗の名匠相繼て出で、各々其宗風を振ひ、天臺の敎觀漸く其光を收めんとす、是に由りて、然師業成るの後、自ら回復を以て任じ、每に言ふ、將欲取正舍予誰歸と、師は專ら著述を業とし、法華玄義に釋籤を作り、文句に記を製し、摩訶止觀に輔行を著して、大に顗師の微意を光顯し、又金剛錍論を造り、止觀義例を著はして、以て他の謬見錯解を抉斥し、遂に能く宗運法圖を將頽の際に回復せり、而して德宗の建中二年、壽七十二歲を以て入寂せり、以上北齊の慧文より此の荆溪湛然に至る八世に、龍樹菩薩を加へて、是を天臺法華宗の九祖と稱す、其中荆溪然師は、之を顗師よりすれば、第六世に當るを以て、之を六祖と稱して尊崇す、荆溪然師の下に、興道尊者道邃あり、是實に日本國の傳敎大師の師なり。

次に日本に於ける法華の傳播を尋ぬるに、孝謙天皇の天平勝寶六年、鑑眞和尙、天臺宗の章疏を賫らして來朝せり、其隨從の門人、法進、曇靖、思託、如寶等は、皆天臺宗の學者

なり、然るに和尚來朝の時は、荆溪湛然の三大部の記述未だ出でざるの時なれば、其實らす所の章疏は唯天臺顗師の著書のみなり、其後、道璿律師來朝せり、是亦天臺の學匠なりと云ふ、此の如く流傳夙に權輿ありと雖も、比叡山を闢きて、正く一宗を創立せしは卽ち傳敎大師最澄とす、傳敎は神護景雲元年の誕生にして、十八歳の時得度し、二十歳にして具足戒を受け、夙に心を臺敎に寄せ、乃ち南都に適きて、鑑眞和尚の徒に就きて敎觀を精研し、三大部を講ずること一遍已に畢り、更に復之を講ずる半に至りて入唐せり、卽ち桓武天皇の延曆二十一年、渡海の勅旨を蒙り、二十三年彼の國に入り、先づ天臺山國清寺に至り、道邃和尚に謁して、一宗の玄旨及び菩薩戒を受け、佛隴寺の行滿座主(是人も道邃と同く荆溪の門人なり)に遇ひて、法要經書を授かり、尋て龍興縣に赴き、順曉阿闍梨に就て眞言の秘法を習し、又唐興縣に往て、脩然禪師に參して北宗の一派牛頭山法融禪師の禪を傳へ、二十四年八月に歸朝せり、歸朝の後、其所傳の臺密禪戒の四宗を比叡の一山に於て弘通せり、斯の如く傳敎は臺密禪戒の四宗を同一弘傳するを以て、天台宗と號すと雖も、從來支那流傳の臺敎とは頗る其趣を異にする所あり、依て古來之を日本天臺と稱して、支那の台敎に簡別せり。

斯くて傳敎は嵯峨天皇の弘仁九年三月、表を上りて圓頓大乘戒壇を比叡山に建てんことを上奏せり、圓頓戒は是亦傳敎が曾て道邃和尚より傳授されし所にして、日本に在りては從來未だ弘まらざる大乘不共純圓獨妙の極戒なり、朝廷其表を南都の諸寺に下して可否を議せしめしに、護命等表を抗て之を斥け、殊に東大寺の景深は、迷方示正論を著して二十八失を摘發せり、玆に於て翌年傳敎は顯戒論三卷を述して表進し、博く大乘戒の證を引けり、又顯戒緣起を作て彼の二十八失を反駁す、其詞激切著明なり、朝廷其書を又南都の諸寺に下したるに、敢て問議するものなかりしと云ふ、然るに傳敎は未だ建壇の勅許を得るに及ばずして入寂せり、年五十六歳、實に弘仁十三年六月四日なり、傳敎の日本佛敎界に與へし功業は、今一々縷述するの遑なし、宜く本傳に就きて見るべし、門下に義眞(修禪大師)圓澄(寂光大師)光定(別當大師)圓仁(慈覺大師)等あり、其中、傳敎の附囑を受け、遂に叡山第一の座主位に居るものは義眞なり、此の師は傳敎の侍者として共に入唐し、始終傳敎を輔翼せし人なり、傳敎入寂の翌月、圓戒弘布の勅許あり、其後、戒和上となり始めて大戒を傳授せしも、亦此の人なり、淳和天皇の天長十年、五十五歳にて入寂せり。

降て後深草天皇の建長五年四月、日蓮聖人始めて本門の妙法蓮華經を弘通す、是れ他なし當時佛敎が佛陀出生の本懷に背くを慨し、專ら釋尊說敎の規則を遵奉し、釋尊所立の宗を祖述するに在りて、殊更一宗を開くの意には非らざりしも爾來信徒日を逐て倍蓰し、寺院年を追て增設す。

後醍醐天皇の元亨年間に日蓮聖人の法孫日像、宗祖の遺囑を奉して帝都に弘通し、大に法運を啓き、光明天皇の御代に至り漸く盛に、後花園天皇の嘉吉寛正の頃に至り其盛を極む、後奈良天皇の天文五年天台宗と宗論の末彼徒兵を起し火を放て侵擊し、帝都日宗の諸本山悉く焦土となる、世に之を天文法亂と云ふ。

後陽成天皇の文祿慶長年間に京都妙覺寺の日奥不受不施の異議を唱へ、後水尾天皇の寛永年中、池上本門寺の日樹再び之を主張し宗內大に動搖し、本宗の大山巨刹數十箇寺之が爲めに廢滅す、天文法亂と兩度の不受不施難とを本宗の三大厄と稱す、蓋し是時開宗を去ること三百餘年、宗制(所謂折伏)久くして弊を生し、是の如き害毒を釀出するに至れり、是に於て日重、日乾、日遠の三師首として關東關西に十數箇所の檀林を創立し、大に天台學を興して宗乘を扶け、時弊を矯正せしを以て學風一變し宗規肅正す、世に之を中興三師と稱す、尋て草山元政(京都に生る、山城國紀伊郡深草瑞光寺開山)等の諸師輩出し、世と共に進化し、宗風大に振ひ、海內に寺院を增設すること其數甚多し、信徒漸く全國に遍く頗る昌盛を致せり。

爾來三百年宗門漸く治平に慣れ、諸檀林共に軌則を墨守して變通を知らず、學者は天台學に流れて宗學あるを忘れ、大に立宗の原意を失す、是に於て近年一妙院日導、優陀那院日輝等大に之を慨嘆して盛に宗學を喚起せり、明治初年敎部開省已來、從前の諸檀林を廢止し、更に宗敎院を設立して學制を一變し、專ら宗乘を研究せしむ。

佛敎統一論に曰く、智者、傳敎、日蓮の三家を比較すれば、その間に多少の開發的出色點あり、先つ傳敎の智者に異なれる所は、彼は日本に天台宗を創むと云も、天台の敎理を中心と爲し、此に密敎と禪宗とを調和せしめ、更に之に加ふるに圓頓戒を以てして、一人にして四種の佛敎と併せ弘むる所にあり……日蓮上人は大にその主義を改め、法華以外のものは是非曲直を問はず、總て排除し去りて毫も採らず、縱令法華經と雖も、その中に本門と迹門とを分ち、その迹門を廢し專ら本門に依て自家の宗義を立てんとす……日蓮上人は自らは我れ法華經を外にしては、更に何等の說と雖も、一も應

用せず、又應用すべき必要なしと云ふ、然れども彼れが獨得の考按に出でたる本尊論は、余を以て之を觀るに寧秘密部に屬すべき蓮華三昧經の說に依るものにあらざる乎……日蓮上人は理の一念三千論を以て迹門となし、事の一念三千說を以て本門と爲し、自ら之を擴張せんとす、然れば卽事而眞を以て根本義となせる密敎を排斥すべき謂れなし……その布敎の方法として、竊かに淨土敎の先進諸師に倣ふ所あり……稱名を以て唱頭に改むれば淨土敎は卽ち日蓮宗なり……又之に反して唱頭を以て稱名に改むれば日蓮宗は卽ち淨土敎なり……本門の本尊は密敎に於ける大日如來、及び淨土敎に於ける阿彌陀如來と彼此その間に差異なく……差異は名に存して實に存せず……日蓮宗一變すれば淨土敎となるべき性質のものなり云々。

第四節　日蓮聖人の一生

神武紀元千八百八十二年、人皇第八十五代後堀河天皇の貞應元年(實は承久四年也、其四月十三日改元)二月十六日、安房國長狹郡東條鄕市河村小湊の海濱に於て、日蓮聖人は誕生せり、父は貫名重忠、本姓は三國、聖武天皇の後裔なりと云ふ、母は淸原氏、名は梅菊、夫婦常に日輪を拜して良兒を得んことを祈り、或時母は日輪蓮華に乘つて其懷に入ると夢みて姙娠せりと傳ふ、幼名は善日麿。

善日麿は釋尊の生れ替にして、釋尊は我皇祖天照皇大神の生れ替りなり等云ふ說もあり。

聖人が誕生の前年卽ち承久三年は、所謂承久の役ありし年にて、其七月には三上皇遷幸し、十二月朔日後堀河天皇卽位あり、又翌貞應二年には禪祖道元禪師入宋し、其翌三年には親鸞聖人淨土眞宗を開く、又支那にては蒙古と宋と金と爭鬪の最中に當れり、西洋にては獨逸フレデリキ二世、英國ヘンリ三世、佛國ルイス三世時代前後にして、第四回十字軍の頃に當れり。

十二歲の時善日麿は、同郡眞言宗寺院淸澄山に上り、法印道善に師事し、藥王麿と改名し、延應元年十月八日十八歲にして、薙髮受戒し、是生房蓮長と號す(或は云ふ薙髮は十六歲にして、十八歲、は出遊の年なりと)斯くて蓮長は當時政治の中心たりし鎌倉に出で、二年餘を玆に過ごし、夫より南都北嶺に遊學を試み、諸師の宗義に疑を懷き、大藏經を通覽すること五回、遂に釋尊所立の本義を發悟し、本門の妙法蓮華經を弘布するを以て自己天賚の使命なりと、確信し、久遠實成の釋迦牟尼佛の使者、地涌上行菩薩

の再來なりとの抱負を以て、誤れる諸教、墮落せる諸宗を折伏して、法華一乘の實教を闡明せんことを期し、後深草天皇建長五年鄕里に歸り、其四月二十二日より入定し、同二十八日に至り、清澄の山上旭の森の高丘に於て、旭日に向ひ、南無妙法華經を高唱し、同時に名を日蓮と改めたり、此れ實に三十二歲の時なりき。

斯くて日蓮は清澄山に於て說法を開き、念佛無間の折伏を始めければ、滿堂の聽衆は固より、地頭東條景信も日蓮を以て狂せりと爲し、將に之を斬らんとせしかば、舊師道善は密に山後より脫せしめたり、同年八月日蓮は鎌倉に赴き、名越の松葉ケ谷に庵を設け、法華堂と稱す、文應元年七月、立正安國論を撰述し、幕府の執權北條時賴に呈し、佛法の正邪を論じ、捨邪歸正を勸む、時賴聽かず、此の前後日蓮は日々往來繁き街頭に出で、四箇格言を以て盛に辻說法を行ひければ、諸宗の者頻りに之を惡み、遂に執政を動かして伊豆國伊東に謫せしむ、此れ弘長元年五月十二日なり。

日蓮は伊東に在ること約三年、弘長三年二月二十二日赦に遇ひ、其十月鄕里に歸る、偶々母の死に遇ひ悲哀に堪へず、誦經祈誓せしに、母乃ち蘇生し更に四年の命を延べしと云ふ、斯くて日蓮は再び鎌倉に赴かんとて東條の小松原を過ぎりしに、地頭東條景信は數百騎を率ゐて之を要擊し、法弟日曉、檀越工藤吉隆等は戰死し、聖人は眉間に三寸の疵を負ひたるも、漸く免れて再び鎌倉に出で倍加の奮勢を鼓して、益々各宗を痛擊し、併せて幕府の失政を論難せり。

文應元年安國論を以て他國侵來の豫言を爲せしより九閱年、文永五年果して蒙古の使者來る、聖人即ち內憂外患の原由を論じ、愈々安國論の旨趣を諫曉し、又奉行宿谷先則を經て、各宗との公開對決を求む、同八年大旱魃あり、律僧極樂寺の良觀雨を祈る、聖人豫め其効なきを云ひ、効驗の有無に依つて相互に改宗入弟を約す、然るに良觀の祈雨其驗なし、聖人頻りに改宗を迫る、良觀憤て北條の家臣賴綱に結び、密に之を陷れんとす、聖人は斯の如き情勢にも關せず、其九月更に狀を以て幕府に極諫す、茲に於てか其月十日問注所の糺彈と爲り、越えて十二日龍ノ口に於て死刑に處すべき宣告を受けたり。

龍ノ口の法難は大雷風雨の爲めに果さず、北條氏も亦此の天變に危疑を懷き、遂に死一等を減じて佐渡に流せり、當時法弟日朗は屢々師に代て斬れんことを迫り、遂に土牢に繫がる、斯くて文永八年十月十日、聖人は其假宿たる依智の鄕本間の邸を出立

して佐渡に向へり、佐渡に於ては曾て順德天皇に供奉せし念佛歸依者遠藤爲盛の迫害を受けんとせしが、聖人は忽ち之を說伏して、爲盛夫婦は無二の信者と爲り、阿佛房日得と稱し、後年九十の頹齡を以て三度まで身延に參覲せし程なりし、此の他念佛信者の壓迫、寒氣、衣食の缺乏等幾多の艱苦は名狀すべからざるものありしが、聖人は毫も此れに屈することなく、或は守護本間重連が立會の公開場に於て、近國諸宗數百人の僧侶を論壓して、折伏と敎化と交々其績を收め、本間一族始め多くの歸依者を得るに至り、又一方には開目鈔、本尊鈔等を著し、十界の大曼荼羅を圖し出して、具體的に法華經主義の敎行觀心を表彰し、本化の妙宗是に於て大に顯はれたり。

故鄕淸澄山の向日唱題以來既に二十年、四大難即ち伊東流罪、東條刄難、龍口極刑、佐渡遠流を始め、其他幾多の災厄は、聖人をして益々其自信を確かめ、抱負を高上せしめたり、蓋し法華行者が幾多の迫害を受くべきは、既に經文中不輕菩薩に依て豫告せられたる所にして、聖人は此等の災厄を以て、一方には經說の誤りなき徵證として、之を信じ之を弘布する緊要と其時機に適せることを體驗し、又一方には自己は當年の不輕菩薩なりとの自覺を以て、意氣沖天の概あると同時に、又災厄を蒙るは自己過去の

因業に依るものなれば、今其業果を甘受すると同時に、一切に代つて忍受屈容、以て懺悔滅罪の標的たらんとの、謙遜、犧牲的悲念を以て身を率せしの宏量美德は、千古其比なき所なりとす。

斯くて聖人の內亂外寇の豫言、着々適中せしより、鎌倉幕府に於ても漸く異議を起し、文永十一年二月十四日赦されて、其四月鎌倉に至り、同八日柳營に於て北條賴綱に對面せしに、賴綱慰諭して曰く、今後折伏を歇め、天下泰平を祈らば、城西に愛染堂を建て、地領千町を寄附して、衣鉢の資に供せんと、聖人は毅然として之を斥け、幕府邪法を捨てずんば一切叶ふまじとて、遂に最後の極諫を呈し、袂を拂ふて去れり、然れども時の執權北條時宗は遂に宗牒を與へたり。

同年六月十七日、甲斐國身延山に入て復世に出でず、一方には將來本化妙法弘通の根本道場として、本門の戒壇の實現を望み、以て世界の中心と其統一の基礎を定めんことを努め、又一方には法華經の根本道場と相應すべき神聖の國體を保有せる大日本の安康を祈り、且つ邪敎を斥け、正法を以て此の國土を淨化せんことを默禱し、從來の逆化折伏に對する懺悔滅罪と、大法弘通世界統一萬年の理想成就とに、神を勞する

こと茲に九年、弘安五年九月身延より武州池上に至り、其十月十三日池上宗仲の邸即ち今の本門寺に於て入滅す、年六十一、法臘四十四、荼毘して身延に葬る、此れ實に元艦覆滅の翌年なり、聖人滅後七十一年、後醍醐天皇勅して大菩薩號を諡る、聖人の一生は之を十五年の煩悶苦學、二十年の逆化惡戰、十年の默禱淨化の三段に劃すべく、末法正法の大導師として、法華行者上行菩薩の再來として、遺憾なく其抱負を發揮し、其大使命を全うせり。

第五節　分派と其由來

法華經二十八品を大に分て二と爲す、前十四品を迹門とし、後十四品を本門とす、而して日蓮聖人が二門の判釋に於ける、或は本迹一致雙用の說あり、或は本門を以て勝とし、迹門を以て劣と爲して、痛く其高下を談せるあり、或は本門の中に於て但一品二半のみを取て、他は皆未得道敎等と斥くるあり、或は但八品に限ると曰へるあり、其說多岐殆ど一準ならず、其本迹雙用の說に據るものを一致派と稱し、本勝迹劣の說を執るものを勝劣派と稱す、勝劣派又分れて五派となる、曰く興門、曰く本成、曰く妙滿、曰く八品、曰く本隆、一致派を合せて六とす、一致派又別に不受不施派を出す、不受不施派に又二を分つ、曰く不受不施派、曰く不受不施講門派是なり、不受不施とは謗法者の施物を受けず、又謗法者に財物を施さゞるの謂なり、若し之を爲すものは、則ち聖人の敎誡に違ふと云ふ、謗法とは法華經を信せざるものを云ふ、此の說一致派と義を異にす、是に於てか終に一派を分立す、講門派は不受不施と主義大同小異なり、左れば日蓮宗は現在八分派を見るに至れり。

明治五年、政府は一宗一管長の制を立てられ、從來の一致勝劣兩派合同して其制を奉じ、七年に至り兩派に管長を置くことゝなりしが、九年一致派管長新居日薩、但に一致に偏し勝劣に執するは、共に宗義の正統に非ることを論じ、官衙に强請して、遂に一致派の名稱を廢し、單に日蓮宗と稱することを得たり、尋で勝劣派も一致の派名を廢する上は、勝劣の派名を廢すべしとて、官に請て又單に日蓮宗と稱するに至れり、然るに勝劣派は後幾日もなくして、五派分立し、各々管長を設くることゝなれり。

今左に諸派の分流を圖表し、次に各派景況の一般を示さん。

- 日蓮宗八派
  - 舊一致派
    - 日蓮宗
    - 不受不施派
    - 同講門派
  - 舊勝劣派
    - 興門派
    - 本成寺派
    - 妙滿寺派
    - 八品派
    - 本隆寺派

左の序次は立派の年順に依る。

第一日蓮宗

現今四十四箇本山あり、甲斐國久遠寺を總本山と稱し、武州池上本門寺、京都妙顯寺、同本國寺、下總國中山法華經寺を四大本山と稱し、其餘三十九箇寺を單に本山と稱せり。

第二興門派

該宗は日蓮聖人の弟子日興を派祖とし、法華本門中に於て、壽量の一品と湧出品及分別品の兩半品を以て、末法下種正依の經典と定め、其餘の諸品は皆小邪末覆(小乘教、邪見教、覆義教)の教と云て、之を用ゐず、本山は駿河國富士大石寺等の八箇山なり。

第三本成寺派

該派は日蓮聖人の法孫日印を派祖とす、而して該派は法華經中にて、前十四品を迹とし劣とし、後十四品を本とし勝とす、又本門の中にも湧出品の爾時釋迦牟尼佛告彌勒菩薩より、分別功德品前偈の訖までを極勝とす、是れ則ち壽量品と前後の二半は、本有常住を明して、始成を存せざるが故なり、是の如き勝劣ありと雖も、本門開會の意に住して、一部八卷二十八品を讀誦し、或は方便品壽量品等を讀誦するを以て皆助行とし、本門壽量品の肝要、南無妙法蓮華經を唱るを以て正行とす、是れ即ち他派の本迹を一致とし、或は本迹超絕の題目と云ひ、或は本迹傍正等と立る義に同じからず、總本山は越後國蒲原郡本成寺にして、京都本禪寺は派祖遺魂の道場たるを以て本山と稱す。

第四妙滿寺派

該派は日什を派祖とす、法華經一部を正依の經とし、本勝迹劣從淺至深と云ひ、又本門中に於ても勝劣淺深を立て、壽量品を以て深勝とし題目を成佛下種の最深秘法と稱す、本山は京都妙滿寺なり。

第五八品派

該派は日隆を派祖とす、日隆は京都妙顯寺日霽の徒弟なりしが、日霽の歿後別に一派を立つ、法華經本門中に於て、涌出品より囑累品に至る、八品を以て正依の經とし、但信口唱を成佛の正因とす、本山は京都本能寺、妙蓮寺等の五箇山なり。

第六本隆寺派

該派は日眞を派祖とす、法脈は日蓮聖人の嫡孫、日像の玄孫にして、即ち妙本寺（今の京都妙顯寺）二祖大覺大僧正の曾孫なり、分派の原因は開迹顯本の法華經に依て、久近本迹の勝劣を立て、本果の妙法を以て下種の正主とす、是れ則ち他と俱ならざる所以なり、本山は京都本隆寺なり。

第七不受不施派

該派は日奥を派祖とす、文祿四年日奥、京都妙覺寺に在て、始て之を唱へて、豐太閤の千僧供養に與からず、寛永七年武藏國池上本門寺の日樹、再び此義を主張し、寛文五年平賀の日述、日浣、恩田派と稱し、日明、日禪等悲田派と稱し、又共に不受不施を唱ふ、明治九年四月、釋日正の請に依て、始て之を公許す、本山は備前國妙覺寺のみにして末寺なし、但敎會所十餘箇所あり。

第八不受不施講門派

該派は日講を派祖とす、明治十五年、別派獨立の允許を得、該派は敎會の組織にして、別に寺院を建立せず、備前國に龍華敎院あるのみ。

第六節　派祖及中興師

日興白蓮阿闍梨と號す、姓は橘氏、甲斐國鰍澤の產なり、初め駿河國岩本實相寺の嚴譽に就て、密乘を稟け、後宗祖に歸して專ら宗乘を攻め、大に宗祖の化を翼し、宗祖の滅後檀越沈木井實長と持論合はず、去て富士大石寺を創めて居る、正慶元年二月七日寂す、年八十八、之を興門派の開祖とす。

本成寺派祖日印（或云朝倉氏）文永元年、越後國三島郡寺泊に誕す、八年十月宗祖佐州に謫

せらる時、偶〻寺泊に宿す、印時に八歳、其夜宗祖の後に在て臥す、祖夢らく摩訶止觀第一卷を踏むと、是に由て摩訶一丸の名を授く、後同郡石瀬村青龍寺(天台宗)の智觀法橋の弟子となる、師智辯縱横學業群に秀て、名聲遠近に流ふ、永仁二年三十一歳にして、相州鎌倉に遊び、宗祖の上足日朗、摩訶止觀を講ずるを聞き、大に省する所あり、即ち舊宗を捨て、朗の門に入り、名を摩訶一阿闍梨日印と改む、五年越後國蒲原郡大藻の莊薄曾根村に精舍を營み、青蓮華寺と稱す、德治元年四十三歳、同郡東島村に妙蓮寺を草創す、延慶二年四十六歳、越中國天台の學匠淨信法印、舊宗を捨てゝ歸投す。(後日順法師と改む、越中國に本法寺を建つ海中出現法華經二十八品の繪像を感得して該寺に納む)正和三年五十一歳、其師日朗を青蓮華寺の初祖に仰ぎ、且つ山門の號を請ふ、是に因て日朗長久山本成寺と改め、更に自彫の形像を贈て自ら詣るの意を表す。(日朗を初祖とし日印を開祖とす、元應元年九月十五日五十六歳にして鎌倉北條高時の殿中に於て法論し悉く權宗を摧破し問答勝利を得たり)元應二年五十七歳、大光山本國寺を鎌倉松葉谷に創立す、嘉曆二年六十四歳、本成寺を以て、本門三大祕法の根本道場と定め、三箇の重寶を納め、且つ本成寺置文を撰述して、之を越後に送る、其置文に云く「右當寺者、後五百歳之正法本門之三大事之所住道場根本也、然則奉歸仰先師之御遺法、門徒之道俗諸國貴賤、偏守此旨、彼寺可爲門家之棟梁也、若經卷所住、此處則是道場、諸佛於此轉於法輪」云云、嘉曆二年十月八日日印宗祖入滅已來茲に四十六年を閲して、始て本成寺を以て三箇重寶の所在とし、一宗の基礎全く茲に定る、其後舊師智觀法橋數條を掲げて、宗祖の法義を難問す、師一一經論を引て之に答ふ、觀遂に歸伏して改宗す、師齒既に高く、本成本國の兩寺を以て、嫡弟日靜に付囑し、兩寺統一の貫主と定む、(其後所以ありて本成寺に於ては日靜を除歴す)嘉曆三年十二月二十日、六十五歳、鎌倉に於て入滅す、遺骸を越の妙蓮寺に葬る、(或云越後金津妙蓮寺にて化す)

日陣童名を門一丸と云ふ、佐々木高綱の末裔なり、曆應二年巳卯、越後國瀨波郡加治莊荒川郷に生る、(生地は今の黑川なり字を少荒川と云、北蒲原郡に屬す)幼童の時より異相を具し、掌中に如意珠の形あり、貞和二年八歳にして、本成寺に登り、時の學頭日龍に師事す、天性聰明群童に同じからず、五年十一歳にして、始めて父母の家に歸る、偶〻近隣の諸人俄に重病に罹る、諸種の祈禱針灸の醫術皆其驗を得ず、父母試に門一丸をして祈らしむるに、沈痾頓に癒ゆ、見聞の衆庶奇異の思をなし、爲めに本成寺の宗義を信ずるもの多し、出家の後名を圓光房日陣と改む、笈を負て諸國の學匠を訪ひ、高名都鄙に流る、嘗て學問修行の日、奥州會津に遊び、天台の學匠東光寺玄妙能化に隨て學ぶ、既にして時機を計り、東遊を

志し一筐を殘し置き、納むるに宗祖の開目抄二卷を以てす、而して應安二年三十一歳にして、日靜上人に隨て付法し、本成寺の讓を受け、（日靜は本成本國兩寺統一の貫首たりしが、爰に至て本成寺を日陣に本國寺を日傳に付す）宗祖弘通の本旨を繼承し、本山の規則を定め、宗意大に振ふ、應永四年五十九歳にして京都に到り、本國寺に於て法華經を講じ、盛に宗祖の正意たる法華の深義を宣揚す、時に日傳之を聞て忽に疑問を起し、爾來十一年に至るまで八年間、問答往復すと雖も、日傳更に疑懷を氷消すること能はず、爰に於て遂に交を斷ち親を絶し、日蓮一宗分て勝劣一致の兩派となる、是に由て應永十三年四月、洛の本禪寺を創立し、以て遺魂の道場と定む、二十六年八十一歳にして、本成寺を日存に付し、本禪寺を日登に付し、同年五月二十一日、本成寺に入滅す、（已上本成寺派中興なり）

日覺は智秀と號し、題目坊と名し、尾張の人、文明十八年、同の妙本寺に祝髮す、性穎敏にして、識群に越へ、長ずるに及んで八宗を究め、十八歳本成寺第九世の貫首と爲る、著はす所の書論大小十四部あり、天文四年、天台宗と宗論の爲め、山門の衆徒兵を起して、洛陽本宗の諸本山を燒毀せしを以て、本禪寺も亦此厄難に罹りて灰燼に歸す、師上洛して之を再興す、翌年七月本宗三箇靈寶の隨一たる立像釋尊（此像は延文四年本成寺より本國寺に移ぜし者なり）を江州水保の地頭、本須勘解由左衛門の家臣、野澤又六郎、六條の畠中より拾ひ得て、同家臣今井道順に讓る、道順深く感拜し、之を本禪寺に納む、師之を受て該寺に安置す、師の博學其名洛中に轟く、遂に後奈良天皇の叡聞に達し、召して紫宸殿に高座を設けて一七日法華經を講せしむ、天皇叡感に堪へず、師を大僧正に補し、紫衣及び七寶の珠數、其他種々の御物を賜ひ、勅して菩提心院と號す、十四年本禪寺を日導に讓り、越中井田郷に趣き、十九年十一月寂す、壽六十五本成本禪の兩寺を勅願道場と定めしは、師の德化に在り、其功多きを以て、本派中興とし亦た本禪寺の中興とす。

日隆は本能寺の開山にして、八品派の祖なり。

日什は妙滿寺派の祖なり。

日眞字は慧光、父は中山中納言親通、母は山名伊豆守義時の女なり、文安元年三月二十九日、但馬に生る、七歳妙境（一本經に作る）寺日全に投じ、十二歳剃髮す、同年園城寺に入り、十八歳叡山に登る、二十三（一本四に作る）歳、洛陽妙本寺に入り、六世日具に謁し、大に宗義を研究し、且つ疑難を祖像に祈請せしに、一且靈告を得て轄然悟る所あり、爾後化を北越に布き、其途次若州小濱を經て、妙興寺日因を論伏し、一寺を創し、慧光山本境寺と稱す、之を

弘宗立義の剏めとす、而して越前に赴き熾然化を施し、武生の本興寺日源、平等會寺日唱等皆會下に屈從す、時に門下に附隨するもの三十六箇寺、歸嚮の徒萬餘人に及べり、後攝津に一宇を開き、久成寺と稱す、丹波但馬に赴き、曼荼羅湯を湯島に開き、長享二年秋洛陽に歸り、一宇を六角西洞院に構へ、本隆寺と號す。（實は二世日鎖の建設にて師を待し所なり）是に於てか始めて法華宗勝劣派と公稱す、師學に長し最も天台に深し、三大部及び天親の法華論の科文註釋を撰述す、名聲高遠、夙に天聽に達し、文龜天皇辱く其著書に叡感あり、法華宗像門正統及び大和尙の宸翰を賜ひ、又慧光無量山本妙興隆寺の銅印及び御物の見臺を賜ふ、永正の初め、職を日鎖に讓り、享錄元年三月二十九日寂す、享年八十五。

日奥安國院と號す、永祿八年六月京都に生る、十歳にして妙覺寺の日典に師事し、十八歳剃髮受戒す、文祿元年師跡を嗣く、四年九月豐臣秀吉、大佛妙法院に於て、千僧供養を營み、各宗ごとに一百名の僧侶を請待す、本宗の諸師亦之に應ず、奥獨り不受謗施の義を唱へて、諫狀を呈し、其請を却く、同月二十五日妙覺寺を退て、丹波國小泉に隱遁す、慶長四年德川家康、大阪城に召して、千僧會に出席せんことを勸むれども、堅く執て應せず、五年六月遂に對馬に謫せらる、其謫所に在るや粒食給せず、蕨根菓食纔に身命を支へ、具に難苦を嘗むること、凡そ十三年、而して志操確乎として變せず、十七年赦に値ふて歸京し、寛永七年三月十日、妙覺寺に入寂す、年六十六、歿後法流の再び是義を唱ふるや、屍體又刑に處せらるると云ふ、著書宗義法制論、守護正義論等あり、之を不受不施派の祖とす。

日講安國院と號す、寛永三年九月、山城國に生る、甫めて十歳、京都妙覺寺に入て剃髮し、宗義を受く、二十歳關東に遊學し、學成て野呂檀林の請に赴き、學徒教育の任を總ふ、寛文六年四月、守正護國章を著はし幕府に上り、不受不施の義に據て、寺領名義の事を論ず、之に因て罪を得、日向國佐土原に流され、謫居三十三年、元祿十一年三月十日、謫地に於て寂す、年七十三、著書錄內啓蒙等數部あり、之を不受不施講門派祖とす。

日重は一如院と號す、戰國の始、天文十八年若州小濱に生る、六歳京都本國寺に薙髮す、性敏にして學を好む、機辯響の如し、長ずるに及んで智解群に出づ、識者以て法器と爲す、後本滿寺に住職して法輪大に振ふ、時に妙覺寺の日奥、不受不施の異議を唱ふ、宗徒兩楹に躊躇す、師奮ふて辯駁日奥を挫折す、邪正炳焉復惑ふものなし、蓋し此時開宗を去ること三百年、宗學稍弊を生ず、依て特に宗風を挽回するを以て自任し、敎黌を設

立し宗徒を敎育す、元和九年八月寂す、年七十五、弟子日乾、日遠其志を繼ぎ、大に宗風を振作す、寛永五年武州池上本門寺の日樹、再び不受不施を主張す、二師東都に止ること數年、法亂を鎭定し宗規を一新す、蓋し日重其業を創始し、日乾、日遠に至て中興の功を成す、因て師弟相繼で身延に瑞世す、是より先き日乾は後陽成天皇の勅請に赴て、宗義を講じ、因て宗門綱格一卷を撰て之を献す、寛永十二年十月寂す、年七十六、日遠は慶長十三年身延を辭して大野に退藏す、紀伊侯の母堂深く歸嚮せるを以て、伽藍を創立して本山と爲す、今の本遠寺是なり、寛永十九年三月、池上に於て寂す、年七十一、荼毘して大野に塔す、著書殆ど百卷ありと云ふ。（已上單稱日蓮宗中興）

第二章　典籍篇

第一節　法華經

法華經は釋尊が最後の八年間に說法せし所にして、之れに對して前四十年間の諸說を爾前と云ひ、末了と云ひ、權敎と云ふ、法華經は全部八卷にして、支那東晉の義熙二年、即ち姚秦弘始八年、印度の僧鳩摩羅什之を譯す、別に異譯異本あり。

此の經は二十八品あり、大に分つて本迹二門と爲す、即ち序品より歡喜品に至る十四品は、佛が化跡を伽耶城に垂れて、四十年來衆機を調停して、竟に一實に入らしめんとする終極の說法にして、開權顯實の旨を明らかにし、諸法實相の理を說き、二乘作佛を證せるもの、之を迹門とす、又第十五品即ち湧出品より勸發品に至る後ちの十四品は、佛が自ら伽耶始成の迹を拂ふて、久遠實成の本地を顯はせるもの、所謂開迹顯本の說法にして、應身の釋尊が法報應三身常住の本佛たるを明示せるものなり、此の二乘作佛と久遠實成の二點を以て、他の諸經諸宗に勝れたる要點と爲し、日蓮聖人の開目抄に左の如く云へり。

此に予恐見を以て、前四十年と後八年との相違をかんがへみるに、其の相違多しと雖も、先づ世間の學者もゆるし、我が身にもさもやとうちをぼうる事は、二乘作佛、久遠實成なるべし。

又法華經大意には、同經の分科に就て左の如く云へり。

一、法華とは一部八卷二十八品なり二處三會の說なり、所謂序品より法師品に至るまでの十品は靈山會の說なり、寶塔品より神力品に至るまでの十一品は虛空

會の說なり、囑累品より勸發品に至るまでの七品は又靈山會の說なり。

二、一部八卷を分て三段とす、序正流通是なり、序品を序分とし、方便品より分別功德品の十九行の偈に至るは正說なり、偈より以後の十一品半は流通分なり。

三、本迹二門を明さば序品より安樂行品に至るまで十四品は迹門なり、涌出品より勸發品に至るまでの十四品は本門なり、又迹門の十四品に序正流通あり、序品を序說分とし、方便品より人記品に至るまでの八品を正說分とし、法師品より安樂行品に至るまでの五品を流通分とす、次に本門の十四品に序正流通あり、爾時他方國土諸來菩薩より汝等自當因是得聞に至るまでを序分とし、爾時釋迦牟尼佛より分別功德品十九行の偈の以助無上心に至るまで一品二半を正說分とし、偈より以後經の訖りまで流通分とす。

次に各品の大意に就ては左の如く云へり。

一、序品には、五瑞六瑞を見て彌勒文殊に問ひ給ふに、過去の燈明佛の時法華經を說き給ひしに今の瑞相現ずと答へ給ふ、佛說はなし。

二、方便品には、舍利弗の請に趣て略開三顯一廣開三顯一す、略開三顯一とは十如實相の法門なり、廣開三顯一とは佛知見とて五佛道同の儀式の法門なり。

三、譬喩品には、舍利弗は上根なるに依て、前の五佛道同の儀式を聞て疑を生じ彼を除て記を授く、迦葉迦旃延目連須菩提の四大聲聞は中根なるに依て十如實相五佛道同を悟らざる間三車火宅の喩を說て之を悟らしめ畢んぬ。

四、信解品には、窮子の喩を以て上の四大聲聞領解し畢んぬ、此品には一代五時の意を自ら之を說く、佛說は無し。

五、藥草喩品には、三草二木の喩を以て述成し給へり。

六、授記品には、四大聲聞授記を蒙る。

七、化城喩品には、五百の聲聞千二百の羅漢下根なるに依て化城寶處の喩を說て聞かしむる時悟り畢ぬ。

八、五百弟子品には、繫珠の喩を說て領解を申す。

九、人記品には彼の下根の聲聞惣記を蒙る普明如來等なり。

一〇、法師品には、五種法師の行を說く、或は六種法師とも云ふなり、五種法師の修する修行と云ふは受持讀誦解說書寫なり、六種法師と云ふは讀の行とて讀誦を

二に分る時は六種の法師と云ふなり。

一一、寶塔品には、四衆八部の類の疑を除かんが爲に、多寶佛出現して皆是眞實と證明し給ふなり。

一二、提婆品には、彼の達多の五逆罪の人ながら記莂に預り畢ぬ、五障の龍女は即身に無垢世界に成道を唱ふ。

一三、勸持品には、二萬の菩薩學無學の聲聞八十萬億那由陀の菩薩此經弘經を申す時、三類の敵有て怨み嫉むべき旨を說く。

一四、安樂行品には、四安樂行を說く、一には身、二には口、三には意、四には誓願なり、次ぎに頂珠の譬を說く。

一五、涌出品には、過八恒沙の菩薩此土の弘經を申さると雖も、佛此本有の眷屬を召出されしかば、上行、無邊行、淨行安、立行の四菩薩を始として六萬恒沙の菩薩多くの眷屬を引き具して涌出し給ふ、身金色なり、彌勒菩薩疑ての玉はく佛今世に成道し給ふ事四十餘年なり、乃至十五の親百歲の子の譬あり。

一六、壽量品には、上の涌出品の彌勒の疑を除かんが爲に久遠實成の旨を顯し給ふ、醫師の譬を說きて而かも現有滅不滅と說き給へり。

一七、分別功德品には、佛の壽命の久遠なる事を聞て六百八十萬億那由陀恒河沙の衆生無生法忍を得、微塵の菩薩三菩提を成ずと說く、次ぎに佛の壽命の長遠なる事を聞て一念信解する者は五波羅密を八十萬億那由陀劫行ずるより勝ると說く。

一八、隨喜功德品には、此經を聞く事五十展轉したらんは八十年の間の布施に勝たりと說く。

一九、法師功德品には、法師此經を修行して六根清淨を得る事を說く。

二〇、不輕品には、彼菩薩上慢の四衆を禮拜して杖木瓦石の難事を被ることを說く、其時の四衆阿鼻大城に墮ちて千劫を經たり、然れども今彼の菩薩釋尊と生れて還て彼を利益し給ふ。

二一、神力品には、佛十神力を現して末法の弘通を上行等には附囑し給ふ事を說く塔中の附囑なり。

二二、囑累品には、佛塔より下りて頂を三度摩でゝ重て此の經を附囑し給ふ。

二三、藥王品には、十喩を說て諸經に勝れたる事を明す、一切の佛菩薩聲聞緣覺の說の中には此經第一と說く、守護の附囑を蒙る。

二四、妙音菩薩品には、東方淨華宿五智如來の所より來て三十四身を現じて衆生を利益し給ふ事を說くなり。

二五、觀世音菩薩品には、西方安養淨土より來て三十三身を現じて衆生を利益すと說く、方便竝に此經を說き給ふ事は妙音品の如し。

二六、陀羅尼品には、二士二王十羅刹呪を說て持者を守護し給ふ事を說くなり。

二七、嚴王品には、二子の敎化に依つて嚴王竝に夫人眷屬宿王華智佛の前にして沙羅樹王佛の記莂を說く、夫人は今の華德菩薩是なり。

二八、普賢菩薩品には、此菩薩東方寶威德上王佛の國より來て此經を勸發す、佛四法成就の旨を說き給へり、此菩薩陀羅尼を說きて持經者を守護し給ふべき事を說くなり。

又日蓮聖人の兄弟鈔に曰く

夫れ法華經と申は、八萬法藏の肝心十二部經の骨髓なり、三世の諸佛は此の經を師として正覺を成じ、十方の佛陀は一乘を眼目として衆生を引導し給ふ、今現に經藏に入て此の經を見るに、後漢の永平より唐の末に至るまで渡れる所の一切經論二本あり、所謂舊譯の經は五千四十八卷あり、新譯の經は七千三百九十九卷あり、彼の一切經皆各分々に隨て我第一なりとなのれり、然るに法華經と彼の經とを引合せて之を見るに勝劣天地なり高下雲泥なり、彼の經とは衆星の如く、法華經は月の如く、彼の經とは燈炬星月の如く法華經は日輪の如し、此は法華經の總なり、別して經文に入て之を見奉れば二十の大事あり、云々

又

法華經の文字は六萬九千三百八十四字、一字は一佛なり、此の佛は再生敗種を心腑とし、顯本遠壽を其壽とし、常住佛性を咽喉とし、一乘妙行を眼目とせる佛なり應化非眞佛と申して、三十二相八十種好の佛よりも、法華經の文字こそ眞の佛にてわたらせ給ひ候へ、佛在世に佛を信せし人は、佛にならざる人もあり、佛滅後に法華經を信ずる人は、一として成佛せざるなしとの如來の金言なり。

無量義經は北齊の建元三年、印度の僧曇摩伽陀耶舎之を譯す、三品あり、曰く德行品曰く、說法品、曰く功德品之れなり、此の經は一法より無量法を生ずる理を說けり、故に名づく、其の一法とは所謂實相なり、無量法とは所謂頓漸二法、三乘の三道、四聖の四果等なり、初め一實相より無量法を開出し、後ち諸法を一實相に歸納す、無量義經は開出の方面を主とし、法華經は歸一の方面を要とするを以て此の經を法華の開經と稱す要するに無量義經は法華經の序論とも稱すべきものなり。

觀普賢菩薩行法經、一名出深功德經は劉宋の元嘉年中印度の僧曇摩密多之を譯す一卷として品別なし、此の經は如來滅後の衆生の爲めに、普賢の觀門及び六根の過罪を懺悔する法を說けるものにして、法華經の最末第二十八品の勸發品と相表裏するを以て、法華の結經と稱す。以上法華經、無量義經、觀普賢菩薩行法經を以て三部の妙典と唱へ、天台大師も夙に之を採用せり、然れども此の三部を對比する時は、無量義經は開序、觀普賢經は流通分にして、法華經は正宗分に當るを以て特に正所依と爲す。

第三節　天台三大部

法華玄義、法華文句、摩訶止觀、是を天台の三大部と稱す、皆天台智者大師の講說にして、弟子章安尊者の編集せしものなり、法華玄義は法華の經旨を中樞として、一代佛敎を組織的に說明せり、法華文句は法華經の文句を、客觀主觀の兩面より解釋せり、摩訶止觀は前の玄義文句に於て闡發せし所の佛敎の眞理、即ち三千三諦の法義を實行的に講究し、且つ詳に其方法規矩等を說示せり、後ち荆溪湛然更に之が釋を造り、玄義釋籤、文句記、止觀輔行と云ふ。

法華玄義大別して二となす、一には七番共解、二には五重各說なり、五重とは第一釋名、第二辨體、第三明宗、第四論用、第五判敎にして、此の五重を初めに第一票章、第二引證第三生起、第四開合、第五料簡、第六觀心、第七會意の七番に、各々共解したるを以て七番共解と云ふ、次に五重を各段に別說せり、即ち所謂五重各說なり、第一釋名段には經名妙法蓮華經の五字を釋せり、此の中釋義の便に依りて、先づ法を釋し、後に妙を解す、法とは廣く言へば十界三千の諸法に涉れども、要すれに心佛衆生の三法なり、此三法を是三無差別とて互に能所總別となりて、融妙不可思議なる處之を妙と名付く、此の妙の釋に就て、本迹二重の十妙を出せり、先づ迹門の十妙とは一に境妙、二に智妙、三に行妙、四に位妙、五に三法妙、六に感應妙、七に神通妙、八に說法妙、九に眷屬妙、十に功德利益

妙也、第一境妙とは所觀の境たる三諦の理が、三而一、一而三と融鎔相即不可思議なれば乃ち妙なり、所觀の境既に妙なれば第二能觀の智、亦三智一心にして妙なり、智妙なるが故に、行も亦妙なり、行妙なるが故に歴る所の位亦妙なり、此の如く境智行位の因皆妙なれば、此の因に依て得る所の法身般若解脱の三法亦妙なり、以上の五妙を自行の因果とす、既に自行の果を尅しぬれば即ち化他に趣く、後の五妙、即ち感應、神通、說法、眷屬、利益なり、此の內、感應と利益との三妙は所化に屬し、神通說法の二妙は能化に屬す、是を化他の能所と云ふ、左れば十妙を該括すれば、自行の因果、化他の能所と云ふ二言に攝歸す、右迹門の十妙釋を述し終りたる處に至て、荆溪が所謂十不二門を釋出せり、本門の十妙とは一には本因妙、二に本果妙、三に本國土妙、四に本感應妙、五に本神通妙、六に本說法妙、七に本眷屬妙、八に本涅槃妙、九に本壽命妙、十に本利益妙なり、此の十妙の體は亦迹門十妙と同じ、唯開合の異のみ、即ち迹の境智行位の四妙を合して、第一の本因妙とし、迹の法妙を開て本果本國土、本壽命、本涅槃の四妙となしたるなり、以上妙の字の釋畢て次に蓮華の二字及び經の一字を釋せり、第二辨體段には經の體を辨して實相爲體と定め、第三明宗段には經の宗を明かにして因果爲宗と決す、第四論用段には經の用を論し、即ち迹門は斷疑生信を用となし、本門は增道損生を用となすと示す、第五判敎段には經の敎相を論し、今經は超八醍醐純圓獨妙の敎なりと判せり

法華文句は法華一部二十八品の文々句々を解釋す、先づ一經を分別するに諸經の通軌に準して、總て三分を立つ、第一序品は序分、第二方便品の初より第十七分別功德品十九行偈に訖るまで、凡そ十五品半を正宗分とす、以下大尾まで凡そ十一品半は流通分なり、又或は別途に就て一經を分ち、本門迹門の二門とす、二門に各々序正流通の三分を立つ、初め十四品は迹門、後十四品は本門なり、迹門の中、第一序品は序分、第二方便品の初より第九學無學人記品に至る八品を正宗分となす、此の正宗分は法說、譬說、因緣說の三周說法なり、初め法說周とは直に諸法實相の道理を說けるものなり、所謂開三顯一にして、爾前三乘の麁法即是一乘の妙法なりと開顯す、其正說が方便品にして、第三譬喩品の初に至て領解と授記と述成とあり、即ち前の法說を聞て、其旨を領解したる者は唯大智の舍利弗一人なり、此の舍利弗に向て佛が汝遠劫の末に成佛して、花光如來と名付くべしと、成佛の記別を授け給ひたるが授記段なり、次に譬說周とは譬喩に就て諸法實相の理を說けるなり、即ち譬喩品の半より其終りまでを正說とす

是の正說に於て中根の迦葉、迦旃延、須菩提、目蓮の四大聲聞が其旨を領解せり、其の領解を迦葉が他の三人に代て所謂長者窮子の喩を以て述成したるが信解品にして、之を佛が又述成せるが第五藥草喩品なり、授記せるが授記品なり、次に因緣說周とは大通智勝佛の因緣に寄りて實相の理を說けるなり、之を化城喩品とす、此說法に於て下根の富樓那尊者等が皆領解す、是を五百弟子授記品及學無學人記品とに於て授記す己上迹門の正宗分終る、第十の法師品より第十四安樂行品に至る迄を迹門の流通となす、又本門の三分は第十五涌出品の初より其半まで序分にして、已下第十七の分別功德品の半に至るを正宗分とす、流通分は功德品の後半より經の尾までなり。

又其の文句を解するには一一に四種の釋を施せり、一には因緣釋、二には約敎釋、三には本迹釋、四には觀心釋なり、一に因緣釋とは所謂四悉檀を以て釋するなり、四悉檀とは一に世界悉檀又は樂欲悉檀とも云ふ、人の樂欲即ち嗜好に隨つて釋するなり、哲學嗜の者に向ては哲學的に釋し、文學者流には文學的に釋するなり、二に各々爲人悉檀とは又生善悉檀とも云ひ、人をして善心を發生せしむる樣に釋するなり、三に對治悉檀とは斷惡悉檀とも云ひ、人をして惡心を消滅せしむる樣に釋す、四は第一義悉檀と云ひ、入理悉檀とも云ひて、人をして實相の理に悟入せしむる樣に釋す、要するに四悉檀は人をして各其性分根氣に從ふて皆其得益あらしむるが如く說明をなすことなり、第二に約敎釋とは藏通別圓の四敎に約して一一其釋を施すなり、第三に本迹釋とは其物の現相と本性とに就て釋するなり、一例を擧ぐれば舍利弗の如き、現相を以て云へば其母の眼に似たる故に舍利子と云ふ、是れ迹門の釋なり、然るに此の舍利弗は假に聲聞の相を現すとも本性は是具三千の佛なりと云ふは本門の釋なり、第四は觀心釋とて一一を觀心に約して釋す、即ち主觀の解釋なり、例へば王舍城と云ふが如きをも、王とは六識心王、舍とは心王の住する處にして吾人の身體是れなり、五陰假合、即ち衆生の身體、是を王舍城となす、此の王舍城若し觀智を以て極微に拆き盡して空なりと觀するは、三藏敎の觀にして所謂抽度觀なり、若し王舍城即ち吾人の身體を當體即空なりと觀するは通敎の觀、所謂巧度觀なり、若し此の王舍城たる吾人の身體を先づ空に次に假、後に中と三諦次第に觀するは別敎の但中觀也、若し此の王舍城を即空即假中にして空の當體三千宛然、空假不可思議なりと觀するは圓敎の不但中の觀なり、左れば王舍城は天竺の城名のみに非ず、今日現在の吾人の身體、即ち王舍城にし

て其體三千即空假中なりと自已の心に取入れて觀するを觀心釋と云ふ。

摩訶止觀は大に分つて二段となす、初に五略後に十廣あり、然るに五略は其實十廣の第一なれば次に十廣を辨ず、十廣とは一に大意、二に釋名、三に顯體、四に攝法、五に偏圓、六に方便、七に正觀、八に果報、九に起敎、十に旨歸なり、第一の大意即ち五略にして發心、修行、感果、裂網、歸處の五科を以て止觀の大意を明にせり、五科中の發心とは止觀を修するは大菩提の爲めなれば、先づ須らく大菩提心を發せしむるにあり、是に於て度斷智證の四弘誓願を明にせり、修行とは十廣中第七正觀章の大意なり、此の中に四種三昧を明す、一に常座三昧、文殊般若經の一行三昧に依りて九十日間便利を除きて常坐し、念を一佛に繫く、即ち西方阿彌陀佛を本尊とす、何となれば彌陀を以て法門の主とするが故なり、彌陀一佛を稱すれば十方佛を稱すると其功德齊しと判せり、二に常行三昧、般舟經に依て九十日間飯食を除き、一心常行し亦阿彌佛を以て本尊となす、三に半行半坐三昧、四に非行非坐三昧なり、次に感果は十廣中の第八果報章の大意にして修觀の結果なり、觀行即より相似即を經て分眞の位に至れば百佛世界に應同して、八相作佛するなり、裂網とは十廣中の第八起敎章の大意なり、既に大果を感じ終れば化他に趣く、即ち五時八敎を說きて衆生差別の妄見たる邪見の大網を裂破するが止觀の大用なり、歸處とは十廣中の第十旨歸章の大意なり、既に敎を說き網を破り、化他の能事終れば即ち三德秘藏の大涅槃に歸す、已上五略は十廣の大意にして其要は玄義の十妙に同じ、發大心は自行の因、感大果は自行の果、裂大網は所化の邪網を裂くなり、的大處は能化の終歸なり、即ち五略は亦自行の因果、化他の能所に收まる者と知るべし、さて十廣中の第二釋名は止觀の名を釋す、第三顯體は止も觀も其體別ならず、同一法性の寂照二用なりと顯す、第四に攝法は止觀二法の中に恒沙无量の萬法を攝入することを明にす、第五偏圓は爾前四時三敎の止觀は皆偏なり、今敎止觀獨り圓妙なることを明かにす、以上五章は概して云へば止觀に就ての敎相なり、第六方便とは已下が正く觀法を明す、今章は觀前の加行方便にして、二十五方便を示す、第七正觀とは具に正修止觀と云ふ、之は正說中の正說なり、即ち觀境を明すに十種あり、所謂十境なり、十境の一一に十乘觀法を明す、故に百法成乘と云ふ、十境とは一に陰入境、二に病患境、三に煩惱境、四に業境、五に魔事境、六に諸見境、七に上慢境、八に禪定境、九に二乘境、十に菩薩境なり、然るに此の正觀章は未だ全く終結せずして盡き、以下の三章も亦講述

なし。

第四節　錄內錄外

日蓮聖人の滅後、上足の六弟子相謀り各關係者に告げて、聖人の遺文を蒐集し、第一周年忌に輯錄せしもの百四十餘篇四十一卷、此を錄內御書と云ふ、其後集まるもの二百五十餘篇二十六卷、此を錄外御書と云ふ、錄內は敎旨最も重要のものにして、錄外は消息文等多く、古來より錄內を純とし、錄外を不純として、宗義上の論決には錄內のみ用ゐて、錄外をば引用せざる習慣あり、左れど錄外にも頗る珍重すべきものあるのみならず、往々眞に聖人の意向人格時勢を窺ふに便なるものあり、尤も一二僞撰にはあらずやと思はるゝものなきにも非ず、此等は專門的研究を要すべきものなり。

以上の他他受用御書とて、慶安二年刊行のもの七卷あり、又御書續集として日英の編纂せしもの三卷、天保十三年に刊行せられたり。

明治十二年小川泰堂高祖遺文錄と題して錄內錄外其他他受用書等を集め、年次を逐ふて編輯し三十卷と爲して發行せり、降て齋藤日一の高祖遺書と稱する十二卷もの明治十五年に發刊せられ、明治三十七年には加藤文雅の日蓮聖人御遺文と題する遺文錄の縮刷ありて、頗る便宜を與へ居れり。

今日蓮聖人の述作中肝要のもの二三を擧げて、之を略解せんに

一、註法華經　日蓮聖人自ら經論疏釋の要文を拔翠して、三部妙典に註記せしものにして舊と私集要文と稱せり

二、御義口傳　聖人自撰の註法華經に就き、上足門弟の爲めに、三部十卷の要文を採撫して、咸く妙法蓮華經の五字を結歸し、觀心證道の實義を口授したるものにして弟子日興之を筆記せしかば、日興記とも稱せり

此と同じく御講聞書と稱する日向の筆記せし、日向記と稱するものあり

三、開目抄、此は聖人が佐渡謫居中撰する所にして、主師親の三德を中心として、聖人自らの使命を宣言したるもの、常途の忠孝以上に根底ある大忠孝主義を主張せり

四、觀心本尊抄　此も同じく佐渡にて撰せられしものにして、此れ日蓮宗の最第一無上無比の聖典なり、即ち一切撰述の正宗分なり、而して其要は己心の本佛を明示するに在り

五、立正安國論　文應元年鎌倉に於て撰述し、執權北條時頼に獻せしものなり、其內容は書中に在る左記の一二の文にて窺知すべきなり

夫れ國は法に依て昌へ、法は人に因て貴し、國亡び人滅せば佛をば誰か崇むべき、法をば誰か信ずべきや、先づ國家を祈りて須らく佛法を立つべし、謗法の人を禁じて正道の侶を重せば、國中安穩にして天下泰平ならん

明治十七年發行の大藏經に編入せられたる、聖人の遺著は左の十三部なり

一、立正安國論、二、開目抄、三、撰時抄、四、法華題目抄、五、十法界明因果抄、六、內證血脈抄、七、二十法界鈔、八、總勸文抄、九、敎機時國抄、十、本門戒體鈔、十一、立正觀抄、十二、觀心本尊鈔、十三、受職功德抄

第五節　未釋要書

一、宗義部にては

◎一念三千論　六卷　優陀那日輝作　天保年中述
◎祖書綱要　廿三卷　一妙院日導作　天明年中述
◎宗敎要解　十二卷　玄收院日賢作　文化年中
◎萬代龜鏡錄　十卷　安國院日奥作　文錄年中
◎弘經用心記　五卷　行學院日朝作　慶安中版
◎嘉會宗義抄　二卷　圓明院日澄作　元祿中版
◎峨眉集　二十卷　常在院日深作　元文年中述
◎芻蕘集　七卷　黃華院日義作　明和年中
◎文句無師　二十卷　日光、日諦、日詮共著　天正年中

二、註疏部にては

◎錄內啓蒙　三十六卷　安國院日講作　元祿年中述
◎立正安國論新註　三卷　英圓院日英　天保年中
◎錄外徵考　二卷　禪智院日好作　享保年中
◎法華經啓運鈔五十五卷　圓明院日澄作　文龜年中
◎妙經宗義鈔　十六卷　優陀那日輝作　明治版

三、史傳部にては

◎本化別頭佛祖統記三十八卷　六牙院日潮作　享保年中述

◎高祖年譜竝攻異　四卷　日諦日耆合著　安永年中述
◎元祖化導記　二卷　行學院日朝作　文明年中述
◎日蓮大士眞實傳　五卷　小川泰堂作　慶應年中述

四、雜著部にては

◎見聞愚案記　二十四卷　一如院日重作　元和年中述
◎艸山集　三十卷　深草元政　延寶年中版
◎小山茗話　五卷　宗延寺日幹作
◎千代見草　二卷　心性院日遠作　寶永年中版

五、宗論部にては

◎月出臺隱記◎斷惡生善抄◎無得道論◎法華格言◎日蓮本地義◎諫迷論◎摧邪眞迢記◎金山抄◎中正論◎念佛無間問答論◎顯揚正理論◎決膜明昭論◎決權實義◎呵責謗法抄◎復正捉繩錄◎法律阿梨樹章◎護惜正法抄◎蒲辨折疑論◎續種論◎斷挫日蓮◎挫日蓮笑解◎經王金湯論◎妙義論◎好義論◎正善論◎訂正記◎駁獅虫論◎擊濠論◎金剛王◎如來師子圓弦◎光揚義◎圓弦國家答◎曲林一斧◎摧邪辨正錄◎文正論等以上百十餘卷あり。

第三章　判教篇

第一節　宗名及其意義

日蓮宗は妙法蓮華經を以て正所依と爲す、故に貝らかには妙法蓮華經宗と稱すべく、日蓮聖人の內證佛法血脈にも夫れ妙法蓮華經宗者云々とあり、然るに此の妙法蓮華經を略して、單に法華經と唱ふるは天台大師の頃より常習と爲り、天台宗にては天台法華圓宗と云ふを略して、更に開祖の名に因み天台宗と云ふに至れり、日蓮宗にても本來は法華圓宗と云ふべきを、日蓮聖人自身には常に法華宗と稱し、且又法華宗云々の綸旨もありて、從來單に法華宗と唱へ來りしが、斯くては天台宗と混合の恐ありとて、開祖の名を加へ日蓮法華宗と云ふを正當と爲せしが、維新後に至り單に日蓮宗と呼ぶに至れり、若し夫れ其敎義の內容より考へ、又後醍醐天皇の綸旨より推す時は、一乘圓頓妙宗と稱すべきものなり。

今法華宗及日蓮宗と云ふ宗名の根本義に就て、左に日蓮聖人の所說を示すべし、法

華初心成佛鈔に曰く

法華宗は釋迦所立の宗なり、其故は已說今說當說の中には法華經第一なりと說き給ふ、是れ釋迦佛の立て給ふ所の御語なり、故に法華經をば佛立宗と云ひ又法華宗と云ふ、已說とは法華より已前の四十餘年の諸經を云ふ、今說は無量義經を云ふ、當說とは涅槃經を云ふ、この三說の外に法華經ばかり成佛する宗なりと佛定め給へり、餘宗は佛涅槃し給て後、或は菩薩或は人師達の建立する宗なり、佛の御定を背て菩薩人師の立たる宗を用ゆべきか、菩薩人師の語を背て佛の立て給へる宗を用べきか……經に云ひ依法不依人。

又法華宗內證佛法血脈に曰く。

夫れ妙法蓮華經宗とは久遠實成三身即一の釋迦大牟尼尊常寂光土靈山淨土唯一敎主の所立なり、所謂妙法蓮華經第七に佛說て言く諸經中王……若し法華宗の外に宗ありと言はゞ國に二王あり一世界に二佛出世の道理あらん、若し爾らざれば法華眞實の宗の外に全く權敎方便の權宗あるべからざるものなり、當に知るべし今の法華經とは諸經中王の文に依て之を建立す、佛立宗とは釋迦獨尊の所立の宗なる故なり

又四條金吾に與ゆる書に曰く。

明なる事日月に過ぎんや、淨き事蓮華にまさるべけんや、法華經は日月と蓮華となり、故に妙法蓮華經と名く、日蓮、又日月と蓮華との如くなり

第二節　五時八敎

五時とは華嚴、鹿苑、方等、般若、法華涅槃なり、此は釋尊一代五十年間、衆生の機根に應じて、應病與藥の說法せる數多の敎法を、時節に約して、剖判せし區分なり、此の中華嚴と般若と法華涅槃との三時は、名を其經題にとり、鹿苑は說處に從ひ、方等は所說の法に就て名を立てたるものなり。

第一華嚴とは、因行は華の如く、果德を壯嚴する、の意にて具には大方廣佛華嚴經と名け、即ち因行果德の圓滿なることを詳說せし經なり、是は釋尊成道三七日中寂滅道場に於て、法身の大士等の爲に、盧遮那身を現して說くなり。

第二に鹿苑とは、最初阿含經を鹿野苑にて說法ありし故、最初の說處に從つて名を立つ、阿含は傳と譯して、言を以て理を傳宣するの謂なり、此の中四種の阿含あり、增一

と中と雜と長となり、是は華嚴三七日の後より十二年間、小機誘引の爲に說く所の小乘敎なり。

第三に方等はと方廣均等の義、即ち廣く四敎を說き均しく、衆機に被らしむるの意にて、解深密、維摩、楞伽、金光明等の諸經を云ふ、是は阿含以後八年間の說にして、前に誘引せし二乘を彈呵し、引小向大せしむるものを云ふ。

第四に般若とは、此に智慧と飜す、諸法畢竟空寂の眞理を照す智慧にして、摩訶般若金剛般若、等諸部の般若經を指す、是は方等彈呵以後二十二年間、大小隔別の執情を陶汰して、二乘をして、菩薩に向て向上するに至らしめたるを云ふ。

第五に法華涅槃とは、此の二經は同意味の經なるが故に、合して一時と爲せり、法華は梵に薩達磨芬陀利修多羅、譯して妙法蓮華經と云ふ、即ち十界十如權實の法、微妙不可思議なるを妙法と云ひ、之を蓮華の華果同時なるに譬へて、以て權實同體の妙法を彰はすなり、又涅槃は具には摩訶般涅槃那と云ひ大滅度と翻す、迷妄の因果を滅無し、生死の橫流を超度し、法身、般若、解脫の三德を證得するに名く、是は般若以後八年間、法華經を說き、却後三月、更に後番の調熟を經て、將に滅度に臨まんとするとき、一日一夜涅槃經を說きしなり、此の中法華は前番一化の始終を大收し、敗種の二乘を開會して、一佛乘に入らしめ、十界皆成佛の旨を顯はして、各授記作佛せしめ、涅槃は後番の捃拾にして、佛性常住の旨を明して、撥無因果の斷常二見を摧き、偏權の戒律を扶持して、法身慧命の亡失を贖へり、如此の五時を五味に譬へて、乳、酪、生蘇、熟蘇、醍醐に配し、以て衆生機熟の濃淡を彰はし、敎法相生の次第を示せり。

又此の五時に通別の二種あり別の五時と云は、一般化道の方軌として、未熟の衆生を調熟するには、必ず一定の次第順序を履み、最初華嚴に擬宜し、鹿苑に誘引し、方等に彈呵し、般若に淘汰し、遂に法華一乘に歸入せしむるを云ふ。通の五時と云は、無謀設化前後の次第なく、華嚴有緣の機あれば、何時も華嚴を說き、小乘有緣の機あれば、何時も阿含を說き、方等、般若、法華涅槃も猶斯の如く、何時と云ふ定期なし、最初成道より終末入滅に至るまで、便宜に對機說法するものを云ふ、此の二種五時の中、別の五時は權引歸實の化意を彰顯し、通の五時は如來赴機の普遍なることを示すにありて、二種兩ながら缺くべからざれば、之を通別に分て竝用す、就中特に別の五時を以て智者大師立敎の正意とす。

次に八教とは化儀の四教と化法の四教となり、化儀とは衆生教化の儀式にて、釋尊一代の教を、四種の儀式に分ち剖判するを云ふ、化法とは衆生教化の法義にて、釋尊一代の教を、四種の法義に分て解釋するを云ふ。

先づ化法の四教とは、藏、通、別、圓是なり。一に藏教とは三藏教の略稱にして、即ち經、律、論を三藏と云ふ、此三藏の名は總じて大小二乘の通名なれども、今は別して法華及び大論に依て小乘教の異名とするなり。二に通教とは大乘初門の教にして、聲聞、緣覺、菩薩の三乘同じく體空無生の理を悟り、又利鈍の菩薩、鈍は前の藏教に通じ、利は後の別圓に通ずるの義を以て、通教と云ふ、以上の二教は偏眞の權理に依て、界內の機根に逗するものなり、三に別教とは獨り菩薩の法を明すものにして、教、理、智、斷、行、位、因、果の八法、前の二教にも別なり、後の圓教にも別なり、故に別教といふ、四に圓教とは圓は不偏を義とし、圓融無礙圓滿具足して、眞妄を隔てず迷悟蕩然として、言語道斷なるもの之を圓教と云ふ、以上の二教は中道の實理に依て、界外の機根に逗す、斯の如し所詮の理に、眞中淺深の不同あるが爲に、能詮の教法に大小權實の差別あるに至る、之を化法の四教と云ふ。

次に化儀の四教とは、頓、漸、秘密、不定是なり、初めに頓教とは初頓直頓の義にて對機利根なれば、漸次誘引の方便を用ひず、釋尊成道の當初、蓋直に中道の實理に依る深高の法門を頓說する所、即ち華嚴經是なり、二に漸教とは漸次誘引の義にて、對機鈍根なれば、上の華嚴の如き深高の法門を、直爾に說與し難が故に、鹿苑、方等、般若と淺より深に入り、漸次に誘引調熟する者を云ふ、故に此中自から三階に分れて、鹿苑を漸の初とし方等を漸の中とし、般若を漸の終とす。（已上頓漸二教は利根は先に大益を蒙り、鈍根後に小益を得て、衆機を隱覆するにも非ず又大小得益を異にするにも非ず、通方一定せる化儀なるを以て顯了定教と云ふ）三に秘密教とは佛の身口意三輪不可思議にして、同時一會の中に於て、或は此人の爲には小乘を說き、彼人の爲には大乘を說き、彼此互に相知らしめずして、聞法得益を異にするを云ふ、四に不定教とは、或は漸說中に頓の益を得、或は頓說中に漸の益を得る等ありて、其人互に相知るも、聞法得益を異にする者を云ふ、然れば、秘密と不定とは齊しく皆同聽異聞なれども、只一會の衆機、互に相知ると互に相知らざるとを以て差別すもるなり、此の秘密、不定の二教は頓漸定教の化儀に堪へざる、一類の機の爲に、設くる所の特殊の儀式なり、化儀に如此の區別を生じ來るは、畢竟衆生の根性融せざるに據れば、化儀の四教は法華以前に局るものにして、法華は根性融會し、三乘、五

乘皆一佛乘に歸すれば、非頓非漸、非祕密、非不定と云なり、蓋し法華は純一無雜なれば、華嚴の如く隔小兼別の頓にも非ず、同入圓道なれば中間三時の如く、引小向大の漸にも非ず、衆機齊しく機となれば、前四時の如く、互相知互不相知、大小乘の教益を異にする者なければ、非祕密非不定なり、故に化儀の四教は法華已前に局るものとするなり、獨り頓漸の化儀同じからざるのみに非ず、化法も亦圓融の教體は、初後佛慧圓頓義齊なれども、四時は偏權を兼帶して、權實相融せざるの邊は、法華の純圓に同じからず、法華は八教の差別を融泯して、復た權實の見るべきなければ、法華を超八醍醐一代究竟の極說と稱するなり。

以上は天台法華宗の所說なるも、本來法華經に依つて說を立てたるものなれば、日蓮宗に於ても之を應用すべきは、固より謂ふまでもなき所なり、抑々天台智者大師の五時八教の判釋は、實に複雜尨大なる佛教を整理して、其前後の脈絡關係を明瞭ならしめ、秩序あり組織ある一大哲學と爲せしものにして、其偉績は、實に震旦の釋迦たるに背かざる所にして、爾後の判教は總て此の轍に倣はざるはなし。

第三節　自他二教

自他とは自行と化他なり、釋尊一代の說法を大別して爾前と法華涅槃の二と爲し、前四十年の說法なる華嚴、阿含、方等、般若等の如き、法華以外の一切の所說及び之を所依とする各宗をば化他教と爲し、獨り法華を以て自行と爲すものにして、其趣意は日蓮聖人の左の諸文に依りて明白なれば、今細解を省く、三世諸佛總勘文鈔に曰く。

夫れ一代聖教とは總て五十年の說教なり、之を一切經とは言ふなり、此を分て二とす、一には化他二には自行なり一に化他の經とは法華經より前の四十二年の間說き給へる諸の經教なり、此を權教と云ひ、又は方便教と名く、此は四教の中には三藏教と別教との三教なり、五時の中には華嚴と阿含と方等と般若となり、法華より前の四時の經教なり、又十界の中には前の九法界なり、又夢と寤との中には夢中の善惡也、又夢をば權と云ひ寤を實と云ふなり、是故に夢は假に有て體性無し、故に名けて權と云ふ、寤は常住にして不變の心の體なるが故に之を名けて實とす、故に四十二年の諸の經教は生死の夢の中の善惡の事を說く故に權教と云ふ、夢中の衆生を誘引し驚覺して法華經の寤を成んと思食ての支度方便の經教なり故に權教と云ふ、此に由て文字の讀を糾して心得べきなり、故に權をばか

りと讀む、權なる事の手本には夢を以て本とす、……又實をばマコトと讀む實事の手本は寤なり、故に生死の夢は權にして性體無ければ權なる事の手本なり故に妄想と云ふ、本覺の寤は實にして生滅を離れたる心なれば眞實の手本なり故に實相と云ふ、是を以て權實の二字を糾して一代聖敎の化他の權と自行の實との差別を知るべきなり、故に四敎の中には前の三敎と五時の中には前の四時と十法界の中には前の九法界は同じく皆夢中の善惡の事を說くなり、故に權敎と云ふ、此の敎相をば無量義經に四十餘年未顯眞實と說き玉ふ、自行の法とは是れ法華經八箇年の說なり、此の經は寤の本心を說き玉ふ、唯衆生の思習はせる夢中の心地なるが故に夢中の言語を借て寤の本心を訓るなり、故に語は夢中の言語なれども意は寤の本心を訓ゆ、法華經の文と釋との意此の如し、此を明め知らずんば經の文と釋の文とに心迷ふべきなり、但し此化他夢中の法門も寤の本心に備はれる德用の法門なれば夢中の敎を取て寤の心に攝むるが故に四十二年の夢中の化他方便の法門も妙法蓮華經の寤の心に攝まりて心の外には法無きなり、之を法華經の開會とは云ふなり、譬へば衆流を大海に納るが如きな

佛の心妙法とは衆生の心法妙と此二妙を取て己心に攝むるが故に心の外に法無きなり、己心と心性と心體との三は己身の本覺の三身如來なり、之を經に說て云く如是相（應身如來）、如是性（報身如來）、如是體（法身如來）、之を三如是と云ふ、此の三如是の本覺の如來は十方法界を身體とし、十方法界を心性とし、十方法界を相好とす、是の故に我身は本覺三身如來の身體なり、法界に周遍して一佛の德用なれば一切の法は皆是佛法なりと說き給ひし時、其の座席に列りし諸の四衆八部も畜生も外道等も一人も漏れず、皆悉く妄想の僻目僻思立所に散止して本覺の寤に還て皆佛道を成す、佛は寤の人の如し、衆生は夢見る人の如し、故に生死の虛夢を醒して本覺の寤に還るを、即身成佛とも平等大慧とも無分別法とも皆成佛道とも云ふ唯一の法門なり。

第四節　三種の敎相

三種の敎相とは一に根性の融、不融相として、法華已前四十餘年間は、衆生の機根萬別なれば、如來の說敎も機に隨て大小に區分せり、之を隨宜方便の敎と云ふ、法華を說くときは、智識已に發達して三根性融す、故に如來唯一佛乘を說き給ふ、之を隨自意眞實

の教とす。

二に化導の始終不始終相とて、法華以前の諸經には、未だ如來教化の始末、所謂種熟脫（種熟脫とは下種成熟得脫の略にして猶原因發達結果と云が如し）の三益を明さず、法華の迹門に至て、方に過去大通佛の所に於て初めて教化し（下種結緣）自後中間に習熟し、今番出世に重ねて法華を說て、解脫せしむるを化導の始終と云ふ。

三に師弟の遠近不遠近相とて、爾前及び法華の迹門には、未だ如來の久遠成佛を明さず本門に至て、始めて釋尊の成道已に久遠なることを顯す、但釋尊の久成を顯すのみならず、又弟子の本地を顯はせり、前二種は爾前と迹門と相對し、後は本迹を相對して判釋す。

第一
- 以寂滅道場爲元始也
- 根性融不融相……
- 不論種熟脫
- 華嚴
- 阿含
- 方等
- 般若
- 法華
- 各有得道

第二
- 以大通爲元始三千塵點也
- 化道始終不始終相
- 論種熟脫……中間靈山初住

第三
- 五百塵點以久遠爲元始
- 師弟遠近不遠近相
- 論種熟脫

三八教に曰く、妙法蓮華經玄義一に云く教相を三と爲す、一には根性融不融相、二には化導始終不始終相、三には師弟遠近不遠近相……前の兩意は迹門に約し、後の一意は本門に約す。

稟權出界章に曰く、法華經と爾前と引向けて勝劣淺深を判ずるに當分跨節の事三樣あり、日蓮が法門は第三の法門也、世間粗夢の如く一二をば申とも弟三をば不申候、第三の法門は天台妙樂傳教も粗之を示せども未だ事畢へず、所詮末法の今に讓り與へし也、五五百歲は是也。

三種教相に曰く、番番の成道也、籤一云く、近くは迹門を以て尙ほ昔と爲すを得、況や

伽耶以前をや。

此の三種の敎相論は、哲學的意義に於ては甚だ大なるものとは認め難きも、宗敎的成佛論上よりする時は、絕大の價値を有するものにして、之れ實に日蓮宗判敎論中の白眉と稱すべきものなりとす。

第五節　四種及五重興廢

四重興廢とは一に大小相對、謂く爾前敎の中に於て、阿含經を小乘と爲し、其餘の諸經を大乘と稱す。二に權實相對、謂く前四時を權敎と爲し、第五時の法華を實敎と爲す。三に本迹相對、謂く法華經中に於て、前十四品を迹門と云ひ、後十四品を本門と云ふ。四に敎觀相對、謂く前の三重に明せる、小大權實迹本に於て從淺至深して、麤妙を判するを相對妙と名け、次に法華開顯の妙旨に從ひ、開麤顯妙して、又勝劣を立てざるを絕待妙と名け、而して此の待絕の二妙は尙是れ敎門に屬す、此の敎門併て行者本有の性德なりと觀ずるは、即ち事理融妙不思議一觀心の極致なり。

十法界鈔に曰く、法華本門觀心の意を以て、一代聖敎を案ずるに、庵羅菓を取て、掌中に捧るが如し、其故は迹門の大敎起れば、爾前の大敎亡す、本門の大敎起れば、迹門爾前共に亡す、觀心の大敎起れば、本迹爾前共に亡す此は是れ如來所說の聖敎、從淺至深して、次第に迷を轉ずるなりと。

次に五重興廢又五重對判と云は、即ち、內外、大小、權實、本迹、敎觀の五對にして內外を除く他は前の四重興廢と同一なり、今日蓮聖人の書に依つて更に之を委くす、べし、

一に內外對判とは、儒道二敎及外道と佛敎とを對して其優劣を判せしものなり、開目鈔に曰く、夫一切衆生の尊敬すべき者三あり、所謂主師親これなり、又習學すべき物三あり、所謂儒外內これなり、儒家には三皇五帝三王此等を天尊と號す、諸臣の頭身萬民の橋梁なり……尹壽は堯王の師、務成は舜王の師、太公望は文王の師、老子は孔子の師なり、此等を四聖と號す、天尊頭をかたぶけ萬民掌をあわす、此等の聖人に三墳五典三史等の三千餘卷の書あり、其所詮は三玄をいでず、三玄とは一には有の玄、周公等此を立つ、二には無の玄、老子等、三には亦有亦無、莊子が玄これなり、玄とは黑なり、父母未生已前をたづぬれば或は元氣より生じ、或は貴賤苦樂是非得失等は皆自然等云云、かくの如く巧に立といへどもいまだ過去未來を一分もしらず、玄なり黑なり玄なり、かるがゆへに玄といふ、但現在計りしれるに似たり、現在に於いて仁義を制し身をまも

り國を安んず、此に相違すれば族をほろぼし家を亡す等といふ、此等の聖賢の人々は聖人なりと雖とも過去を知らざる凡夫の背をみず、未來を鑑みざること盲人の前を見ざるが如し、但現在に家を治め孝をいたし堅く五常を行ずれば、傍輩もうやまい名も國にきこゑ賢王もこれを召して或は臣となし、或は師とたのみ、或は位をゆづり天も來て守りつかふ、然りと雖ども過去未來を知らざれば父母主君師匠の後世をもたすけず、不知恩の者なり、まことの賢聖にあらず、孔子が此土に聖賢なし、西方に佛圖といふ者あり、此れ聖人なりとすと云ひて外典を佛法の初門となせし是なり、禮樂等を教て内典わたらば戒定慧を知り易からせんが爲め、王臣を教へて尊卑を定め、父母を教へて孝の高を知らしめ、師匠を教へて歸依を知らしむ、二には月氏の外道が三目八臂の摩醯首羅天毗紐天此二天をば一切衆生の慈父慈母又天尊主君と號す、迦毗羅溫樓佉勒娑婆此三人をば三仙と名し、此等は佛前八百已前已後の仙人なり、此三仙の所說を四韋陀と號す六萬歳あり、乃至佛出世に當て六師外道此外經を傳習して五天竺の王の師となる、支流九十五六等にもなれり……其見の深きこと巧なるさま儒家には似るべくもなし、或は過去二生三生乃至七生八萬劫を照見し又兼て未來八萬劫を知る、其所說の法門の極理或は因中有果、或は因中無果、或は因中亦有果、亦無果、等云々此れ外道の極理なり、所謂善き外道は五戒十善戒等を以て有漏の禪定を修し上色無色を極め、上界を涅槃と立て屈步蟲の如くせめのぼれども非想天より返て三惡道に墮ち一人として天に留るものなし、然れども天を極る者は永く歸らずと覺えり、各々自師の義をうけて堅く執する故に、或は冬寒に一日に三度恒河に浴し、或は髮をぬき、或は巖に身を投げ、或は身を火にあぶり、或は五處を燒く、或は裸形或は馬を多く殺せば福を得、或は草木を燒き、或は一切の木を禮す此等の邪義其數を知らず、師を恭敬する事、諸天の帝釋を崇ひ諸臣の皇帝を拜するが如し、然れども外道の法九十五種善惡につけて一人も生死を離れず、善師に仕へては二生三生等に惡道に墮ち、惡師に仕へては順次生に惡道に墮つ……三に大覺世尊此一切衆生の大導師大眼目大橋梁大船師大福田等なり、外典外道の四聖三仙は其名は賢なりと雖も、實には因果を辨へざる事嬰兒の如し、彼を船として生死の大海を渡るべしや、彼を橋として六道の巷越へがたし、我大師は變易猶わたり給へり、況や分段の生死をや、元品の無明の根本猶かたぶけ給へり、況や見思枝葉の麁惑をや、此の佛陀は三十成道より八十御入滅に至るまで、

五十年が間一代の聖教を說き給へり、一字一句皆眞言なり、一文一偈妄語にあらず……されば一代五十年の說教は外典外道に對すれば大乘なり、大人の實語なるべし、初成道の始より泥洹の夕に至るまで說くところの所說皆眞實なり。

二に大小對判とは、佛教內の大乘と小乘との對比にして、既に多く說けるが如く、開目鈔に曰く、但し佛教に入て五十餘年の經々八萬法藏を勸たるに小乘あり大乘あり……俱舍成實律等は阿含經により六界を明して四界を知らず、十方唯有一佛一方有佛だにもあかさず、一切有情悉有佛性とこそとかざらめ、一人の佛性猶ゆるさず、然るを律宗成實宗等の十方有佛有佛性なんど申すは、佛滅後の人師等の大乘の義を自宗に盜み入れたるなるべし、又下山鈔に曰く、一向大乘の國には小乘經をあながちに忌む事なり、强ひて之を弘通すれば、國もわづらひ人も惡道まぬがれ難し、又初心の人には二法を竝て修行せしむる事をゆるさず、月氏の習には一向小乘の寺の者は王路を行かず、一向大乘の僧は左右の路をふむ事なし、井の水河の水同く飲事なし、何況や一房に栖みなんや。

三に權實對判とは、大乘佛教中の權教と小乘とを合せて權と爲し、獨り法華を實として對比するなり、開目鈔に曰く、但し法華經計り教主釋尊の正言なり、三世十方の諸佛の眞言なり、大覺世尊は四十餘年の年限を指して其內の恒河の諸經を未顯眞實、八年の法華は要當說眞實と定め給ひしかば、多寶佛大地より出現して皆是眞實と證明す分身の諸佛來集して長舌を梵天に付く、此の言赫々たり、明々たり晴天の日よりも明かに、夜中の滿月の如し、仰いで信ぜよ、伏して懷ふべし。

又曰く華嚴乃至般若大日經は、二乘作佛を隱すのみならず、久遠實成を說きかくさせ給へり、此等の經々に二の失あり、一には行布を存ずる故に仍未だ權を開かず、迹門の一念三千をかくせり、二には始成を言ふ、故に未だ迹を發せず、本門の久遠をかくせり、此等の二の大法は一代の綱骨一切經の心髓なり。

報恩鈔に曰く、法華經の法師品に釋迦如來金口の誡言をもて、五十餘年の一切經の勝劣を定めて云く、我所說經典無量千萬億已說今說當說而於其中此法華經最爲難信難解等云々、此の經文は釋迦如來一佛の說なりとも等覺已下は仰て信ずべき上、多寶佛東方より來りて眞實なりと證明し、十方の諸佛集て釋迦佛と同く廣長舌を梵天に付け給ふ。

持法華問答鈔に曰く、設ひ此の經第一とも諸經の王とも申候へ皆是權經也、其語によるべからず、之に依て佛は了義經によりて不了義經によらざれと說き、妙樂大師は縱有經云諸經之王不云已今當說最爲第一兼但對帶其義可知と釋し給へり、此の釋の心は設ひ經ありて諸經の王とは云とも、前に說つる經にも後に說んずる經にも、此の經はまされりと云はずば、方便の經としれと云釋也。

顯謗法鈔に曰く、爾前の經々は萬差なれども、束て此を論ずれば、隨他意と申て衆生の心をとかれてはんべり……衆生の心は皆善につけ惡につけて迷を本とするゆゑに佛にはならざるか。

唱法華題目鈔に曰く、法華經をば國王父母日月大海須彌山天地の如くおぼしめせ、諸經をば關白大臣公卿乃至萬民衆生星江河諸山草木等の如くおぼしめすべし。

四に本迹對判とは、法華中の本門と迹門とを對比して、其優劣を論ずるものなり。開目鈔に曰く、迹門方便品は一念三千二乘作佛を說て爾前二失の一を脫たり、然りと雖も未だ發迹顯本せざれば、まことの一念三千もあらはれず二乘作佛も定まらず、水中の月を見るが如し、根なし草の波上に浮ぶに似たり、本門に至りて始成正覺をやぶれば四敎の果をやぶる、四敎の果をやぶれば四敎の因やぶれぬ、爾前迹門の十界の因果を打やぶりて本門の十界の因果をとき顯す、此れ即ち本因本果の法門なり、九界も無始の佛果に具し、佛界も無始の九界に備て、眞の十界互具百界千如一念三千なるべし、かくてかへりみれは華嚴經の臺上十方、阿含經の小釋迦、方等般若や金光明經や阿彌陀經の權佛等は、此の壽量品の佛の天月しばらく大小の器にして、浮給を諸宗の學者等近は自宗に迷ひ、遠は法華經の壽量品を知らず、水中の月に實月の想をなし、或は入て取んとをもひ、或は繩をつけてつなぎとゞめんとす、天台云く不識天月但觀池月等云云……迹門十四品も一向に爾前に同ず、本門十四品も涌出壽量の二品を除ては皆始成を存せり、雙林最後の大般涅槃經四十卷其外の法華前後の諸大乘經に一字一句もなく、法身の無始無終はとけども、應身報身の顯本はとかれず。

十法界鈔に曰く、記の九に云く、若し方便敎は二門俱に虛なり、因明け竟りて果門に望れば則ち一實一虛なり、本門顯れ竟れば則ち二種俱に實なり此の釋の意は本門未だ顯れざる以前は本門に對すれば、尙迹門を以て名けて虛と爲す、若し本門顯れ已ぬれば、迹門の佛因即本門の佛果なるが故に、天月水月本有の法と成りて本迹俱に三世

常住と顯るゝなり、一切衆生の始覺を名けて迹門の圓因と云ひ、一切衆生の本覺を名けて本門の圓果と爲す、修一圓因感一圓果とは是なり、如是法門を談ずるの時迹門爾前は若し本門顯れざれば六道出でず、何ぞ九界を出んや。

五に敎觀對判とは、敎法と觀心との對比なり、三界合文に曰く、本門に於て亦二種あり、一には隨他本門、二には隨自本門なり、初に隨他本門とは五百塵點の本初の實成は正く本行菩薩道所修の行に由る、久遠を說くと雖も其時分を定め遠本を明すと雖も因に由て果を得るの義は始成の說に順ず、具に壽量品の中に說く所の五百塵點等の如し。

又曰く、次に隨自本門眞實の本とは、釋迦如來は是三千世間の總體無始より來た本來自證無作の三身法々皆具足して闕減あることなし、文に云く如來の秘密神通之力と、觀普賢經に云く、釋迦牟尼佛名毘盧遮那遍一切處其佛住處名常寂光

授職灌頂口傳鈔に曰く、此の品壽量の肝要は釋尊の無作三身を明して弟子の三身を增進せしめんと欲す、今の疏に云く、今正詮量本地三佛功德故言如來壽量品（已上此文）の三身は無始本覺の三身なりと雖も、且らく五百塵點劫の成佛を立つ三身即三世常住なり、今弟子の始覺の三身も亦我が如く顯して三世常住の無作を成すべき也。

開目鈔に曰く、一念三千の法門は但法華經本門壽量品の文の底に秘して沈めたり、龍樹天親知てしかも未だひろひ出さず、但我が天台智者のみこれをいだけり。

御義口傳に曰く、酒に重々これあり權敎は酒、法華經は醒めたり、本迹相對するときは迹門は酒なり、始覺の故なり、本門は醒めたり、本覺の故なり、又本迹二門は酒なり、南無妙法蓮華經は醒めたり。

又曰く、無上に重々の仔細あり、外道の法に對すれば、三藏敎は無上、外道の法は有上なり、又三藏敎は有上、通敎は無上、通敎は有上、別敎は無上、別敎は有上、圓敎は無上なり、又爾前の圓敎は有上、法華の圓は無上、又迹門は有上、本門の圓は無上乃至今日蓮の類の心は無上とは南無妙法蓮華經無上の中の無上なり。

上來各種の判敎論中、五時は一種歷史的竪の階級判釋にして、八敎の中化儀の四敎即ち頓漸秘密不定の差別は、信者の機根に立脚せるもの、又化法の四敎即ち藏通別圓は敎義上の哲理に依りて深淺を分別せしものなり、自他二敎は橫に法華と其他との優劣を判別し、三種の敎相論は機根論と敎義論とを宗敎的に融合せしめたる特殊の

判教にして又は竪又は横、又は非竪非横の事實論なりとす。

次に此の四重及び五重の興廢は、固より竪に淺深の差別を判別せしものにして、一見すれば眞言宗の十住心論に相似たる點あるも、十住心論は單に梯子段的に淺深を序するに止まるも、此の四重五重の興廢は、階級的なると同時に、甲乙二教を相對せしめて其優劣を判する横の意義をも含有するものなれば、十住心論と同時に顯密二教論をも合攝せるものなりと謂ひ得べきなり、左れば此の點より見る時は、此れも亦非竪非横、又は竪、又は横の判教論と云つべきなり。

第六節　宗教五綱

五綱とは法華經神力品の、於如來滅後知佛所說經因緣及次第隨義如實說と云ふ文句より捻出せし、日蓮聖人獨得の判釋にして、曾て宗教の五箇と曰ひ、或は五知判と稱し、五義とも云へり、五綱とは教、機、時、國、序の五にして此の五つは一代佛教の淺深勝劣を判じ、又此を信じ宣布する上に於て、羅針盤たるべき大綱なる故に五綱と稱す。

第一に教とは、宗を立つる所以にして、釋尊一代所說の教法に、小大權實顯密等の差別あり、其中に於て爾前四十餘年の教は未顯眞實にして、方便假設の權教なれば、之を用ゐず、第五時開顯の妙法蓮華は、眞實教に據て立る所の宗旨なり。

第二機とは、人を察する所以にして、凡そ衆生の機根に、利鈍種脫等の種々の別あり、中に就て本末有善（未有下種善者）の者は、今初めて佛種を心田に下す、之を下種の機と云ひ、本已有善の者は今重ねて聽聞修習して成熟し或は解脫す、之を熟脫の機と云ふ、如來の滅後正像二千年間は、多分佛在世に聞法下種せし輩、大小乘教に藉て薰習練熟し、或は解脫するの機類とし、末法の初は多分是下種結緣の機根とす、故に日蓮は不輕菩薩の跡を繼ぎ强て妙法を說て、下種結緣せしむ、是れ日宗の折伏を正意とする所以なり。

第三時とは、世に應ずる所以にして、如來の滅後に三時の別あり、大悲經に所謂正法千年、像法千年、末法萬年是なり、又大集經に五箇の五百歲を明す、第一の五百歲は解脫堅固。（修小乘證四果）第二の五百歲は禪定堅固第三の五百歲は讀誦多聞堅固、第四の五百歲は多造塔寺堅固、第五の五百歲は鬪諍堅固にして白法隱沒す、法華經藥王品に云く我滅度後後五百歲廣宣流布於閻浮提無令斷絕と、是れ日蓮聖人が本門の妙法蓮華經を弘通する根源なり。

第四に國とは、方を定むる所以にして、處に依り國に隨て、物殊に情異なれば、弘經の

方法も亦斟酌せざるべからず、是れ知國の必要たる所以なり、日蓮聖人が我日本を法華經有緣の國本門の根本道場と信じ、又月は西より出でゝ東を照す、日は東より出でて西を照す、佛敎も亦然り、正像二千年間は西天の佛法東土に流傳せり、末法には東方日本の佛敎必ず西方に弘布すべしと云ひしが如き是なり。

第五序とは、變に應じ宜に適ふ所以にして、所謂宗敎流布の前後を知るを云ふ、例へば醫師の病を治するに前に、服する藥を識りて、後の藥を授る如し、若し先に造化敎流布せば、後に因緣敎を以て之を破すべし、大小權實等も亦復是の如し、是れ即ち從淺至深して、次第に轉迷開悟せしむる所以なり。

以下聖人の著述に依りて之を證せんに。

第一敎とは、敎機時國鈔に曰く、敎とは釋迦如來所說の一切の經律論五千四十八卷四百八十帙、天竺に流布すること一千年、佛の滅後二千十五年に當つて震旦國に佛經を渡す、後漢の孝明皇帝永平十年丁卯より唐の元宗皇帝開元十八年庚午に至る六百六十四歲の間に一切經渡り畢りぬ、此の一切の經律論中に小乘、大乘、權經、實經、顯經、密經あり、此等を辨ふべし、此の名目は論師人師より出でずして佛說より起る、十法世界の一切衆生一人も無く之を用ゆべし、之を用ゐざる者は外道と知るべき也、阿含經を小乘と說く事は方等般若、法華涅槃等の諸大乘經より出でたり、法華經には一向に小乘と說きて法華經を說かざれば、佛慳貪に墮すべしと說き給ふ、涅槃經には一向に小乘經を用て佛を無常なりと云はん人は舌口中に爛るべしと云々。

第二機とは、敎機時國鈔に曰く、機とは佛敎を弘むる人は必ず機根を知るべし舍利弗尊者は金師に不淨觀を敎へ浣衣の者に數息觀を敎ゆる間、九十日を經て所化の弟子佛法を一分も覺らずして、還て邪見を起し一闡提と成り畢る。佛は金師に數息觀を敎へ、浣衣の者に不淨觀を敎へ給ふ、故に須臾の間に覺ることを得たり、智慧第一の舍利弗すら尙ほ機々知らず、何に況や末代の凡師機を知り難し、但し機を知らざる凡師は所化の弟子に一向に法華經を敎ふべし、問て云く無智の人の中にして此の經を說くこと莫れとの文は如何、答へて云く機を知るは智人の說法すること也、又謗法の者に向ては一向に法華經を說くべし、毒鼓の緣を成さんが爲めなり、例せば不輕菩薩の如し、亦智者と成るべき機と知らば必ず先づ小乘を敎へ、次に權大乘を敎へ、後に實大乘を敎ゆべし、愚者と知らば必ず先づ實大乘を敎ゆべし、信謗共に下種と爲れば也。

第三時とは、教機時國鈔に曰く、時とは佛法を弘めん人は必ず時を知るべし、譬へば農人の秋冬田作に種と地と人の功勞とは違はざれども一分も益なく還て損す、一段を作る者は少損也、一町二町等の者は大損也、春夏耕作すれば、上中下に隨て皆分々に益あるが如し。佛法も亦復た是の如し、時を知らずして法を弘めば益なき上還て惡道に墮する也、佛出世し給ふて必ず法華經を說かんと欲するに縱ひ機あれども時なきが故に四十餘年此の經を說き給はず、故に經に云く說時未だ至らざるが故なり等云云。佛の滅後の次の日より正法一千年は持戒の者は多く破戒の者は少し、正法一千年の次の日より像法一千年は破戒の者は多く無戒の者は少し、像法一千年の次の日より末法一萬年は破戒の者は少く無戒の者は多し、正法には破戒無戒を捨てゝ持戒の者を供養すべし、像法には無戒を捨てゝ破戒の者を供養すべし、末法には無戒の者を供養すること佛の如くすべし、但し法華經を謗せん者をば正像末の三時に亘りて持戒の者をも無戒の者をも破戒の者をも共に供養すべからず、供養せば必ず國に三災七難起り必ず無間大城に墮す可きなり、法華經の行者の權經を謗するは主君親師の所從子息弟子等を罰するが如し、權經の行者の法華經を謗するは所從子息弟子等の主君親師を罰するが如し、又當世は末法に入て二百十餘年なり。權教念佛等の時か法華經の時か能く能く時刻を勘ふ可きなり。

第四國とは、教機時國鈔に曰く、國とは佛教は必ず國に依て之を弘むべし、國には寒國熱國貧國富國中國邊國大國小國、一向偸盜國一向殺生國一向不孝國等あるあり、又一向小乘の國一向大乘の國大小兼學の國か、大小兼學の國なるか、能く能く之を勘ふべし。國か一向に大乘の國か、大小兼學の國もこれあり、然るに日本國は一向に小乘の

又御義口傳に曰く、此とは閻浮提の中には日本國也、汝とは末法の一切衆生也、當品流布の國土とは日本國也、總じては南閻浮提也、所化とは日本國の一切衆生也、修行とは、無疑曰信の信心の事也。

第五序とは、教機時國鈔に曰く、教法流布の先後とは未だ佛法渡らざる國には未だ佛法を聽かざる者あり、既に佛法渡れる國には佛法を信ずる者あり、必ず先に弘まる法を知て後の法を弘むべし、先に小乘權大乘弘らば、後に必ず實大乘を弘むべし、先に實大乘弘らば後に小乘權大乘を弘むべからず、瓦礫を捨てゝ金珠を取るべく金珠を捨てゝ瓦礫を取ること勿れ、已上の五義を知て佛法を弘めば日本の國師とも成るべ

きか。

此の五綱論中の教及機の二綱には、前の五時八教、自他二教、四重五重の興廢、三種の教相等の各判教論を含有すべきものにして、各宗の判教と其本質を同くし、其他の三綱中、時即ち正像末の三時は、淨土宗に於ても之を唱道し、眞言宗に於ては此の三時を取らず、眞修の時即ち之れ正法時代と論じ、三時はあるも年序は無しと爲せり、又國は眞言宗にても日本は大日如來の本土、大日經有緣の地と稱する事あるも、日蓮宗のそれ程徹底し居らざる嫌あり、次に五綱中最後の序は未だ他に適恰の類例を見ざる所なりとす。

第四章　折伏篇

第一節　攝折二門

佛說に二門あり、曰く攝受門、(又曰悲門拔苦之義)曰く折伏門、(又曰慈門與樂之義)攝受とは攝取容受の義、即ち安樂行に不說他人好惡長短乃至隨問爲說と云如き是なり、次に折伏とは折破降伏の義卽ち不輕菩薩の凡有所見則以大乘而强毒之と云如き是なり、(强毒とは强て法を說て結緣せしむ)例せは文武の二道を以て世を治め、又父母の子を育するに、母は愛を以て子を懷け、父は嚴を以て子を敎る如く、弘經者は亦然り、或は四法(布施、愛語、利行、同事)を以て衆生を攝受し、又妙法を說て、下種結緣せしむ、故に勝鬘經に云く、我得力時於彼彼處、見此衆生、應折伏者而折伏之、應攝受者而攝受之、何以故以折伏攝受故令法久住とは是なり。

日蓮聖人が折伏を主とせしは末法の初め鬪諍惑亂權實雜揉し迷信的の祈禱等盛なる故此の時に膺りて、本門の大白法を弘通せんとするには勢折伏を主とせざるべからざるものあり、然るに折伏せられたるものが怨言を放ち、又局外者が此を以て聖人の態度人格を云々するが如きは甚しき誤謬と云ふべきなり。

聖人が南條兵衞に與へたる書中に、いかなる大善をつくり法華經を千萬部讀み書寫し、一念三千の觀道を得たる人なりとも法華經の敵をだんせめざれば得道なりがたし、たとへば朝につかふる人の十年二十年の奉公あれども、君の敵をしりながら奏もせず、私にもあだまずは奉公皆うせて、還てとがに行はれんが如しとあるを見れば如何に聖人が法に忠實にして、亦眞面目なるかを知るべく、單に折伏を以て自ら快と

するものとは、全然其意趣を異にせり、然り而して更に折伏を必要とする根底に就ては、左の諸書に依つて之を徵し得べし。

開目鈔に曰く、止觀に云く夫佛兩說一攝二折、如安樂行不稱長短是攝義、大經執持刀杖乃至斬首是折義、雖與奮殊途俱令利益等云々……文句に云く問大經明親付國王持弓帶箭摧伏惡人、此經遠離豪勢謙下慈善、剛柔碩乖云何不異、答大經偏論折伏住一子地何曾無攝受、此經偏明攝受頭破七分非無折伏各舉一端適時而已等云々、涅槃經の疏に云く出家護法取其元心所爲棄事存理匡弘大敎故言護持正法、不拘小節故言不修威儀、昔時平而法弘應持戒勿持杖、今時嶮而法翳應持杖勿持戒、今昔俱嶮應俱持杖、今昔平應俱持戒、取捨得宜不可一向等云々……夫れ攝受折伏と申す法門は水火の如し、火は水を厭ふ水は火を惡む、攝受の者は折伏を笑ふ折伏の者は攝を悲む、無智惡人の國土に充滿の時は攝受を前とす、安樂行品の如し、邪智謗法の者の多き時は折伏を前とす、常不輕品の如し、譬へば熱き時に寒水を用ひ寒き時に火を好が如し、草木は日輪の眷屬寒月に苦をう諸水は月輪の所從、熱時に本性を失ふ、末法に攝受折伏あるべし、所謂惡國破國の兩國あるべき故也、日本國の當世は惡國破法の國かと知るべし。

聖愚問答鈔に曰く、修行に攝折あり、攝受の時折伏を行ずるも非なり、折伏の時攝受を行ずるも失也、然るに今世は攝受の時か折伏の時か先づ是を知るべし、攝受の行は此國に法華一純に弘りて邪法邪師一人もなしとはいはん、此時は山林に交て觀法を修し五種六種乃至十種等を行ずべき也、折伏の時はかくの如くならず、經敎のおきて蘭菊に諸宗の頤擧れを擅にし邪正肩を並べ大小先を爭はん時は、萬事を閣て謗法を責むべし、是折伏の修行也、此旨を知ずして攝折途に違はゞ得道は思もよらず惡道に隨つべしと云事、法華涅槃に定め置き、天台妙樂の解釋にも分明也、是佛法修行の大事なるべし、譬へば文武兩道を以て天下を治るに武を先とすべき時もあり、文旨とすべき時もあり、天下無爲にして國土靜ならん時は文を先とすべし、東夷南蠻西戎北狄蜂起して野心をさしはさまんには武を先とすべき也。

佐渡御書に曰く、佛法は攝受折伏時によるべし、譬へば世間の文武兩道の如し、されば昔の大聖は時によりて法を行ず、雪山童子薩埵王子は身を布施とせば法を敎へん菩薩の行となるべしと責しかば身を捨つ、肉をほしからざる時身を捨つべきか、紙なからん世には身の皮を紙とし、筆なからん時は骨を筆とすべし、破戒無戒を毀り持戒

正法を用ん世には諸戒を堅く持つべし、儒教道教を以て釋教を制止せん日には道安法師惠遠法師法道三藏等の如く王と論じて命を輕ふすべし、釋教の中に小乘大乘權教實教雜亂して明珠と瓦礫と牛驢の二乳を辨ざる時は、天台大師等の如く大小權實顯密を强盛に分別すべし。

此等の諸書を見る者、誰れか日蓮聖人の誠意を疑ひ得べき、誰れか亦其熱烈に感奮せざるべき、然るに現時は如何、聖人の末弟輩は、徒らに口舌を弄して一片の誠意なく單に他を罵りて得たりと爲し、殊に內賤むべき私慾を包む、若し夫れ聖人をして之を目せしめば、先づ我末徒より折伏し了らんのみ。

第二節　諸宗無得道

日蓮上人の念佛、禪、眞言、律に對する折伏、卽ち四箇格言は何人も知る所なるが、聖人は獨り此等四宗を破斥したるのみにあらずして、法華以外の各宗は悉く之を折伏して無得道と爲せり、本尊問答鈔に曰く、俱舍宗淺近なれども一分は小乘經に相當するに似たり、成實宗は大小兼雜して謬誤あり、律宗は本は小乘、中項は權大乘、今は一向に大乘宗とおもへり、又傳教大師の律宗あり別に習ふ事なり、法相宗は源權大乘經の中の淺近の法門にてありけるが、次第に增長して權家と竝び結句は彼宗々を打ち破らんと存せり、譬ば日本國の將軍將門純友等の如し、下に居て上を破る、三論宗も又權大乘の空の一部なり、此も我は實大乘と思へり、華嚴宗は又權大乘と云ひながら餘宗にまされり、譬へば攝政關白の如し、然るに法華經を敵となして立る宗なる故に臣下の身を以て大王に順せんとするがごとし、淨土宗と申も權大乘の一分なれども、善導法然がたばかりかしこくして、諸經をば上げ觀經をば下し正像の機をば上げ末法の機をば下して末法の機に相叶へる念佛を取り出して、機を以て經を打ち一代の聖教を失ひて一門を立たり、譬へば心かしこくして身は卑しき者を上げ心はかなきものを敬ひて賢人をうしなふがごとし、禪宗と申は一代聖教の外に眞實の法有りと云云、譬ばをやを殺して子を用ひ主を殺せる所從のしかも其位につけるがごとし、眞言宗と申は一向に大妄語にて候が深く其根源をかくして候へば淺機の人あらはしがたし一向に誑惑せられて數年を經て候、先天竺に眞言宗と申す宗なし、然れどもありと云ふ、其證據を尋ぬべきなり、所詮大日經はこゝにわたれり、法華經に引向て其勝劣を之を見る處、大日經は法華經より七重下劣の經なり證據彼の經此の經に分明なり……

しかるを或は云く法華經に三重の主君或は二重の主君なりと云云、以の外の大僻見なり、譬ば劉聰が下劣の身として愍帝に馬の口をとらせ趙高が民の身として横に帝位につきしがごとし、又彼の天竺の大慢波羅門が釋尊を床として坐せしが如し、漢土にも知る人なく日本にもあやめずして既に四百餘年をおくれり、如是佛法の邪正亂しかば三法も漸く盡きぬ、結句は此國他國にやぶられて亡國となるべきなり。

又如說修行鈔に曰く、問云說修行の行者は現世安穩なるべし、何か故ぞ三類の强敵盛ならんや、答云釋尊は法華の御爲に今度九横の大難に値ひ給ふ、過去の不輕菩薩は法華經の故に枝木瓦石を蒙り、竺の道生は蘇山に流れ、法道三藏は面に火印をあてられ、師子尊者は頭を刎られ、天台大師は南三北七にあだまれ、傳敎大師は六宗に憎れ給へり、此等の佛菩薩大聖等は法華經の行者として而も大難にあひ給へり、此等の人人を如說修行の人と不云何にか如說修行の人尋ん、然るに今の世は闘諍堅固白法隱沒なる上惡國惡王惡臣惡民のみ有て正法を背て邪法邪師を崇重すれば、國土に惡鬼亂れ入て三災七難盛に起れり、かかる時刻に日蓮蒙りて佛勅此土に生けるこそ時の不祥なれ、法王の宣旨背き難ければ任經文權實二敎の軍を起し忍辱の鎧を著て妙敎の劍を提げ、一部八卷の肝心妙法五字の旗を指上て、未顯眞實の弓を張、正直捨權の箭をはげて、大白牛車に打乘て權門をかつばと破り、彼に押懸此へ押寄、念佛眞禪律等の八宗十宗の敵人を攻るに、或は逃げ或は引退き或は生取れし者は我弟子となる、或は攻返し攻落しすれども敵は多勢也、法王の一人は無勢也、至今軍やむ事なし、法華折伏破權門理の金言なれば、終に權敎權門の輩を一人もなく攻落して法王の家人となし、天下萬民佛乘と成て妙法獨り繁昌せん時、萬民一同に南無妙法蓮華經と唱へ奉らば、吹風枝をならさず雨壤を不碎、代は義農の世となりて、今生には不祥の災難を拂ひ長生の術を得、人法共に不老不死之理顯れん時を各々御覽せよ、現世安穩の證文不可有疑也。

第三節　天台と日蓮

天台宗と日蓮宗とは、均しく法華經を以て正所依とするものなれば敎理上に於ては何等差異なかるべき理なれども、實際に於ては甚しき徑庭ありと爲し、古來八異十異等稱して盛んに論難せり、之れ要するに法華經を事的に解釋すると理的に解するとの差異より來りしものにして、法華經中二十八品前十四品を理門迹門と爲し、後十

四門を事門本門と爲すは、天台に於ても既に之を認むる所なり、然れども天台宗の解釋は法華經全體を理的に解し、日蓮宗は迹門を捨てゝ專ら本門を取らんとするより、寸毫遂に千里の差を生ずるに至り、其結果佛身論に於ても、成佛觀に於ても甚しき懸隔を生ぜしものなり、即ち換言すれば天台宗は法華經を哲學的に觀じ、日蓮宗は宗教的に觀じたるより來れる自然の差異なりとす。

今其所謂十異に就て、左に證文を擧げて以て、概論に供すべし。

第一に內同外異とは、立正觀鈔に曰く、止觀は天台己證の界如三千三諦三觀を正とす迹門の正意なり、故に知んぬ迹佛の知見なりと云ふことを、但し止觀に絕待不思議の妙觀を明すと云ふも只一念三千の妙觀に且らく與えて絕待不思議と名くる也、問ふ天台大師眞實に此(本門)一言の妙法を證得し玉はざるか、答ふ內證は爾らざる也、外用に於ては之を弘通し玉はざる也、所謂內證の邊をば秘して外用には三觀と號して一念三千の法門を示現し給ふ也、問ふ何故ぞ知りながら弘通し給はざるや、答ふ時至らざるが故に、付囑に非ざるが故に、迹化なるが故なり。

第二に天台機法とは、立正觀鈔に曰く、天台大師は靈山の聽衆として如來出世の本懷を宣べ玉ふと雖も時至らざるが故に、妙法の名字を替へて止觀と號す、迹化の衆なるが故に本化の付囑を弘め給はず、正直の妙法を止觀と說きまぎらかす故に、有のまの妙法ならざれば帶權の法に似たり、故に知んぬ、天台弘通の所化の機は在世帶權の圓機の如し、本化引通の所化の機は法華本門の直機なり、止觀法華は全く體同じと云はむ、尙人師の釋を以て佛說に同ずる失甚だ重なり、何況や止觀は法華經に勝ると云ふ邪義を申し出すは、但是れ本化弘經と迹化弘通と像法と末法と迹門の付囑と本門の付屬とを、末法の行者に云ひ顯さんが爲の佛天の御計也

第三に天台迹化とは、觀心本尊鈔に曰く、本門の所化を以て迹門の所在に比較すれば一滴と大海と一塵と大山となり、本門の一菩薩を迹門の十萬世界の文殊觀音等に對向すれば猨猴を以て帝釋に比するに尙及ばず。

第四に迹面本裏とは、觀心本尊鈔に曰く、像法の中末に觀音藥王南岳天台等と示現し迹門を以て面と爲し本門を以て裏と爲して、百界千如一念三千其義を盡せり、但理具を論じて、事行の南無妙法蓮華經の五字竝に本門の本尊未だ廣く之を行せず、所詮圓機有て圓時無き故也。

第五に本迹相違とは、治病鈔に曰く、本迹の相違は水火天地の違目なり、例せば爾前と法華經との違目よりも尙相違あり……なを佛は分明に說分け給れども、佛の御入滅より今に二千餘年が間、三國竝に一閻浮提の內に分明に分たる人なし、但漢土の天台日本傳敎此二人計りこそ相分け給ひ候へども本門と迹門との大事に圓戒いまだ分明ならず。

第六に觀法理事とは、治病鈔に曰く、一念三千の觀法に二あり、一には理二には事なり、天台傳敎等の御時には理なり、今は事なり、觀念すでに勝るゝ故に大難又色まさる、彼は迹門の一念三千、此は本門の一念三千なり、天地はるかに殊なりことなり。

第七に台祖戀末とは、撰時鈔に曰く、天台大師云く後五百歲遠沾妙道、妙藥大師云く末法之初冥利不無、傳敎大師云く正像稍過已末法太有近法華一乘機今正是其時何以得知、安樂行品云末世法滅時也、又云語代則像終末初尋地唐本竭西原人則五濁之生鬪諍之時、經云猶多怨嫉況滅度後此言良有以也云云、夫れ釋尊の出世は住劫第九の減人壽百才の時なり、百歲と十歲との中間在世五十年滅後二千年と一萬年となり、其中間に法華經の流布の時二度あるべし、所謂在世の八年と滅後には末法の始の五百年なり、而るに天台妙樂傳敎等は進では在世法華經の時にももれさせ給ぬ、退ては滅後末法の時にも生させ給はず、中間なる事をなげかせ給て末法の始を戀させ給ふ御筆なり……道心あらん人は此を見きゝて悅ばせ給へ、正像二千年の大王よりも後世をもはん人々は末法の今の民にてこそあるべけれ、此を信せざらんや、彼の天台の座主よりも南無妙法蓮華經と唱る癲人とはなるべし。

第八に去暦昨食とは、上野殿返事に曰く、今末法に入て本門のひろまらせ給ふべきには、小乘權迹門の人々設ひ科なくとも彼々の法にては驗あるべからず、譬へば春の藥は秋の藥とはならず、……天台の學者慈覺より已來玄文止の三大部の文をとかく料簡し義理をかまふとも、去年の暦昨日の食の如し、末法の始め五百年に法華經の題目をはなれて成佛ありといふ人は佛說なりとも用ふべからず、何に況や人師の義をや。

第九に止觀用否とは、十八圓滿鈔に曰く、上行菩薩の弘通し給ふべき秘法を日蓮先立て之を弘む身に當の意に非ずや、上行菩薩の代官の一分なり、所詮末法に入りて天眞獨朗の法門無益なり、助行には用ゆべき也、正行には唯南無妙法蓮華經なり、傳敎大

師云く天台大師信順釋迦助於法華宗敷揚震旦叡山一家相承天台助於法華宗弘通日本、今日蓮は塔中相承の南無妙法蓮華經の七字を末法の時日本國に弘通す、是豈に時國相應の佛法に非ずや、末法に入て天眞獨朗の法を弘て正行を爲ん者は必ず無間大城に墮んこと疑無し……一心三觀一念三千の極理は妙法蓮華經の一言を出でず、敢て忘失すること勿れ、敢て忘失することなかれ。

第十に內證觀心とは、立正觀抄に曰く、夫れ天台の觀法を尋ぬるに大蘇道場に於て三昧開發せしより已來、目を開て妙法を思へば隨緣眞如なり、目を閉ぢて妙法を思へば不變眞如なり、此兩種の眞如は只一言の妙法に有り、我妙法を唱ふる時萬法茲に達し一代の修多羅一言に含す、所詮迹門を尋ねば迹廣く、本門を尋ねば本高し、如かじ已心の妙法を觀ぜんにはと思食れし也。

更に又日蓮宗に於ては山徒雜亂と稱し、天台宗は智證慈覺以下密敎に重きを置き、法華を輕んじ、密禪等を混合するを以て非常なる罪惡と爲し、之れ法華獅子身中の虫、否、法華の怨敵なりとして、盛に拆破せり、之れ固より敎權主義たる自主的宗敎上の痼疾より出でたるものなるべきも其雜博混揉を嫌ひ、純一を尙ぶ宗敎の根本義を得たるものと云ふべし。

撰時鈔に曰く、傳敎大師……我心には法華は眞言にすぐれたりとおぼしめしゝゆへに、眞言の名字を削らせ給ひて、天台宗の止觀眞言等かゝせ給ふ。

報恩返書に曰く、日本國は叡山計りに、傳敎大師の御時法華經の行者ましましけり、義眞、圓澄は第一第二の座主なり、第一の義眞計り傳敎大師に似たり、第二の圓澄は半ば傳敎の御弟子、半ば弘法の弟子也。

本尊問答鈔に曰く、慈覺大師……第三の座主となり給ふ、天台の眞言これよりはじまる。又智證大師は……日本國にては義眞慈覺圓澄別當等の諸德に八宗を習ひ傳へ去る仁壽二年に……漢土に入り……諸大師に七年の間顯密二敎を習ひ極め給て、去る天安二年に御歸朝、何れも現のため、當のため、月の如く日の如く、代々の明主、時々の臣民信仰餘り有り歸依怠り無し、故に愚痴の一切偏に信ずるばかり也。

四信五品鈔に曰く、弘法、慈覺、智證の三大師事を漢土に寄せ、大日の三部は法華經に勝ると謂ひ、剩さへ敎大師の削る所の眞言宗の宗の一字之を副へて八宗と云ひ、三人一同に勅宣を申下して日本に弘通し、寺毎に法華經の義を破す、是偏に己今當の文を

破す爲め釋迦多寶十方の諸佛の大怨敵と成り、然して後佛法漸く廢れ、王法次第に衰ふ。

三大秘法鈔に曰く、第三第四の慈覺智證の存の外に、本師傳敎義眞に背きて、現勝事勝の狂言を本として、我山の戒法をあなづり戲論とわらいし故に、存の外に延曆寺の戒淸淨無染の中道の妙戒なりしが、徒に土泥となりぬる事、云つても餘りあり、歎きても何かせん。

此の他禪淨土をも此の筆法にて破伏せり、雜亂を嫌ふて、慈覺智證を打破するは、頗る我が意を得たり、然れども日蓮聖人の本迹の分別、事勝理同の思想は、正しく眞言の哲理より得來れると同時に、又日本を法華經の有緣國とするは、弘法が既に大日經と大日如來と大日本とを結合して論せし換骨奪胎と云ふべきなり。

第四節　四箇格言

日蓮聖人の四箇格言は、宇宙絕大の痛快事なり、宗敎界の異彩としては、回々敎の左に聖書、右に劒よりも屠一屠の峻烈を極む、實に之れ敎界の大爆裂彈なり、四十三珊の大砲彈なり、外敎は最早論ずるに足らず、均しく佛敎內の先進に向つて肉薄し、一擧之を殲滅せんとす、其意氣の豪なる、其自主自信の强き、マホメットもヤソも三舍を避くべく、況んや其他の俗稱圓滿者流の開祖の如きをや。

四箇格言とは、一に念佛無間、此れ淨土門に於て聖道門を難行と爲し、甚しきは猶權なりと爲し、淨土の三部經を以て法華經以上なりと爲すを以て、法華經の文中に、毀謗此經……入阿鼻獄とあるを引用して、此の格言を立てたるものなり。

第二には禪天魔、是れ禪宗が可說は方便、不可說以心傳心を眞實と爲し、經論の如き文字を排して重要視せず、從つて法華經の如きも、禪宗の前には甚だ小なるもの即ち方便的のものたるべきに至るを以て、之れに對して其可說不可說論の如きは、既に法華經に明斷あり、初めに我法妙難思不可以言宣と謂ひしを、弟子の懇請に由り後に說けり、左れば不可說の後に可說あり、又佛涅槃經に離文字不可說解脫とあり、斯の如き聖文あるに關せず、不立文字不可說を唱ふるは、涅槃經の遺誡不隨順佛說者悉是魔眷屬とあるに相當すと爲し、以て禪天魔の格言を立てしものなり。

第三に眞言亡國、此れ眞言が顯密の意義を誤釋し、同一佛敎中に釋迦大日の二敎主を立て、殊に眞實なる釋迦を貶し、又其所說の唯一無二たる法華經をも下して、却つて

大日如來及大日經を尊重し釋迦法華以上と爲すは、之れ國に二王あると均しく、精神界の滅裂を來たすものにして、全たく佛敎を亡ぼすものなりと云ふ意味より、經文を引き幾多の證據を備へて、以て此の格言を立てしものなり。

第四に律國賊、大乘法華の圓頓戒起れば、爾前の小乘律は當前廢止すべきものなり、此れ亦經文に明證ある所にして、恰かも新なる法律出づれば、夫れに抵觸すべき舊法は、別に公示せざるも當然廢止せらるべきと同じ義なり、法華以前の諸經諸宗は暫らく機根を調熟する爲めにせし、臨時的の假法なり、末法に至れば彌々法華の大白法起つべきは、經中明證あり、斯くて法華既に立つるも律は猶改めず、小乘戒を以て却つて大乘敎なりと斷じ、或は圓頓戒を誹謗する等、此れ全たく新令の大憲章を無視し、之れに背反する國賊と同じと爲して以て此の格言を立てしものなり。

要するに四箇格言は、法華中心の正統擁護を主として、傍ら當時の墮落せる佛敎界を覺醒掃蕩せんとする、熱烈なる壯圖たりしなり、此れに對する日蓮聖人の諸文を左に揭げ以て參酌に供すべし。

念佛無間地獄鈔に曰く、念佛は無間地獄の業因なり法華經は成佛得道の道路なり、早く淨土宗を捨て法華經を持ち菩薩を得べき事、法華經第二譬喩品に云く若人不信毀謗此經則斷一切世間佛種其人命終入阿鼻獄……此の文の如くんば方便の念佛を信じて眞實の法華を信せざらん者は無間地獄に隨すべき也、念佛者云く我等が機は法華經に及ばざる間信せざる計なり、毀謗する事はなし、何の科に地獄に墮つべきか法華宗云く不信の條は承伏か、次に毀謗と云は即ち不信なり……其上淨土宗には現在の父たる敎主釋尊を捨て他人たる阿彌陀佛を信ずる故に、五逆罪の咎に依て必ず無間大城に墮つべき也。

經に今此三界皆是我有と說給は主君の義也、其中衆生悉是吾子と云は父子の義也、而今此處多諸患難唯我一人能爲救護と說給は師匠の義也、而て釋尊付囑の文に此法華經をば付囑有在と云云、何の機か漏べき、誰人か信せざらんや、而に淨土宗は主師親たる敎主釋尊の付囑を背き、他人たる西方極樂世界の阿彌陀如來を憑む、故に主に背けり、八逆罪の兇徒也、違敕の咎遁れ難し、即ち朝敵也、爭か咎無ん乎、次に父の釋尊を捨る故に五逆罪の者也、豈に無間地獄に墮ざるべけんや、次に師匠の釋尊に背く故に七逆罪の人也、爭か惡道に墮せざらんや、如此敎主釋尊は婆娑世界の衆生には主師親の

三德を備て大恩の佛にて御坐す、此佛を捨て他方の佛を信じ彌陀藥師大日等を憑奉る人は、二十逆罪の咎に依て、惡道に墮べき也、淨土三部經は釋尊一代五時の說敎の內第三方等の內より出たり、此四卷三部の經は全く釋尊の本意に非ず、三世諸佛出世の本懷にも非ず、唯暫く衆生誘引の方便なり……然れば法華の序分無量義經には四十餘年顯眞實と說給て念佛の法門を打破り給ふ、正宗法華經には正直捨方便但說無之道と宣給ふて念佛三昧を捨給ふ、之に依て阿彌陀經の對告衆長義舍利弗尊者、阿彌陀經を打捨て法華經に歸伏して華光如來と成り畢ぬ、四十八願付囑の阿難尊者も淨土三部經を抛て法華經を受持して山河慧自在通王佛と成り畢ぬ、阿彌陀經の長老舍利弗は千二百羅漢の中に第一上首の大聲聞閻浮提第一の大智者也肩を竝ぶる人なし阿難尊者多聲第一の極聖釋尊一代の說法を空に誦せし廣學の智人也、かゝる極度の大阿羅漢尙往生成佛の望を遂す、佛在世の祖師如此、祖師の跡を踏むべくば三部經を抛て法華經を信じ無上菩提を成ずべき者也、

同書には又更に進んで淨土門の諸師に就て評せり、曰く、佛の滅後に於ては祖師先德多しと雖も大唐揚州の善導和尙にまさる人なし……一代聖敎に於て聖道淨土の二門を立たり法華等の諸大乘經をば聖道門と名け自力の行と嫌り、聖道門を修行して成佛を願はん人は百人にまれに一人二人、千人にまれに三人五人得道する者や有んずらん、乃至千人に一人も得道なき事も有べし、觀經等の三部經を淨土門と名け、此淨土門を修行して他力本願を憑て往生を願ん者は十即十生百即百生として十人は十人百人は百人決定往生すべしとすゝめたり……一天四海善導和尙を以て善智識と仰ぎ貴賤上下皆悉く念佛者と成れり、但し一代聖敎の大王三世諸佛の本懷たる法華の文には若有聞法者無一不成と說給へり……此兩說水火なり何の邊に付べき乎、善導が言を信じて法華經を捨つべきか、法華經を信じて善導の義を捨つべきか如何、夫れ一切衆生皆成佛道の法華經、一聞法華經決定成菩提の妙典、善導が一言に破れて千中無一虛妄の法と成り、無得道敎と云はれ平等大慧の巨益は虛妄と成り、多寶の皆是眞實の證明の御言妄語と成るか、十方諸佛の上至梵天の廣長舌も破られ給ぬ、三世諸佛の大怨敵と爲り十方如來成佛の種子を失ふ大謗法の科甚だ重し、大罪報の至り無間大城の業因也、依之忽に物狂にや成けん所居の寺の前の柳の木に登て、自ら頸をくゝりて身を投げ死し畢ぬ、邪法のたゝり踵を回らさず冥罰爰に見たり。

次に又法然上人及選擇集等に就ては、同書に左の如く云へり、日本國にては法然上人淨土宗の高祖也……選擇集と申す文を作て一代五時の聖敎を難破し念佛往生の一門を立たり、佛說法滅盡經に云く五濁惡世魔道興盛魔作沙門我道壞亂惡人轉多如海中沙善人甚少若一人若二人云云、即ち法然房是也と山門の狀に書れたり、我淨土宗の專修の一行をは五種正行と定め、權實顯密の諸大乘をば五種雜行と簡てゝ淨土門の正行をば善導の如く決定往生を勸たり、觀經等の淨土三部經の外、一代顯密の諸大乘經大般若經を始めと爲て終り法常住經に至るまで、貞元錄に所載六百三十七部二千八百八十三卷は皆是千中無一の徒物也永く得道有るべからず、難行聖道門をば門を閉じ之を抛ち之を閣き之を捨て淨土門に入るべしと勸めたり。一天の貴賤首を傾け四海の道俗掌を合せ或は勢至の化身と號し或は善道の再誕なりと仰ぎ、一天四海になびかぬ木草なし……嗚呼世法を云へば違敕の者と成り帝王の敕勘を蒙り、今に御赦免の天氣無之、心ある臣下萬人誰人か念佛門に於て恭敬禮拜を致すべきや、庶幾くは末代今の淨土宗、佛在世の祖師舍利弗阿難等の如く淨土宗を抛て法華經を持ち菩提の素懷を遂ぐべき者歟。

又題目彌陀稱號勝劣事には、念佛と法華經とは只一也、南無阿彌陀佛と唱ゆれば、法華經を一部よむにて侍るなんど申あへり、是は一代の諸經の中に一句一字もなき事也、設ひ大師先德の釋の中より出たりとも、且く觀心の釋歟、是はあて事歟なんど心得べし……佛敎をもて佛敎を失ふこそ失ふ人も失とも思はず、只善を修すると打思て、又そばの人も善と打思てある程に、思はざる外に惡道に墮る事の出來候より云々と謂へり、此の他下山消息等に此の類の文字多し、言々句々悉く正宗の如き凄味あり、鋭利容易に當るべくもあらず

次に禪天魔に關しては、禪宗問荅秒に下の如く論ぜり、元來禪の觀心と日蓮の所謂觀心の大法とは、如何なる相違あるやは別問題として、其不立文字を排する意氣大に觀るべし、曰く禪宗云く涅槃の時世尊座に登り枯華して衆に示す迦葉破顏微笑す、佛の言く吾有正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙法門不立文字敎外別傳付囑摩訶迦葉而已、問て云く何なる經文ぞや、禪宗答て云く大梵天王問佛決疑經の文字なり、問て云く件の經何の三藏の譯ぞや、貞元開元錄の中に曾て此經無し如何、禪宗答て云く此經は祕經なり、此文は上古の錄に不載中項より載之、此事禪宗の根源なり尤も古錄に載す

べし知んぬ僞文なり……禪宗云く是心即身是佛と……愚癡無慧の心を以て即心即佛と立つ豈に未得謂得未證謂證の人に非ずや……禪宗は理性の佛を尊て己れ佛に均しと思ひ增上慢に墮つ、定て是阿鼻の罪人なり、故に法華經に云く增上慢比丘將墜於大坑、禪曰く毘盧の身上なり是理性の毘盧なり、此身土に於ては狗野干の類も之を蹋む、禪宗の規模に非ず、若し實の頂を蹋んか梵天も其頂を見ずと云へり、薄地爭でか之を蹋むべきや、夫佛は一切衆生に於て主師親の德を有す、若し恩德廣き慈父を蹋んは不孝逆罪の大愚人大惡人なり……禪宗云く敎外別傳不立文字……佛敎には經論にはなれたるをば外道と云ふ、涅槃經に云く若有不順佛所說者當者知是人是魔眷屬云云、弘決の九に云く法華已前猶是外道の弟子なり云云、禪宗云く佛祖不傳云云、答て云く然者何ぞ西天の二十八祖在土の六祖を立るや、付囑摩訶迦葉の立義已に破るゝか、自語相違は如何、禪宗云く向上の一路は先聖不傳云云、答ふ爾らば今の禪宗も向上に於て解了すべからず、若し解せずんば禪に非るか、凡向上を歌て憍慢に住し未だ妄心を治せずして見性に奢り、機と法と相乖くこと此責尤も親し、旁化儀を妨ぐ其失轉多し、謂く敎外と號し剩へ敎外を學び文筆を嗜みながら文字を立せず、言と心と相應せず、豈に天魔外の弟子に非ずや、佛は文字に依て衆を度し給ふなり、問ふ其證據如何、答て云く涅槃經十五に云く願諸衆生是受持出世文字、像法決疑經に云く依文字故度衆生得菩提云云、若し文字を離れば何を以てか佛事とせん、禪宗は言語を以て人に示ざらんや、若し示さずとはいはゞ南天竺の達磨は四卷の楞伽經に依て五卷の疏を作り慧可に傳る時、我漢地を見るに但此經のみあて人を度すべし、汝此に依て世を度すべしと云云、若し爾れば猥りに敎外別傳と號せんや……當世の禪者皆是れ大邪見の輩なり、就中三惑未斷の凡夫の語錄を用ひて四智圓明の如來の言經を輕ずる、返々も過てる者なり、疾の前に藥なし機の前に敎なし、等覺の菩薩尙敎を用ひき、底下の愚人何ぞ經を信ぜざる云々、是を以て漢土に禪宗興りしかば其國忽に亡びき、本朝の滅すべき瑞相に闇證の禪師充滿す……汝が立義一一大僻見なり、執情を改て法華に歸伏すべし、然らずんば豈に無道心に非ずや。

禪は不立文字に於て日蓮の打破を蒙りしも、其釋迦一佛を敎主とするは相同じ、然るに眞言淨土は、眞實の敎主釋尊以外に大日彌陀を立つ、此れ日蓮の尤も憤慨する所にして、眞言見聞には左の如く謂へり、

問ふ眞言亡國とは何なる經論に出るや、答ふ法華誹謗正法向背の故なり……顯密の事、無量義經十功德品に云く(第四功德の下)深入佛秘密之法所可演說無遠無失、抑大日の三部を密敎と云ひ法華經を顯敎と云事金言の所出を知らず、所詮眞言を密と云は是の密は隱密の密か、微密の密か、物を秘するに二種あり一には金銀等を藏に籠るは微密なり、二には疵片輪等を隱すは隱密なり、然れば則ち眞言を密と云は隱密なり、其故は始成と說く故に長壽を隱し二乘を隔る故に記に無し、此二は敎法の心髓文義の綱骨なり、微密の密は法華なり、然れば卽ち文に云く四卷法師品に云く藥王此經是諸佛秘要之藏云々、五卷安樂行品に云く文殊師利此法華經諸佛如來秘密之藏於諸經中最在其上云々壽量品に云く如來秘密神通之力云々、如來神通品に云く如來一切秘要之藏云々、如之眞言の高祖龍樹菩薩法華經名秘密二乘作佛有故と釋せり、次に二乘作佛無きを秘密とせずば眞言は卽ち秘密の法に非ず、所以は如何、大日經に云く佛說不思議眞言相道法不共一切聲聞練覺亦非世尊普爲一切衆生云々、二乘を隔つる事前四味の諸敎に同じ、隨て唐決には方等部の攝と判ず經文には四敎含藏と見えたり。

又更に進んで同書には、眞言七重難を說けり、曰く、眞言七重難、一眞言は法華經より外に大日如來の所說なり云々、若爾れば大日の出世成道法利生は釋尊より前か後か如何、對機說法の佛は八相作佛す、父母は誰ぞ名字は如何、娑婆世界の佛と云はゞ世に二佛無く國に二主無きは聖敎の通判なり、涅槃の三十五の卷を見るべし、若他土の佛なりと云はゞ何ぞ我主師親の釋尊を蔑にして他方疎緣の佛を崇むるや、不忠なり不孝なり逆路伽耶陀なり、若一體と云はゞ何ぞ別佛と云ふや、若別佛ならば何ぞ我重恩の佛を捨るや、唐堯は老衰へたる母を敬ひ虞舜は頑なる父を崇む(是一)、六波羅密經に云く所謂過去無量恒河沙佛世尊所說正法我今亦當作如是說所謂八萬四千諸妙法蘊而令阿難陀等諸大弟子一聞於耳皆悉憶持云々、此中の陀羅尼藏を弘法我眞言と云へり、若し爾れば此陀羅尼藏は釋尊の說に非るか、此說に違す(是二)凡そ法華經は無量千萬億の已說今說に最第一なり、諸佛の所說菩薩の所說聲聞の所說に此經第一なり、諸佛の中に大日漏るべきや、法華經は正直無上道の說大日等の諸佛長舌を梵天に付て眞實と示し給ふ(是三)威儀形色經に身相黃金色にして常に滿月輪に遊び定慧智拳の印法華經を證誠すと、又五佛章の佛も法華經第一と見えたり(是四)、要を以て之を言はゞ如來の一切所有之法乃至皆於此經宣示顯云々、此等の經文は釋迦所說の諸經の中

に第一なるのみに非らず三世の諸佛の所說の中に第一なり、此外一佛二佛の所說の經の中に法華經に勝たる經有と云はゞ用ゆべからず、法華經は三世不壞の經なる故なり(是五)、又大日經等の諸經の中に法華經に勝るゝ經文之れ無し(是六)、釋尊御入滅より已後天竺の論師二十四人の付法藏、其外大權の垂迹震旦の人師南三北七の十師三論法相の先師の中に、天台宗より外に十界互具千如一念三千と談ずる人之れ無し、若し一念三千を立てざれば性惡の義之れ無し、性惡の義無くんば、佛菩薩の普現色眞言兩界の曼荼羅五百七百の諸尊は本無今有の外道の法に同せんか、若し十界互具百界千如を立てば本經何れの經にか十界皆成の旨之を說けるや、天台圓宗見聞の後邪智莊嚴の爲に盜み取れる法門なり、才藝を誦し浮言を吐には依るべからず正き經文金言を尋ぬべきなり(是七)涅槃經の三十五に云く我於處々經中說言一人出世多人利益、一國土中二轉輪王一世界中二佛出世無有是處、大論九に云く十方恒河沙三千大千世界名爲一佛、世界是中便無餘佛實一釋迦牟尼佛、記の一に云く世無二佛國無二主一佛境界無二尊號、持地論に云く世無二佛國無二主一佛境界無二尊號。

又本尊問答鈔には眞言宗の加持祈禱に就て、左の如く謂へり、所詮現證を引き申べし、抑人王八十二代隱岐の法王と申す王有しき、去ぬる承久三年(太歲辛巳)五月十五日伊賀太郎判官光季を打捕ます、鎌倉の義時をうち給はむとての門出なり、やがて五畿七道の兵を召して相州謙倉の權太夫義時を打給はんとし給ところに、還て義時にまけ給ぬ、結句我身は隱岐の國にながされ、太子二人は佐渡の國阿波の國にながされ給ふ、公卿七人は忽に頸をはねられにき、これはいかにとしてまけ給けるぞ。國王の身として民の如くなる義時を打給はんは鷹の雉をとり猫の鼠を食にてこそあるべけれ、これは猫の鼠にくはれ鷹の雉にとられたるやうなり、しかのみならず調伏の力を盡せり、所謂天台の座主慈圓僧正、眞言の長者、仁和寺の御室、園城寺の長老總て七大寺十五大寺、智慧戒行は日月の如く秘法は弘法慈覺等の三大師の中の深密の大法十五壇の秘法なり、五月十九日より六月の十四日にいたるまで汗をながし頭腦をくだきて行ひき、最後には御室紫宸殿にして日本國にわたりていまだ三度までも行はぬ大法、六月八日始めて之を行ふ程に、同き十五日に關東の兵軍宇治勢多をおしわたして洛陽に打入て三院を生取り奉て、九重に火を放ちて一時に燒失す、三院をば三國へ流罪し奉ぬ、又公卿七人は忽に頸をきる……すべて此祈をたのみし人幾千萬といふ

事をしらず死にき、たまたま生たるかひなし……いかにとしてまけ給ひけるぞ、たとひかつ事こそなくとも即時にまけおはりてかゝる恥にあひたりける事、いかなるゆへといふ事を餘人いまだしらず、國王として民を討ん事鷹の鳥をとらんがごとし、たとひまけ給ふとも一年二年十年二十年もさゝうべきぞかし、五月十五日におこりて六月十四日にまけ給ひぬ、わづかに三十餘日なり、權太夫殿は此事を兼てしらねば祈禱もなしかまへもなし、然るに日蓮小智を以て勘たるに其故あり、所謂彼眞言の法の故なり、僻事は一人なれども萬國のわづらひなり、一人として行はずとも一國二國やぶれぬべし、況や三百餘人をや、國主とゝもに法華經の大怨敵となりぬ、いかでかほろびざらん、かゝる大惡法年をへてやうやく關東におり下りて諸堂の別當供僧となり連々と行へり、本より邊域の武士なれば教法の邪正をば知らず、たゞ三寶をあがむべき事とばかり思ふゆへに、自然としてこれを用きたりてやうやく年數を經る程に、今他國のせめをかうふりて此國すでにほろびなんとす……人王八十一代安德天皇に大政入道の一門與力して兵衞佐頼朝を調伏せんがために、叡山を氏寺と定め山王を氏神とたのみしかども安德は西海に沈み、明雲は義仲に殺る、一門皆一時にほろび畢ぬ、第二度なり今度は第三度にあたるなり、日蓮がいさめを御用なくて眞言の惡法を以て大蒙古を調伏せられば、日本國還て調伏せられなむ、還著於本人と說けりと申なり、然らば則ち罰を以て利生を思に法華經にすぎたる佛になる大道はなかるべき也。

加持祈禱を邪法迷信として、極力破斥するは頗る痛快を極む、元寇の亂には祈禱に要せし經費は、軍事費に超へたりとは、曾て吾人の擧證論述せし所なるが、本來成佛道たるべき加持祈禱を、眞俗不二の理より世間的に濫用し、以て非行を恣にせしは、確かに眞言宗の缺點にして、日蓮聖人猛然蹴起して之れに肉薄せしは、其成否の如何に關せず、不知不識の間に一大結果を產出せしや爭ふべからざる所なりとす。

次に律國賦に就ては、下山御消息文左の言あり、曰く

而るに諸宗所依の華嚴大日阿みだ經等は其流布の時を論ずれば正法一千年の內後の五百年乃至像法の始の謗論の經々なり、而に八師等經々の淺深勝劣等に迷惑するのみならず、佛の讓狀をもわすれ、時機をも勘へず猥に宗々を構へ像末の行となせり、例ば白田に種を下して玄冬に穀をもとめ、下弦に滿月を期し夜中に日輪を尋る如し、何に況んや律宗なむど申す宗は一向小乘なり、月氏には正法一千年の前の五百年

の小法、又日本國にては像法の中項法華經天台宗の流布すべき前に且く機を調養せんがためなり、例せば日出んとて明星前に立ち雨下らんとして雲先におこるが如し、日出雨下に後の星雲はなにかせん、而るに今は時過ぬ、又末法に入て之を修行せば重病に輕藥を授け大石を小船に載るが如し、修行せば身は苦しく暇は入て驗なく、華のみ開きて果なからん、故に敎大師像法の末に出現して法華經の迹門の戒定慧の三が內其中圓頓の戒壇を叡山に建立し給し時、二百五十戒忽に捨て畢ぬ、隨て又鑑眞の末の南部七大寺の一十四人三十餘人も加判して大乘の人となり、一國擧て小律義を捨て畢ぬ、其授戒の書を見るべし分明なり、而るを今邪智の持齋の法師等昔し捨し小乘經を取立てゝ一戒もたもたぬ名計なる二百五十戒の法師原有て、公家武家を誑惑して國師とのゝしる、剩へ我慢を發して大乘戒の人を破戒無戒とあなずる、例ば狗犬が師子を吠へ猿猴が帝釋をあなづるが如し、今の律宗の法師原は世間の人々には持戒實語の樣には見ゆれども、其實を論せば天下第一の大不實の者なり、其故は彼等が本文とする四分律十誦律等の文に大小乘の中には一向小乘小乘の中にも最下の小律なり、在世には十二年の後方等大乘へうつる程の且くのやすめ言、滅後には正法の前の五百年は一向小乘の寺なり、此亦一向大乘の寺の毀謗となさんがためなり、されば日本國には像法半に鑑眞和尙大乘の手習とし給ふ、敎大師は宗を破し給て人をば天台宗へとりこし、宗をば失べしといへども、後に事の由を知しめんがために我が大乘の弟子を遣してたすけをき給ふ、而るに今の學者等は此由を知ずして六宗は本より破れずして有とおもへり、無墓無墓、又一類の者等天台の才學を以て見れば我律宗は幼弱なる故に漸々に梵網經へうつりし結句は法華經の大戒を我が小律に盜入れて還て圓頓の行者を破戒無戒と咲へば國主は當時の形貌の貴げなる氣色にたぼらかされ給て、天台宗の寺に寄せたる田畠を奪取て彼等にあたへ、萬民は又一向大乘の寺の歸依を抛て彼寺にうつる、手づから火をつけざれども日本一國の大乘の寺を燒失ひ、拔目鳥にあらざれども一切衆生の眼を拔きぬ、佛の記し給ふ阿羅漢に似たる闡提とは是なり、涅槃經に云く我涅槃後無量百歲四道聖人悉復涅槃、正法後於像法中當有比丘似像持律少讀誦經貪嗜飮食長養其身乃至雖服袈裟猶如獵師細視徐行如猫同鼠、外現賢善內懷貪嫉如受啞法裟羅門等實非沙門現沙門像邪見熾盛誹謗正法等云々：文に少讀誦經云々相州鎌倉極樂寺の良觀房にあらずば誰をさし出して經文をた

すけ奉るべき、次下の文に猶如獵師細視徐行如猫伺鼠外現賢善內懷貪嫉等云々兩火房にあらずば誰をか三衣一鉢の獵師伺猫として佛說を信ずべき、哀哉當時の俗男俗女比丘尼等檀那等が山の鹿家の鼠となりて、獵師猫に似たる兩火房に何れたぼらかされて、今生には守護國土の天照大神正八幡等に捨られ、他國の兵軍に破られて猫の鼠を捺取が如く獵師の鹿を射死が如し、俗男武士等は射伏切伏られ俗女は捺取られて他國へ赴ん、王昭君楊貴妃が如くになりて、後生には無間大城に一人もなく趣くべし。

斯く諸宗に對して悉く大負傷を與へ、而して後ち持妙華問答鈔には、左の如く云へり。

法華獨りいみじと申が心せばく候はゞ釋尊程心せばき人は世に候はじ

第五節　現代評說

日蓮聖人の四箇格言、其他の折伏主義並に二千餘年來未見の眞義を聖人獨り發見せりと爲せるが如き態度に對し、近時宗敎界に各種の批評あり、今其主要なる一二を掲げて以て參酌に供せん

宗敎原論に曰く、禪家に於て本來の面目と云ふものと日蓮宗に於て無始本有久遠實成の古佛と云ひ、或は十界の大曼荼羅と稱するものと、其差異果して如何、結局同一物に指せるに非らずや

又曰く、禪の涅槃妙心と日蓮宗の即身成佛とは何等區別なく、又裟婆即寂光と本地の風光と何等の差異あるべきや

又曰く日蓮淨土兩宗は、普及の方便として、念佛唱題等の簡便法を講じ、愚人鈍根の者を誘引する宗敎營業上に於ては、慥かに禪家華天等よりも巧みなり、然れども其の修養としては却つて大なる弊害ありとせざるべからず

道德と宗敎論に曰く、涅槃經に曰く、戒は是れ一切善法の梯磴なり、亦是れ一切善法の根本なり、地の悉く是れ一切樹木の所生の本なるが如し、又遺敎經に曰く、戒は之れ正順解脫の本なり、故に解脫戒本と名く、此の戒に依るときは、諸の禪定及び苦を滅するの智慧を得、是の故に比丘よ當に淨戒を持ちて缺くこと勿れ、若人能く淨戒を持ては則ち、善法を得、若淨戒なくんば、諸善功德皆生することを得ず、是故に當に知るべし、戒は第一安穩功德の在る所となることを、又佛入滅の時阿難に告げて曰く、汝我滅後

に於て師なしと憂ふる勿れ、當に婆羅提木叉(戒)を尊奉すべし、是則ち汝等が大師なりと、此等に所謂戒は大乘的のものに非らず、況して日蓮宗に所謂本門の戒に非らざるや明らかなり、大乘佛教徒が頻りに小乘及其戒法を誹卑し、心法戒體又は圓頓戒等稱して、自ら恣なるは、釋尊の本意に背ける佛教の罪人と謂ふべく、又惡人正機等稱するは悉く之れ誘引攝收の方便に過ぎず、若し此等を眞實なりと爲し、又彼等大乘教の本義なりとせば、佛教なるものは畢竟するに不道德反倫理者を庇護する一器具に過ぎずして、人道上甚しき毒害物たらざるなきを得んや

佛教統一論原理篇に曰く、上人の言行に於て他と異なれるものを求むれば、法華經に忠實なりてう一點にあり……日蓮宗は天台に依り、亦密教に依て成ると雖も之を天台眞宗等に比較すれば、その間多少出藍の色あるべきは、蓋し辯を竢たざるなり……凡そ宗教を宣布せんとするには、先づその普及法を講せざるべからず、普及法としては須らく簡易なる方法に依らざるべからず事實的ならざるべからずと云ふは、蓋し一定の法規ならん、是れ哲學と宗教と相似て、而も大にその趣致を異にする所以なり、果して然らば日蓮上人の唱題成佛論は、宗教的思想發展の法規として之を考ふれば、優に前來の諸宗派の上に位すと謂ふも敢て不可なかるべし、眞に聖道門自力教として、宗教的思想發達の幾んど極致に到達せんとするものは日蓮宗なりと謂ふべし。

然れども佛教の眞理觀が、活動的方面に向ひて漸く開展し來ると共に、亦理想的性質のものが人格的性質のものとして說明せらるるてふ方針の一定して動かざるものあり、而して此は社會人心の需要として變ずべからざるものとすれば、日蓮宗の教義は更に一變して淨土教となるべき性質のものなりと云はざるを得ず。

同論佛陀篇に曰く、天台宗は本門の佛に對して有始の見を懷けりといへるは蓋し誣言なり、天台宗と雖も決て本地佛に對して有始の見を懷ける者にあらざるなり、是を以て吾人は殆んど日蓮宗の天台宗に異なれるの點を見出すこと能はざるなり、十界曼荼羅圖の本尊は未だ天台宗に之なきところなりといへるも、既にその意味の天台宗に包含せるや、恐くは少しく天台宗を研究せる者にして之を認容せざる者あるべからざるなり。

次に密教に就きて之を觀るに、その所談亦日蓮宗のそれと大に相類似せるものあ

り、日蓮上人は本有無始の「妙法蓮華經」を以て本尊となせりといふも、密敎にありては既に大日如來を以て無始本有の者となせるにあらずや。「大日經」に或は我覺本不生と說き、或は阿字本不生といへるものは即ち無始本有の意にあらずして何ぞや。蓋し密敎家の一行師、嘗て「大日經」は「妙法蓮華經」の最深秘處を說くものにして、敎主大日如來は卽ち「法華經」壽量品の釋迦是れなりといへるは、日蓮上人の所謂本門の本尊と大日如來とを以て、異名同體の者と見るにありといふべし。單に是れ密敎家に於ける見解といふべきのみならず日蓮宗にありて之を觀るも、亦是認せざるべからざる所以ありて存す。卽ち日蓮上人の曼荼羅圖に就きて之を考察すべし。もとこの曼荼羅圖は密敎思想よりして發展し來れりといふも固より過言にあらざる也。而してその曼荼羅圖は無始本有の佛を表するに、南無妙法蓮華經の七字を以てし、之を中央の本尊となし、先づその周圍に釋迦、多寶等の諸佛を記し、次に上行、無邊行等の菩薩を記し、それより日天、月天、梵天、帝釋天等の如き印度婆羅門敎の信奉せる諸天神の類を記せり、是等はすべて中央の本尊妙法よりして現出し來れる垂迹なることを示し、又是等垂迹の者としてその本地の妙法を仰ぐや、恰も百官群臣の君主に見ゆるが如きものあり、又萬衆の雲閣月卿を望むが如きものありとなせるは、金剛界曼荼羅圖の精神に出でたるものにあらざれば、胎藏界曼荼羅圖の主意を捉へ來れるものなるや、一見して明白なりといふべし。一は阿字本不生の大日如來を以て本尊となし、自性會と加持會との四曼不離を示さんとし、一は無始本有の釋迦如來を以て本尊となし、本門と迹門との三千圓融の理を顯揚せんとす。是故に日蓮宗と密敎とはその言異なれりと雖も、意同じといはざるべからざるものあり。

日蓮宗を淨土敎の彌陀本尊說に比較すれば如何、淨土敎に所謂十劫の彌陀に就きて之を比較すれば、固より天壤の差異ありと雖も、久遠の彌陀に就きて之を比較すれば、彼此大に酷似せるものありといはざるべからず、啻に相酷似せるのみならず、彼此全く合一のものなりといふべき所以あり、先に述べる如く、法華本門の佛は「法華經壽量品」に之を說きて慧光照壽命無數劫といへるにあらずや、而して淨土敎の阿彌陀如來は「阿彌陀經」の中に之を說きて光明無量の故に阿彌陀と名づく、又壽命無量の故に阿彌陀と名づくと說けるにあらずや。然らば彼此の所說を合すれば彌陀、釋迦一體なること明かなりといふべし。之に依りて、古來より貝眼の諸先德は異口同音に、彌陀釋迦

同體說を主張せり、謂ふこと勿れ、獨り法華本門の釋迦は無始本有の者なりと、淨土敎の彌陀も亦久遠の彌陀を說きて無始本有の者となせること、敢て日蓮宗と何等の差毫だもあることなきなり、既に「口傳鈔」の中には、報と云ふ名言は久遠實成の彌陀に屬して常住法身の體たるべしと云、又「顯名鈔」(存覺作)の中には、しかれば阿彌陀如來は久遠實成の覺體無始本有の極理なりと明言するに至れり、然れば一は釋迦の名を保存し、一は彌陀の名を應用するを以て、一見彌陀、釋迦は別佛なるが如しと雖も、深く之を尋ね來れば全く同佛の別名たるを知悉するに至るべし。

論じ來れば、日蓮上人一家獨創の見解として、發揮せる本門の本尊は密敎に於ける大日如來及び淨土敎に於ける阿彌陀如來と、彼此その間に何等の差異なきに至れり、卽ち差異は名に存して實に存せずといはざるを得ざるに至れり。是れに於て吾人は孰れを優れりとなし、又孰れを劣れりとなすべきやの疑問に對し、唯その名目に就きて之を答へざるを得ず、今試みにその名目に就きて優劣長短を論せんか、若し日蓮宗の如く迹門も本門も共に釋迦如來と稱すれば歷史上の釋尊と歷史以上の釋尊とを辯別すること能はざるにあらずや凡そ名目は事物を辯別せんが爲なり、特に肉眼を以て認容すべからざる微妙の者を說くに當りては、必ずや名目を以て分たざるべからず、此に由りて之を觀すれば歷史上の釋迦卽ち人目を以て見るべき肉身の釋尊と峻別して、歷史以上の釋迦卽ち人目を以て見るべからざる精神的大覺の釋尊を說かんには、寧ろ特殊の稱號を設けて或は大日如來と稱し、彌陀如來と稱する方、大に優れるものありといはざるべからず。

此の如く名目の辯別に就きて之を考ふれば、吾人は密敎に在て大日如來と稱し、淨土敎にありて阿彌如來といへるを優に勝れりとなすも、更に飜りて之を思ふに、佛陀論の根柢を忘却せざるの點に至りては、日蓮宗が釋迦如來の名目を保存して動かざるところ、又大に稱揚するに足るべきものありといはざるべからず、凡そ名目は辯別を意味すといふ考よりして、思想の發展と共にその名目を改むれば終にその根柢を忘却するに至るの弊風あるを免れざるなり、是れ吾人が敢て密敎及淨土敎に傾かざる所以にして、而も又日蓮宗が長く釋迦如來の名を存續せるところに大に同感を寄する者なり。

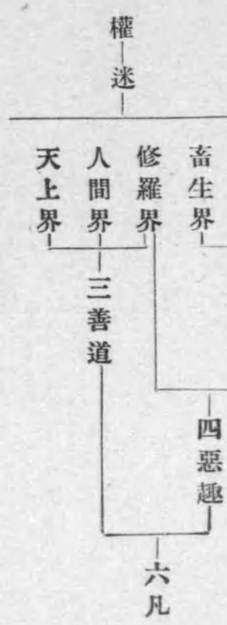
密敎原論に曰く、日蓮宗は最後に成立せし丈(尤も時宗は日蓮宗より後なり)頗る秩

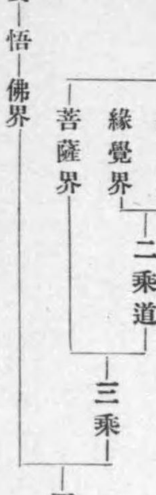
然たるものあり、併しその教義の内容より謂へば、固より天台以上に何ものもあるにはあらず、殊に又日蓮上人は智證大師や安然等を頻りに駁擊し、且つ眞言を譏れるも、思想の系統よりいへば、日蓮上人は智者大師や傳教大師よりも智證大師や安然の方に近く、その迹門法華卽ち天台を攻擊して不了義となす點は、全たく華嚴や眞言に於て、天台に加へたる論を其まゝに襲用して理同事長等謂へり、要するに本門法華卽ち日蓮上人の法華經を解するには、全たく眞言密教の意を以て解し居れり、日蓮上人の思想はその九分まで密教的なり、尤も法華經にはそれ自身に、密教的解釋を施され得る餘地あるは固よりなるも、密教が既に日蓮上人以前に存在し成立し居りし以上は日蓮上人の思想は天台よりも密教の方に近く、密教の意を以て、法華經を解釋せりといふも不可なきのみならず、殊に日蓮上人は元來眞言宗の清澄寺に於て出家せしものにして、眞言の思想は全く先入主となり居りしなり。

第五章　宇宙篇

第一節　十界互具

十界とは地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、聲聞、緣覺、菩薩、佛の善惡十階級にして、實は宇宙の全體を盡せるものなり、由來地獄界は瞋を因て爲して成立し、餓鬼界は貪を因と爲し、畜生界は愚痴を因と爲し、修羅界は嫉妬を因と爲し、五戒に由つて人間界あり、十善を因として天上界を生ず、以上を六凡と云ふ、聲聞界は四諦を因と爲し、緣覺界は十二因緣を因とす菩薩界は六波羅密を因と爲す、佛界は大菩提なり、以上の四界を四聖と稱す、又地獄餓鬼畜生を三惡道と云ひ、之れに修羅を加へて四惡趣と云ふ今日蓮宗に於ける十界の分配を見るに左の如し。





實—悟—佛界

以上の十界は宗教的道德的方面より衆生界を類別せるものにして此の衆生と衆生の所依する器界卽ち山河大地等ありと雖も、要するに所依の器界は能依の所現と見るべきものなれば、宇宙は此の十界に收攝せられ、十界の他に宇宙現象なるものあるべからずと云つべきなり、然り而して此の十界は互具各具とて地獄界にも他の九界あり、佛界にも地獄等を具して、一界每に十界を具足するものと爲せり、換言すれば一物一個人一動物に、宇宙全體を包含し、一物卽一宇宙なり、吾人一人も亦小宇宙なりと云ふ意義なり、例へば吾人の一念の中には、瞋貪痴等の三毒五欲ありて六凡の境界を存するは謂ふまでもなきも、又一方には慈悲仁惠等の四聖と同じき念慮なきに非らず、殊に吾人瞋恚の爲めに苦しむは地獄の現相にして、嫉妬の爲め紛爭するは修羅界の實現なり、又貧人及無智の人に財施法施を行するが如きは、菩薩界にして、獨善工

夫するは二乘道なり、斯の如きは如何なる大惡人に、大善人にも具有する所なるのみならず、愚痴の畜生にも猶菩提心あり、佛は修養の功に依りて善の方面に活動し、凡夫乃至畜生等は不覺の結果主として惡の方面に執着するも、其本質に於ては本覺の佛性を內存して、佛乃至地獄と彼此差異軒輊あることなし、彼の禪宗にて本來の面目とか、我は本來の佛なりと云へるは、此の本覺の方面より見たる語にして、淨土門にて極惡の凡夫なり穢土なり等稱するは、隨緣迷妄の現象上より立言せるものにして、孰れも其半面を示せるに過ぎざるなり。

法華用心鈔に曰く、十界とは所謂一には地獄二には餓鬼三には畜生四には修羅五には人六には天七には聲聞八には緣覺九には菩薩十には佛界也、此十界は衆生の一念の心より出生す、是を隨緣眞如と云ふ、亦變造の十界なり、本より心性本有の十界にして常住不變なるを不變眞如と云ふなり、此眞如は心と性と相卽して有り、不思議の心性隨緣眞如緣に從つて變造して十界を作り出すと云ふは、我等が邪見の心は地獄を感じ慳貪の心は餓鬼を感じ愚癡の心は畜生を感じ怨念の心は修羅を感じ五戒の心は人を感じ十善の心は天を感じ四諦の心は聲聞を感じ十二因緣の心は緣覺を感

じ六度の心は菩薩を感じ善惡不二の心は佛を感ず、是の如く一つの緣に隨つて其性を引き其報を受くるなり、是一心の中に十界あることを知らず、然るに今此諸法の十界は但一心の內の差別にして而も無差別不思議なり。

觀心本尊鈔に曰く、法華經第一方便品に云く欲令衆生開佛知見等云々是は九界所具の佛界なり壽量品に云く如是我成佛已來甚大久遠壽命無量阿僧祇劫常住不滅、諸善男子我本行菩薩道所成壽命猶未盡復倍上數等云々此經文は佛界所具の九界なり經に曰く提婆達多乃至天王如來等云々地獄界所見の佛界なり、經に云く一名藍婆乃至汝等但能護持法華名者福不可量等云々此餓鬼界所具の十界なり、經に云く龍女乃至等正覺云々此畜生界所具の十界なり、經に曰く波稚阿修羅王乃至聞一偈一句得阿耨多羅三藐三菩提云云修羅界所具の十界也、經に曰く若人爲佛故乃至皆已成佛道等云云此人界所具の十界なり、經に云く大梵天王乃至我等亦如是必當得作佛等云云此天界所具の十界なり、經に云く舍利弗乃至華光如來等云云此聲聞界所具の十界なり經に云く其求緣覺者比丘比丘尼乃至合掌以敬心欲聞具足道等云云と此即ち緣覺界所具の十界なり、經に云く地湧千界乃至眞淨大法等云云此即ち菩薩界所具の十界なり、經に云く或說已身或說他身等云云即ち佛界所具の十界なり、問ふて云く自他面の六根共に之を見る、彼此の十界に於いては未だ之を見ず如何か之を信せん……答ふ數他面を見るに或時は喜び或時は瞋り或時は平に或時は貪現じ或時は癡現じ或時は諂曲なり、瞋は地獄貪は餓鬼癡は畜生諂曲は修羅喜は天平かなるは人なり、他面の色法の於いては六道共に之れ有り、四聖は冥伏して現れず委細に之を尋ねば之れ有るべし……世間の無常眼前にあり豈に人界に二乘界無らんや、無願の惡人も猶妻子を慈愛す菩薩界の一分なり、但佛界計り現じ難し九界を具するを以つて强て之を信じ疑惑せしむること勿れ、法華經の文に人界を說いて云く欲命衆生開佛知見、涅槃經に云く學大乘者雖有肉眼名爲佛等云云、末代の凡夫出生して法華經を信ずるは人界に佛界を具足する故なり……十界互具之を立るは石中の火、木中の花信じ難けれども緣に値て出生す、生すれば之を信ず、人界所具の佛界は水中の火火中の水、甚だ信じ難し、然りと雖も龍火は水より出で龍水は火より生ず、心得られざれども現證あれば之を用ゆ、既に人界の人界之を信ず佛界何ぞ之を用ひざらん、堯舜等の聖人の如きは萬民に於いて偏頗無し人界の佛界の一分なり、不輕菩薩は所見の人に於いて佛身を

見る、悉達太子は人界より佛身を成す、此等の現證を以つて之を信ずべき也……經文分明に十界互具之を說く所謂欲命衆生開佛知見等と云云、天台此經文を承て云く若し衆生に佛の知見無んば何ぞ開を論ずる所あらん當に知るべし佛の知見衆生に蘊在することを云云、章安大師云く衆生に若し佛の知見無くんば何ぞ開悟する所あらん、若し貧女に藏無んば何ぞ示す所あらん等云云。

第二節　十如是

法華經第二品方便品に曰く、佛の成就せし所は第一希有難解の法なり、唯だ佛と佛と乃ち能く諸法の實相を究盡せり、所謂諸法の如是相、如是性、如是體、如是力、如是作、如是因、如是緣、如是果、如是報、如是本來究竟等なりとあり、之を十如是と云ふ、今其大意を表示すれば左の如し

如是相　外部より見て分別し得べきもの、卽ち形相
如是性　自己に備はりて動かぬ先天性分
如是體　前の相性を具する法體、卽ち主質
如是力　體性より出づる力用、卽ち功用能力
如是作　力に依つて造る所の作業
如是因　十界の果を生ずる親因、惡心が惡業を起す類
如是緣　習因を助けて果報を感せしむる助緣
如是果　因緣より獲得せる結果
如是報　前の果の事實に現はれたる報酬
如是本來究竟等　本とは初めの相、末とは終の報にして、此の本末が究竟して背反せざる一定不動終始一貫の理法と云ふ。

諸法實相鈔に曰く問云法華經第一方便品云諸法實相乃至本末究竟等云云、此經文の意如何、答云下地獄より上佛界までの十界の依正の當體、悉一法ものこさず妙法蓮華經の姿なりと云ふ經文也。

釋云依報正報常宣妙經等云云、又云實相必諸法、諸法必十如、十如必十界、十界必身土云云、又云阿鼻依正全處極聖自心毘盧身土不逾凡下一念云云、此等の釋義分明也誰か疑網を生せんや、されば法界の姿妙法蓮華經の五字にかはる事なし……實相と云ふは妙法蓮華經の異名也、諸法妙法蓮華經と云ふ事なり、地獄は地獄の姿を見せたるが

實の相也、餓鬼と變せば地獄の實の姿には非ず、佛は佛の姿、凡夫は凡夫の姿、萬法の當體の姿が妙法蓮華經の當體也と云ふ事を諸法實相とは申す也。

撰時鈔に曰く、經に云ふ所謂諸法如是相と申は何事ぞ、十如是の始めの相如是が第一の大事にて候へば佛は世にいでさせ給ふ、智人は起りを知る、蛇はみづから蛇をしるとはこれなり。

十如是事に曰く、我身が三身卽一の本覺の如來にてありける事を今經に說て云く如是相如是性如是體如是力如是作如是因如是緣如是果如是報如是本末究竟等……初に如是相者我身の色形に顯れたる相を云也、是を應身如來とも又は解脫とも又は假諦とも云也、次に如是性とは我心性と云也、是を報身如來とも又は般若とも又は空諦とも云也、三に如是體とは我此身體也、是を法身如來とも又は中道とも法性とも寂滅とも云也、されば三如是を三身如來とは云也、此三如是が三身如來にておはしましけるをよそに思ひ隔てつるが、はや我身の上にてありけるなり……されば始の三如是の三諦と終の七如是の三諦とは唯一つの三諦にて始と終と我一身の中の理にて唯一物にて不可思議なりければ、本と末とは究竟して等しとは說給へる也、如是本末究竟等とは申したる也……譬ば春夏田を作り植ゆれば、秋冬は藏に收て心のまゝに用るが如し、春より秋をまつ程は久き樣なれども一秀の內に待得が如く、此覺に入て佛を顯す程は久き樣なれども一生の內に顯はして我身が三身卽一の佛となりゐる也、此道に入らぬ人にも上中下の三根はあれども同く一生の內に顯はす也、上根の人は聞所にて覺を極めて顯はす、中根の人は若は一日若一月若は一季に顯はす也、下根の人は延ゆく所なくてつまりぬれば一生の內に限たる事なれば臨終の時に至つて、諸のみえつる夢も覺て悟になりぬるが如く、只今までみつる所の生死妄想の邪思ひがめの理はあと形もなくなりて、本覺の寂の覺にかへりて法界をみれば皆寂光の極樂にて日來賤しと思ひし我此身が、三身卽一の本覺の如來にてあるべき也、秋の稻には早と中と晩との三のいね有れども一季が內に收むるが如く、此も上中下の差別ある人なれども同く一生の內に諸佛如來と一體不二に見合せてあるべき事也。

第三節　一念三千

天台法華に於ける一念三千、三諦三觀論は、佛敎に於ける世界觀宇宙論の終局にして、之れ卽ち一如的實在論なり、止觀に曰く、不言心在前一切法在後、亦不言一切法在前

一心在後、若從一心生一切法者此則是縱、若心一時含一切法者此卽是横、縱亦不可、横亦不可、只心是一切法、一切法是心、故非縱非横、非一非異

又曰く、諸法唯一心、此心卽衆生、此心菩薩佛、生死亦此心、涅槃亦此心、一心而作二、二還無二相、一心如大海、其性常一味、而具種々義、是無究法藏

三世諸佛總勸文に曰く、此心の一法より國土世間も出來る事也、一代聖敎とは此事を說たる也、此を八萬四千の法藏とは云也、是皆悉く一人の身中の法門にて有也云々

蒙古使御書に曰く、所詮萬法は己心に收て一塵もかげず、九山八海も我身に備て、日月衆星も己心にありと

今天台宗の敎義に準じて、一念三千の大要を述べんに、一念とは己心刹那の陰妄なり、三千とは十界各各十界を具して百界となり、百界各各十如を具して千如となる、此の千如は五陰、衆生、國土の三世間に涉りて三千となる、是は法華經題の妙の字を釋するに就て、本迹二重の妙を明す中に、三法妙と云ふことあり、三法とは心、佛、衆生なり、此の三互に理具、事具能造、所造となりて、本來無差別なれども、佛法は甚だ高く、衆生法は太た廣し、共に行者の所觀に便ならざるが故に、近くして且つ要なる現前起滅の一念、卽ち無記の第六意識を取つて、所觀の境と爲し、此の一念に界如三千を具足して缺減なきことを示す、是れを止觀の尅示境體一念三千の觀門と云ふ、是れ止觀陰界入境の中、先に界入の丈を去て五陰の尺を取り、更に前の四陰(色受想行)の尺を去て、識陰の寸に就く所以なり。

要するに三千とは、一切萬有を呼べる名稱にして、萬法若くは諸法と云ふに同じ、然るを萬法等の語を用ゐずして、殊更に煩雜なる十界十如三世間の相乘たる三千を云々するは畢竟するに一切萬有の事理、總別そのものが本來互に融通無礙なることを顯はさんが爲めなりとす、又一念三千と云へるは前の止觀の文に在るが如く、吾人凡夫の心、卽ち法界を全ふし三千を具せり、故に法界、一法として此の心の外に洩るゝものはなく、啻に心のみ此の如くなるのみならず、佛も其體三千なり、衆生も其體三千也、皆法性の緣起にして共に法界を全ふし三千を具して、一法とし此の外に洩るるものはなし、此の故に心を擧るとき、心が能造能具にして、佛と衆生とは皆其所造所具となる、故に如心佛亦然、如佛衆生然、心佛及衆生、是三無差別といへり、此れ法性の緣起して緣慮卽ち事物を分別するの用をなす邊、之を心と名け、法性の緣起して、質碍の用をな

す邊、之を色と名く、心も色もたゞ一種の三千、其體各別なるものにあらず、又法性の迷用を起す、是を衆生とし、因とし、法性の悟用を起す、是を佛とし、果とす是亦た一種の三千、そのもの別なるに非ず、一色一香無非中道と云ひ、三千在理同名無明、三千果成、咸稱常樂、三千無改、無明卽明と云へる如く、因果共にたゝ一種の三千の外なきものとす、此の如く、色心を等分に論し、因果を不二に談する、是を圓敎台宗の意となすなり、總在一念鈔に曰く、此の一念三千を天台釋して云く、夫一心具十法界、一法界又具十法界、百法界、一界具三十種世間、百法界卽具三千種世間、此三千在一念心、若無心而已、介爾有心卽具三千云々、介爾とは妙樂釋して云く謂細念也云々、意はわづかにと云々、仍て意得すべき樣は次第を以つて云時は一心は本、十界は末也、是思議の法門也、不思議を以つて云時は一心の全體十界三千と成る、故に取別べき物にもあらず、表裏も無之、一心卽三千三千卽一心也、譬ば不覺の人は冰の外に水ある樣に是を思ふ、能々心得る人は冰卽水也、故に一念と三千と差別無く一法と心得べし、仍て天台釋して云く只心是一切法一切法是心、故非縱非橫非一非異玄妙深絕、非識所識非言、所以稱爲不可思議境意在於茲云々、故に一念一念に非ず卽ち三千也、三千三千に非ず卽ち一念也、之に依つて事理體一修性不二の法門也、此一念三千の不思議は國土世間に三千を具するが故に、草木瓦石も皆本有の三千を具して圓滿の覺體也、然れば卽ち我等も三千を具するが故に本有の佛體也、仍て無間地獄の衆生も三千を具し妙覺の如來と一體にして差別無き也、是を以つて提婆が三逆の炎忽に天王如來の記を蒙る、地獄すら尙爾也、何況や餘の九界をや、心智都て滅せる二乘すら尙成佛す、何況や餘の八界をや、故に十界の草木等に三千を具す、一法として捨べき物なきが故也、蓮華とは此理を悟る人は必ず佛に等く蓮の臺に處し、蓮華を以つて身を莊嚴し蓮華を以て國土をかざる故に云々、知んや此身卽ち三世諸佛の體なるを。

又曰く、十界は源其體一にして只是一心也、一物にて有ける間、地獄界に餘の九界を具し、乃至佛界に又餘の九界を具す、如是一界互に具して十界卽百界と成なり、此百界の一界に各々十如是(相、性、體、因、緣、果、報、本末究竟等)あるが故に百界は千如是となるなり、此千如是を衆生世間にも具し五陰世間にも具し國土世界にも具せるが故に、千如是は卽ち三千となれり、此三千世間の法門は我等が最初の一念に具足して全く闕減無し、此一念卽色身となる故に此身は全く三千具足の體也、是を一念三千の法門と云、

也、之に依て地獄界とて恐るべきにあらず、佛界とて外に尊ぶべきにあらず、此一身に具して事理圓融せり、全く餘念無く不動寂靜の一念に住せよ、上に云ふところの法門是を觀ずるを實相觀と云也、餘念は動念なり、動念は無明也、無明は迷也、此觀に住すれば此身卽本有の三千と照すを佛とは云也、是を以つて妙樂大師云く當知身土一念三千故成道時稱此本理一身念遍於法界云々。

開目鈔に曰く、一念三千は十界互具よりはじまれり、法相と三論とは八界を立て十界をしらず、況や互具をしるべしや、俱舍成實律等は阿含經によれり、六界を明て四界をしらず、十方唯有一佛一方有佛だにもあかさず、一切有情悉有佛性とこそとかざらめ、一人の佛性猶ゆるさず、而も律宗成實宗等の十方有佛有佛性なんど申は佛滅後の人師の大乘の義を自宗に盜入たるなるべし……華嚴宗と眞言宗とは本は權經權宗なり、善無畏三藏金剛智三藏天台の一念三千の義を盜取て自宗の肝心とし、其上に印と眞言とを加て超過の心ををこす、其子細をしらぬ學者等は天竺より大日經に一念三千の法門ありけりとうちをもう、華嚴宗は潛觀が時、華嚴經の心如工畫師の文に天台一念三千の法門を偸入たり、人これをしらず。

又曰く佛になる道は華嚴の唯心法界、三論の八不、法相の唯識、眞言の五輪觀等も實には叶ふべしともみへず、但天台の一念三千こそ佛になる道とみゆれ、此一念三千も我等一分の慧解もなし、而ども一代經經の中には此の經計り一念三千の玉をいだけり、餘經の理は玉に似たる黃石なり、沙をしぼるに油なく、石女に子のなきがごとし、諸經は智者猶佛にならず此經は愚人も佛因を種べし、不求解脫觸脫自至等と云々。

大小乘分別鈔に曰く、二乘作佛久遠實成は法華經の肝要にして諸經に對すれば奇なりと云へども、法華經の中にてはいまだ奇妙ならず、一念三千と申す法門こそ奇が中の奇、妙が中の妙にて、華嚴大日經等に分絕たるのみならず、八宗の祖師の中にも眞言等の七宗の人師名をだにもしらず、天竺の大論師龍樹菩薩天親菩薩は內には珠を含み、外にはかきあらはし給はざりし法門也。

三大秘鈔に曰く、方便品に云く、諸法實相……等云々、底下の凡夫理性所具の一念三千歟、壽量品に云く、然我實成佛已來無量無邊等云々、大覺世尊久遠實成の當初證得の一念三千也。

當體蓮華鈔に曰く、日蓮が弘通する法門は此の事を直ちにかきあらはせるなり、事

の一念三千とは是なり、我等が胸中にをけば理の一念三千なり、法の二字も又事理の一念三千にして法體法爾のふるまひなり。

義淨房御書に曰く、今經の所詮は十界互具百界千如一念三千と云事こそゆゆしき大事にては候なれ、此法門は摩訶止觀と申す文にしるされて候、次に壽量品の法門は……其故は壽量品の事の一念三千の三大祕法を成就せる事此經文なり。

十章抄に曰く、一念三千の出處は、略開三の十如實相なれども、義分は本門に限る

開目抄に曰く、迹門方便品は一念三千、二乘作佛を說いて爾前二種の失一つを脫れたり、しかりといへどもいまだ發迹顯本せざれば、まことの一念三千もあらわれず、二乘作佛も定まらず、水中の月を見るが如し、根なし草の波上に浮べるに似たり、本門に至りて始成正覺を破れば四敎の果を破る、四敎の果を破れば四敎の因破れぬ、爾前迹門の十界の因果を打ち破りて、本門の十界の因果を說き顯はす、此れ即ち本因本果の法門なり、九界も無始の佛界に具し、佛界も無始の九界に備りて、眞の十界互具、百界千如、一念三千なるべし。

觀心本尊鈔に曰く、夫れ始め寂滅道場、華藏世界より娑羅林に終るまで、五十餘年の間、華藏密嚴三變四見等の三土四土は皆成切の上の無常の土にして變化する所の方便實報、寂光安養、淨瑠璃、密嚴等なり、能變の敎主涅槃に入り給へば所變の諸佛隨つて滅盡す、土も亦以て是の如し、今本地の娑婆世界は三災を離れ、四切を出でたる常住の淨土なり、佛既に過去にも滅せず、未來にも生せず、所化以て同體なり、此れ即ち已心の三千具足三種の世間也、迹門十四品は未だ之れを說かず、法華經の內に於ても、時機未熟の故なるか

以上三大秘鈔以下の諸文は、以て天台と日蓮との一念に對する見解の差異點を知り得べきなり

猶法華にては、法と心との融即を論じ、一色一香無非中道と云ひ、色心依正融即不二と稱するより、其自然の結論として、草木瓦礫の非情物に至るまで、佛性の遍在を認定するに至るものなり、尤も法相宗にても理佛性の遍遍をば認むるも行佛性の遍遍は之を許さず、又華嚴宗にては眞如の萬法に遍遍存在することは承認するも、開覺佛性たる眞如を開覺すべき力用の非情物に存在することは認めず、然るに天台法華に至つては三因佛性を說きて、草木成佛を斷定せり。

三因佛性とは、一に正因佛性、二に了因佛性、三に緣因佛性にして、正因は理性、了因、緣因は智と行とにして修用なり、斯く性と修とあれども、性は常に修を全ふし、修は又性を全ふすべきものなるを以て、三即一、一即三、其體は唯一、所謂理に在つても三千、事に在つても三千、左れば草木と有情と其根源に於て差異あるべきに非らず、萬法即眞如、現象即實在と云へば、有情非情の區別あるべき理なし、又更に進んで法體の融妙なる點より云へば、吾人凡夫の外別に草木瓦礫ありとするは、緣起の當相に執着するの迷見にして、斯の如きは其人未だ佛性の開顯せざる證なりと云ふべし。

無情有情草木成佛の事は、止觀講述に四段を設けて之を解說し、又日蓮聖人の草木成佛口訣に明らめられたり。

第四節　理具と事造

天台法華の事理は一法上の兩義にして、其體に別あるに非ず、何となれば、法界はたゞ是一物なり、その一物が融妙無量にして常に緣に應じて活動しつゝあるの外、更に別異の法なければなり、故に理具の三千事造の三千と云ふも、三千に兩種ありて、都合六千の法あるに非ず、たゞ一種の三千なり、一種の三千を、義を以つて分別するとき、三千そのものが人天鬼畜の所作に非ず、本來法性中の具有物にして、其體融妙無量なる邊に於いて、理具の名を立て、その法性の具有物たる三千が常に緣に應じて活動し相々宛然たる邊を事造と稱せしなり、是の故に理具無外全指事造、……事造、無外全指理具と云へり。既に理具即事造、事造即理具なりといへば、則ち理具は平等無相にして、事造は差別有相とも云ふ能はず、理具にして平等無相なれば、事造も亦平等無相なり、事造にして差別有相なれば、理具も亦差別有相なり、左すれば言差者事理俱差、言無差者事理俱無差也と云へり、要するに圓教にては別教の如く、萬法の外に別に眞如ありとするにあらずして、萬法そのまゝが即眞如なり、即法性なりと立るものなるが故に、事と云ふも理と云ふも、其體は三千の法の外はなく、たゞ一種の三千を義を以つて判したるものと知るべし、尤も天台山外の諸師は、理具は無相にして、差別は事造に局ると云へり。

此の事造と理具とに就ては、天台宗と日蓮宗との相違を論ずるあり、曰く、此の三千に事理の三千と云ふことあり、天台日蓮各各事理の三千を立つると雖も、天台は單に理の三千を明し、日蓮聖人は更に事理の三千を立つ、何となれば三千の法體事理俱に

圓なり、然れども在迷の凡夫は理性は具すと雖も、事用は全く缺く、名字は初めて聞き觀行は初めて修し、相似分證より究竟に至るまで、事理漸く融し大用現前す、故に台家は凡心所具理性の三千を觀し、當家は本佛所證事成の三千を觀す、復次に台家は攝心修觀を以つて、三千三諦の境を緣し、當家は眼見口唱以て、十界の本尊を念す、是二家事理三千の別ある所以なり、故に日蓮聖人の本尊鈔に曰く、像法に南岳天台出現して、迹門を以つて面と爲し、本門を以て裏と爲して、一念三千其義を盡せりと雖も、但理具を論じて、事行の南無妙法蓮華經に本門の本尊、未だ廣く之を行せずと

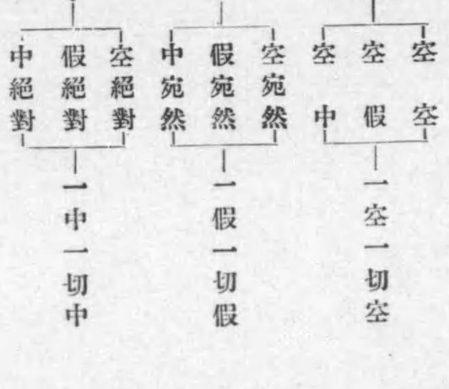
又天台宗の所論は大略最初に解說せし如くなるも、更に其大要を下に示さんに、曰く、理具とは本具の德にして、此一念の心に本來三千の法を具して、平等無差なるを謂ひ、事造とは緣起の用にして、此一念の心法界に周遍し、迷悟諸法の差別歷然たるを謂ふ、然るに事理體不二にして、事の三千の當所即理の三千なり、理具の外別に事造あるにあらず、是を釋籤に三千在理同名無明、三千果成咸稱常樂、三千無改無明即明、三千並常俱體俱用と釋せり、斯の如く事理の法體本來別無ければ、天台一家の觀法は妄の外、眞を求むるに非ず、其要妄即眞と顯はすにあれば、近く自己在迷の妄心を觀境として、是の妄心に三千を具することを曉むるに在り、是に依りて止觀の十境、初めに陰入を觀せしむ、十境(陰入、煩惱、病患、業相、魔事、諸禪、諸見、上慢、二乘、菩薩)とは十乘所觀の境なり、其中陰入の一境を最初に觀せしむる所以は、行人の受身、既に陰入の重擔現前なるが故に、恒に之を觀す、後の九境の如きは、妙觀に激動せられて發すれば即ち之を觀し、發せざれば之を觀せず、然るに九境を立つるは、境界の遍きを示してなり、而して心境を觀するに就て、古來四明と山外との異說ありて、四明は妄心を觀すと謂ひ、山外は眞心を觀すと謂ふ、是れ山外の師は華嚴の心造一切三無差別の文を謬り解し、不二門の一念三千の一念を僻執し妄計を建立して、我心の從本已來未曾離念を察せざるに由る、若し夫れ之れを察せば、則ち我心無始より以來未だ曾て覺悟せず、又未だ成佛せず、全體迷に在り、迷妄を境となして觀を用ふるは大に水を淸すに似たり、自己本來迷に在るは濁成すること本有なり、以つて其心の妄たることを辨知すべし、然るを猶明むる所なく、自己の現前に迷ひ其眞妄を知らずして、屢々四明の詰問を受け、往々其醜を形はす者は、良に學ぶ所明ならず、擇む所精しからざるの致す所なり、故に芥爾陰妄の一念に事理の三千を具足し、三千世間卽空假中なりと觀して、三諦の境を緣するを三千

三諦の妙觀と謂ふ。

第五節　三諦三觀

三諦とは空と假と中となり、此の空假中が隔歴不融なるは別敎の所談にして、所謂隔歴の三諦なり、法華の三諦は大に其趣を異にせり、即ち三諦とは云ふと雖も、唯是一法上の德用差別に過きず、左れば三諦の一々皆互に相融して、空といふも假中を離れず、假といふも空中を缺かず、中も亦然り、即ち三諦にして一諦、一諦にして三諦なり、故に之を圓融の三諦といふ、如何なれば三諦にして一諦、一諦にして三諦なるやといふに、法界はたゞ一種の三千にして、其三千が復に凡夫の情慮を超絶して、而も諸相宛然として、相即相入絶對不可思議なるものなり、所謂空假中とは、即ち此の相貌を言ひ顯はしたる言にして、三千諸法の凡慮に超絶したる邊、之を空と名け、諸相の宛然たる邊、之を假と名け、絶對不思議なる邊、之を中と名く、果して然らば、空といふが假を除き中を除き而して空なるにはあらず、三千の諸相が宛然として、而かも相即相入絶對不可思議なる當相當處が復に凡慮に超絶したるなり、之を一空一切空といふ、即ち空の當處が假なり中なるにて、假中を全めて空なるなり、又假といふが、空と中とを離れて而

して假なるにはあらず、三千の諸法が復に凡慮を超絶したる當相當處が諸相宛然として、而も絶對不思議なるなり、之を一假一切假と云ふ、即ち假の當處が空なり中なるにて、空中を全めて假なるなり、中と云ふも亦之に準して知るべし、上意を圖示すれば、左の如し。



三千の諸法は吾人の凡慮にて、斯く斯くの物なりと料簡し得べきものにてはなく、

して負に凡慮を離れたれば卽空なり、其當處に諸相宛然として松は松、竹は竹と各々相紊亂せざるは、卽假なり、其諸相の紊亂せず各宛然たる當體が、融妙無碍絶妙不可思議なれば、卽中なり、されば三千世間卽空卽假卽中と云ふ、南岳は此趣を十如是の文に三轉讀法を施して釋顯せり。卽ち十如是の文の如の字を句末として、是相如性性如等と讀ましむるが、空諦の讀法なり、又相性等の文字を句末として、如是相、如是性等と讀ましむるは、假諦の讀法なり。又如是の是の字にて句逗して、相如是、性如是等と讀ましむるは中諦の讀法なりとす。

又更に空假中の三諦を吾人の上に就て論すれば、所觀の境は三諦にして、能觀の智は三觀なり、諦とは審實不虛の意、觀とは觀察照了の義、諦觀名異にして其體一なり、中諦は一切諸法を統攝するもの、空諦は又之を眞諦とも稱し一切の情相を泯亡するもの、假諦又之を俗諦と云ひ一切の法門を建立するもの、之れ卽ち衆生本具の三諦にして吾人は本來此の三諦の性德を具足して缺減せず、然るに凡夫は見思、塵沙、無明の三惑に覆はれて、此の性德を覺悟すること能はず、玆に於て三觀を以て三惑を破し、三智三德を證得せしむ、故に三諦三觀と云ふ、荊溪の始終心要に曰く

夫三諦者天然之性德也、中諦統一切法、眞諦者泯一切法、俗諦者立一切法、舉一卽三、非前後也、含生本具、非造作所得也、悲夫秘藏不顯、蓋三惑之所覆也。

三諦論は他の宗派にても唱ゆる所なるも、法華の三諦觀は三論等の所論と異なれりと爲せり、其所以は、空中に假と中とあれば三論の如く斷無の空に非らず、假中に空と中とを具すれば賴緣の假に非らず、中は固より空假を收むれば無得の中に非らず、故に假より見れば一切假にして、空より見れば一切空なり、而して中は假と空とを綜合せるものなれば、中の外に假空なく、一を擧ぐれば卽ち三なりと云ふに在り

又止觀に曰く、一法一切法と云ふは、卽ち是れ假名假觀なり、又一切法卽ち一法と云ふは空觀なり、非一非一切と云ふは中觀なり、而して一空一切空なるゆへ、假中として空ならざるはなく、一假一切假なれば、空中皆假觀ならざるはなし、一中一切中なれば空假皆中觀ならざるはなしと、此れ卽ち物心の關係、又は實在と現象との關係を說破せる大哲理にして、卽ち總てを精神的に解すれば悉く唯心なり、又物質的に見れば皆物なり。非物非心或は物心一如的に見れば渾融せる統合具存的の一元なり、現象卽實在と云ふも、一如的實在と云ふも、此の觀察の一部に外ならず、斯くの如く三方面より

宇宙並に人生を觀察し、萬有の實相と人生の眞歸趣とを自覺するは、卽ち三諦三觀にして此の三諦觀成就すれば三智を得、三德を證現するに至るものなり、三智とは一切智と道種智と一切種智とにして此の智が事實の上に活現し來るは卽ち佛なり、

第六章　人生篇

第一節　修生善惡

性とは本有不改の義にして、一切衆生本來法爾の性德なり、此性は前の宇宙觀一念三千の哲理よりして、常に十界、十如、三千の法を具するが故に、性そのものゝ根源に善惡の二法燦然として存在す、是を性善性惡と謂ふ、此の性本來是の如しと雖も、智用を以つて性を照らし、性に因て修を發す、性に在るときは修を全くして性を成し、修を起すときは性を全くして修を成す、修又二種あり、曰く順修、曰く逆修、順修は性を了して智となり、逆修は性に背いて迷となる、迷と了との二心、本來理は一なりと雖も、事は殊なり、是を修善修惡と謂ふ、然るに佛性不二なるを以つて、修に善惡あるは性に善惡ある所以なり、華嚴、三論、法相等にては性惡の義を許さるゝも、法華は特り性に善惡を具するを明らかにす、元來善と惡と體もと不二なること、猶水と波とのごとし、水波元來別なしと雖も、狂風起れば忽ち激浪怒濤を捲き、風靜かなれば波も亦收る、闡提は修善を斷して性善を斷せず、諸佛は修惡を斷して、性惡を斷せず、闡提は性善を斷せざれば緣に遇て善を發す、諸佛は性惡を斷せざるが故に、慈力薰する所、阿鼻に入り一切の惡事を同くして衆生を化す、性惡あるを以つて不斷と名く、若し修性俱に盡くせば、是れ斷にして不斷不常と爲すことを得ず、闡提も亦然り、性善を斷せざるが故に、……還て善根を生ず、如來は性惡を斷せざるが故に還て能く惡を起す、惡を起すと雖も染礙することなし、惡際卽是れ實際なりと通達し、能く五逆の相を以て而も解脫を得、また不縛不脫にして、非道を行し佛道に通達す、闡提は染礙するが故に、此の理に達せず、是を以つて異なり又闡提は性善に達せず、達せざるを以ての故に、善の染むる所と爲り、修善を起すことを得て、廣く諸惡を退治す、佛は性惡を斷せずして能く惡に達す、惡に達するを以ての故に、惡に於て自在なり、自在なるを以ての故に、廣く諸惡の法門を用ひて、衆生を化度し、終日之を用ひて終日染むること無し、故に性の善惡は但是善惡の法門にして、三世常恒改易すべからず、是を性惡の法門と云ひ、また性具の功用と名

く。

之を要するに十界に各々十界の性相體力等を具すれば、煩惱生死は仍ほ法性の具有物なり、煩惱生死が法性の具有物なれば則ち法性には惡をも具すと謂ふべきなり故に虎溪の佛心印記及觀音玄義には、只一具字、彌顯今宗、以性具善、他師亦知、具惡緣了、他皆莫測、是知今家性具之功、功在性惡と歎せり、又修性と云へるは前の事理等の言と同く、一法上の兩義なり、修とは人の作業、性とは法の上に具へたる德を謂ふ、火を他家に放ち或は物を以て貧窮に恤む、是は人の作爲せる惡及び善なれば修惡なり修善なり、左れば修惡修善の外に別に、性惡性善と云ふに非ず、修惡修善は卽ち性惡性善なり、故に、修性は一の惡、若くは善の上の義にして、兩種あるに非ざることを、此の如く修性は別物に非ず、修卽性なれば、惡業も亦法性に具有する所の德用にして、其體善と別なるものに非ず、たゞ同一種の三千なり、同一種の三千が、自體に違して動くとき惡なり、自體に順して動くとき善とはなるのみ、譬へば十萬の人家を蕩盡するも、火の用なり、億兆の食物を飪烹するも、火の用なり、火に兩種あるに非ず、同一の火が自家の德に違して動くとき物を損し、自家の德に順して動くとき人を益するが如し、左れば性惡法門と云ふて惡卽法性なりと知らざるものは迷ひ、知るものは悟るなり、曾に惡性が法門なるのみならず、修惡卽性惡なれば修惡も亦法門なり、故に無行經には婬慾卽是道、患癡亦復然といへり、又和須密多婬而梵行、秖陁末利唯酒唯戒と云へることあり。法性に善惡を具すれば、諸佛にも惡あり、闡提にも善あり、佛心印記及觀音玄義に曰く、諸佛不斷性惡、闡提不斷性善、闡提斷修善盡、修惡滿足、諸佛斷修惡盡、修善滿足。

第二節　善惡の標準

佛敎の本義より推す時は、決つして世間常途の倫理道德と矛盾衝突すべきものに非らず、又敢て之を無視するものにも非らず、然れども亦其實を剋して謂ふ時は、佛敎の第一義卽ち眞諦門よりすれば、所謂倫理道德を否定するには非らざるも、此を以て究竟の善、人生の眞歸趣とは爲さゞるものなり、斯かる意味に於て宗敎卽ち佛敎は倫理道德に超越せり、蓋し世間の所謂倫理道德なるものは、佛敎より之を見る時は、其根底極めて脆弱にして恰かも根なき浮草の如く、善と稱すと雖も、畢竟は迷中の是非にして、大悟界より之を批判する時は、常途の善惡は五十步百步の差に過ぎず、善として讃すべき價なく、時に却つて僞善に墮し、惡よりも一層忌むべきものあり、從つて又惡

と雖も、別に深く咎むべきに非らず、佛敎の善惡なるものは、其所說の眞理を信ずると否とに由つて判別さるべきものにして、善惡の標準は佛說に由つて明らかに裁斷せられ居れり、從つて其所說を信じ、其所說の如く修養作動するは善なりとす。

斯く云はゞ佛敎の善惡標準說は、無上命令說と異なるなく他律の甚しきものなり、敎權主義の極端なるものなりと笑はんも、佛敎の根本義は自己の思慮分別を棄て、無我に入りて自然法爾の理に順ずるに在るを以て、他律と同時に自律をも超越したる大自然の理法に基づくものなれば、ある部分の人間社會に於て慣習と爲り、或は一學說等の標準論と其趣を異にし、非倫理にはあらざるも超倫理たるは自明の理なりとす。

然り而して均しく佛敎中にも、權實淺深あり、從つて各宗に於て其標準を異にするに至る、今日蓮聖人の所見を左に一瞥すべし。

開目鈔に曰く、涅槃經に云く我等悉名邪見之人等云々、妙樂云く自指三敎皆名邪見等云々、止觀に云く大經云自此之前我等皆名邪見之人也邪豈非惡云々、弘決に云く邪卽是惡是故當知唯圓爲善、復有二意一もの以順爲善以背爲惡相待意也以著爲惡以違爲善相待絕待俱須離惡圓著尙惡況復餘耶云々、外道の善惡は小乘經に對すれば皆惡道、小乘の善道乃至四味三敎は法華經に對すれば皆邪惡但法華のみ正善なり、爾前の圓は相待妙絕待妙對すれば猶惡なり前三敎に攝すれば猶惡道なり、爾前のごとく彼の經の極理を行ずる猶惡道なり、況や觀經等の華嚴經般若經に及ばざる小法を本として法華經を觀經に取入て、還て念佛に對して閣抛閉捨せる法然竝に所化の弟子等檀那等は誹謗正法の者にあらずや。

最蓮房御返事に曰く、然るに今時は師に於て正師邪師の不同あることを知て邪惡の師を遠離し正善の師に親近すべきなり、設ひ德は四海に齊く智慧は日月に同くとも法華經を誹謗するの師をば惡師邪師と知て是に親近すべからざる者也、或經に云く若誹謗者不應共住若親近共住卽趣阿鼻獄と禁給是なり、いかに我身は正直にして世間出生の賢人の名をとらんと存ずれども、惡人に親近すれば自然に十度に二度三度其敎に隨ひ以て行ほどに終に惡人になるなり、釋に云く若人本無惡親近於惡人後必成惡人惡名遍天下云々、所詮邪惡の師とは今の世の法華誹謗の法師なり、涅槃經に云く菩薩於惡象等心無恐怖於惡智識生怖畏心爲惡象殺不至三趣爲惡友殺必至三趣

……正善の師と申は釋尊の金言の如く諸經は方便、法華は眞實と正直に讀を可申候

曾谷殿御返事に云く、涅槃經に云く、若善比丘見壞法者置不呵責驅遣擧處當知是人佛法中怨若能駈遣呵責擧處是我弟子也眞聲聞也云々、此文の中に見壞法者の見と置不呵責の置とを能々心腑に染むべき也、法華經の敵を見ながら置てせめずんば師檀ともに無間地獄は疑なかるべし、南岳大師の云く與諸惡人俱墮地獄云々、謗法を責めずして成佛を願はゞ火の中に水を求め水の中に火を尋るが如くなるべし、はかなしはかなし。

日蓮聖人は法華中心主義なり、而して法華經は佛說中の最高至極のものなり、故に法華經の所說を遵奉せざる者は、縱令佛敎徒と雖も、悉く惡人なりと爲すに在り、殊に又法華經を信ずるものと雖も、他の法華經を謗る者を折伏せざれば之れ賊を知つて告げず、惡人隱匿罪と均しく結局惡人たるを免かれずと爲すものなり、左れば法華經を遵奉し、其所說に隨順し、忠實に信仰するものは、悉く善行なり善人なり、之れに反して苟くも法華經に反對し、又之を誹謗するものは、王侯貴人と雖も、權門富豪と雖も、如何なる學者智者も如何に常途に所謂君子聖人と雖も、大慈善家と雖も、猶進んで佛敎各宗の諸大德と雖も、悉く之れ大惡行大惡人なりとの結論を得るに至るものなり、よし又一歩を讓りて此等は大惡行大惡人には非らずとするも、矢張り迷中の是非にして、眞の善にはあらず、究竟の道德には非らざるなり、之れに反して日蓮聖人始め其末徒が折伏の法門に依つて他を攻擊する如きは、恰かも楠公の義軍と同じく、之れ即ち悟中の是非にして、悟中の是非は是非共に是なれば、縱令ひ人を打ち人を責むるも皆是れ菩薩道なり、佛業なり、罪惡と爲らざるのみならず、大功德大慈善なりと爲すものなり。

眞理を自覺し、之れに據つて行動するは絕對善なり、法華經の所說が宇宙人生唯一のものなるや、否やは別問題とするも、日蓮聖人の精神は絕對眞理を覺悟し信仰して之れに據つて以て一切を律せんとするに在れば、其行動は聖人の爲めには、悉く之れ絕對的行爲なりと云ふべく、又自己の所信と反するものを折伏し、又は勸化せんとするは、所信に忠實なる所以にして、之れ亦咎むべきに非らざるのみならず、均しく絕對行爲たるものなりとす、故に吾人は宗敎上に於ては倫理的の善惡を云々し、又分別するを欲せず、絕對行爲なるや否やの判語を用ひると同時に之を以て世間道德の基礎

と爲し、紛々たる善惡標準論及び不徹底なる勸善懲惡論を一掃し去らんことを希望するものなり。

第三節　無常と常住

世間相は無常也、生あれば玆に死あり、人にして生老病死、物にして成住壞空、有爲轉變は現象界の事實にして、何ものも之を否定すること能はず、此の無常觀は一轉して悲觀主義を馴致す、人生は不如意なり、社會は不公平なり、富者の驕り、權者の暴、一宵千金を拋ちて多しとせざる傍らに、一食の飢を凌ぐ能はざる窮民あり、惡人榮へて、善者寃に泣くも亦少なからず、天道は是か非かの歎は何人にも起り得べき所にして、悲觀厭世は人生社會の現實に立脚せる實際主義なり。

人生が不如意不公平にして悲觀的なる故、玆に始めて道德の必要生じ、宗敎も亦之れに依つて發生せるものなり、所謂大道廢れて仁義あり、人生最初より善美ならんか、何ぞ宗敎道德を要せん、左れば無常は萬有現象界の事實眞際にして、悲觀厭世は宗敎の起源なり、門口なりと謂はざるべからず、然れども人生にも一切萬有にも兩面あり、兩義あり、萬有は其表面に於て無常なり、人生も亦其表面に於て悲觀的なり、左れど其內面には常住あり樂觀的なるあり、此の兩者を達觀して、兩義に於て不即不離なる境界に立脚するものは所謂大覺なり、佛陀なり、宗敎の目的は悲觀に執し、又は樂觀に執するものを警策して、斯かる不即不離の境界に到達せしむるを能事と爲す、故に佛敎を單に悲觀的厭世主義なりとするは當らざると同時に、厭世的ならずとするは自殺なり、左れど亦樂觀常住に固執するも佛敎の本意に非らず、悲樂を双用し、之れに離れずして而かも超在するに在りとす。

聖愚問答鈔に曰く、夫れ生を受しより死を免れざる理りは、賢き御門より卑しき民に至るまで人ごとに是を知るといへども、實に是を大事とし是を歎く者千萬人に一人も有がたし、無常の現起するを見ては疎きをば恐れ親きをば歎くといへども、先立ははかなく留るはかしこきやうに思て、昨日は彼のわざ今日は此事とて徒らに世界の五欲にほだされて白駒のかけ過やすく羊の歩み近づく事をしらずして、空く衣食の獄につながれ、徒らに名利の穴にをち三途の舊里に歸り、六道のちまたに輪回せん事、心有ん人誰か歎かざらん誰か悲まざらん、嗚呼老少不定は娑婆の習ひ會者定離は浮世のことはりなれば敢て驚くべきにあらねども、正嘉の初め世を早うせし人のあ

りさまを見るに、或は幼き子をふりすて或は老たる親を留めをき、いまだ壯年の齡にて黄泉の旅に趣く心の中さこそ悲しかるらめ、行もかなしみ留るもかなしむ、彼の楚王が神女を伴ひし情けを一片の朝の雲に殘し、劉氏が仙客に値し思ひを七世の後胤に慰む、予が如き者底に緣て愁を休めん、かゝる山左のいやしき心なれば身には思のなかれかしと云けん人の古事さへ思出られて、末の代のわすれがたみにもとて難波のもしほ草をかきあつめ水くきのあとを形の如くしるしをく也、悲哉痛哉我等無如より已來無明の酒に醉て六道四生に輪回して、或時は焦熱大焦熱の炎にむせび、或時に紅蓮大紅蓮の冰にとぢられ、或時は餓鬼飢渴の悲みに値て五百生の間飲食の名をも聞ず、或時は畜生殘害の苦をうけて小きは大きなるにのまれ短きは長きにまかるは是を殘害の苦と云ふ、或時は修羅鬪諍の苦をうけ、或時は人間に生れて八苦をうく、生病死愛別離苦怨憎會苦求不得苦盛陰苦等なり、或時は天上に生れて五衰をうく、如此三界の間を車輪のごとく回り、父子の中にも親の親たる子の子たる事をさとらず、夫婦の會遇るも會遇たる事をしらず、迷へる事は羊目に等く暗き事は狼眼に同じ、我を生たる母の由來をしらず、生を受たる我身も死の終りをしらず、嗚呼難受人界の生を

う難値如來の聖敎に値奉れり一眼の龜の浮木の穴にあへるがごとし、今度若し生死のきづなをきらず三界の籠樊を出ざらん事かなしかるべしかなしかるべし。

又曰く抑上は非想の雲の上、下は那落の底までも生をうけて死をまぬがるゝ者やはある、然れば外典のいやしき敎にも朝有紅顏誇世路夕爲白骨朽郊原とぞ云へり、雲のびんづらあざやかに雪のたもとをひるがへすとも其樂みをおもへば夢の中の夢也、山のふもと蓬がもとはつゐの栖なり玉の臺錦の帳も後世の道には何かせん、小野町小衣通姫が花の姿も無常の風にちり、樊噲張良が武藝に達せしも獄卒の杖をかなしむ、されば心ありし古人の云く、あはれなり鳥べの山の夕煙をくる人とて驚くべきにあらず、願ても願べきは佛道求めても求むべきは經敎也。

持妙法華問答鈔に曰く暮行空の雲の色、有明方の月の光までも心をもよほす思也、事にふれ折に付ても後世を心にかけ花の春雪の朝も是を思ひ、風戰ぎ村雲迷ふ夕にも忘るゝ隙なかれ、出る息は入る息を待す、何なる時節か每自作是念の悲願を忘れ、何なる月日ありてか無一不成佛の御經を持たざらん、昨日が今日になり、去年の今年となる事も是期する處の餘命にはあらざるをや、總て過にし方を數へて年の積るをば

知といへども、今行末にをいて一日片時も誰か命の數に入べき、臨終已に今にありとは知りながら、我慢偏執名聞利養に著して妙法を唱へ奉らざらん事は、志の程無下にかひなし、さこそは皆佛道の御法とは云ながら、此人爭か佛道にものうからざるべき、色なき人の袖にはそゞろに月の宿る事かは、又命已に一念にすぎざれば佛は一念隨喜の功德と說給へり、若是二念三念を期すと云はゞ、平等大慧の本誓頓敎一乘皆成佛の法とは云はるべからず……生涯幾くならず、思へば一夜のかべりの宿を忘れて幾れの名利をか得ん、又得たりとも是夢の中の榮へ珍しからぬ樂み也、只先世の業因に任て營むべし、世間の無常を悟ん事は眼に遮り、耳にみてり、雲とやなり雨とやなりけん、昔の人は只名をのみきく露とや消え烟とや登りけん今の友も又みえず、我れいつ迄か三笠の雲と思ふべき、春の花の風に隨ひ秋の紅葉の時雨に染る、是皆ながらへぬ世の中のためしなれば、法華經には世皆不牢固如水泡沫焰とすすめたり、以何命衆生得入無上道の御心のそこ、順緣逆緣の御ことのは已に本懷なれば、暫も持つ者も又本意にかないぬ、又本意に叶はゞ佛の思を報する也、

以上は日蓮聖人の無常觀の一部なり、此の他聖人の無常觀は諸書に見えたり、吾人は更に轉じて其常住觀の一端を見んか、

三世諸佛總勸文鈔に曰く、總じて一代聖敎は一人の法なれば我身の本體を能く知るべし、之を悟るを佛と云ひ之れに迷へば衆生なり、此は華嚴經の文の意なり、弘決の六に云く此身の中に具に天地備ふことを知る、頭の圓なるは天に象り足の方なるは地に象ると、知り身の內の空種なるは卽是虛空なり、腹の溫なるは春夏に法とり、背の剛きは秋冬に法とり、四體は四時に法とり、大節の十二は十二月に法とり、小節の三百六十は三百六十日に法り、鼻の息の出入は山溪の中の風に法とり口の息の出入は虛空の中の風に法とり、眼は日月に法り開閉は晝夜に法とり、髮は星辰に法とり、眉は北斗に法とり、脈は江河に法とり、骨は玉石に法とり、皮肉は地土に法とり、毛は叢林に法とり、五法は天に在ては五星に法とり地に在りては五岳に法とり陰陽に在ては五行に法とり法に在ては五常に法とり內に在つては五神に法とり行を修するには五德に法とり罪を治るには五刑に法る謂く剔淵宮大辟なり……主領には五官と爲す五官の下の第八の卷に博物誌を引くが如し謂く苟蒲等なり、天に昇ては五雲と曰ひ化して五龍と爲る此心を朱雀と爲し腎を玄武と爲し肝を青龍と爲し肺を白虎と爲し

脾を勾陳と爲す、又云く五音五明六藝皆此より起る亦復當に內治の法を識るべし、覺心內に大王と爲ては百重の內に居り出ては即ち五官に侍衞せらるゝ肺をば司馬と爲し肝をば司徒と爲し脾をば司空と爲し四支をば民子と爲し左をは司命と爲し右をば司錄と爲し人を主司す、乃至臍をば太一君等と爲す禪門の中に廣く其相を明す、人身の本體委く檢すれば如是、然るに此金剛不壞の身を以つて生滅無常の身なりと思ふ、僻が思はゞ譬ば莊周が夢の蝶の如しと釋し給へる也。

授職灌頂口傳鈔に曰く、妙法一心の如來壽量品なるが故に我等凡夫の一念なり、一念は卽如來久遠の本壽本地無作三身本極法身本因本果の如來也、所居の土は常在靈山四土具足の本國土妙也、又釋尊と我等は本地一體不二の身也、釋尊と法華經と我等との三は全體不思議の一法にして三の差別無き也、左ば日蓮等の類並に弟子檀那、南無妙法蓮華經と唱る程の者は久遠實成の本眷屬妙也、此人の所居の土は久遠實成の本國土妙也、釋尊靈山淨土にして本地地涌の菩薩に授職灌頂して言く、飢時の飲食寒時の衣服熱時の冷風昏時の睡眠、皆是本有無作の無緣の慈悲にして利益に非ること なし、仍て十妙異りと雖も一切功德の法門也、一念唯遠本壽量の妙果也、南無常寂光の本地無作三身卽一の釋迦牟尼如來、南無久遠一念の如來壽量品、南無十方法界唯一心の妙法蓮華經……如此心得て至心に南無妙法蓮華經と唱れば、久遠本地の諸法無作の法身如來等は皆我等が一身に來集し給ふ。

第四節　現世と未來

佛敎は三世因果を人生の源底と爲す、過去世の因に依つて現世の果を得、現世の業因に依つて未來の果を招くものとす、此れ物理學上よりするも當然の理法にして、過去を考へず、未來を無視するものは、因果の大法を撥無するものにして、佛敎徒と云ふべからざるのみならず、苟くも理性ある人類たる價値資格なきものとす、然り而して三世因果說は因果循環なるを以て無始無終なり、左れば吾人には無始永遠の過去あると同時に、無終悠久の未來あるべきは事實なり、此永久の過去と未來とに對しては現世は極めて短時間にして、謂はゞ一刹那なり、茲に於て未來主義、未來尊重說は自然に發生せざるを得ず、加之現在の不完全、人生の不如意不公平は、益々此の未來主義を煽厲して、未來往生の宗旨を立てしむるに至れり、此の未來往生宗は人生の機微弱點を捉へ、且つ三世因果の理法に根基せるものなれば、單に天國說等と同視すべからざ

る價を有するものなりとす。

然れども亦飜つて仔細に之を考察する時は、死を解するは畢竟生の爲めなると均しく、未來往生の準備は結局吾人の尤も苦痛とする死後の恐怖を去り、以て安穩に現世に處せんとする爲めに外ならずと解し得べし、殊に又因果の理法よりして、未來の如何は一に懸つて現世の因果如何に存するものなれば現世の貴重なるべきは謂ふまでなき所なりとす。

斯くの如く觀じ來れば、未來主義の現世を輕視し穢土厭離、現世は濁惡なり、人生は大苦なり、苦界なりとの主張は、頗る不當なりとす、畢竟するに永遠なる未來の貴重なると均しく、現世も亦貴重にして、人生は極めて尊重せざるべからず、從つて未來偏重主義は未了の見なると同時に、佛敎の本義に於ては之を執らざる所なり、然れども亦現在に執着して、未來を撥無することは、固より自然の大法に反するものなり。

左れば佛敎としては、現世の濁惡にして厭ふべき所以を究むると同時に、又人生の尊重すべき理由、現在の價値の重大なるを考査して、現世人生の兩面を盡くし、更に又未來の貴重なる意義を闡明し、未來主義と現世主義とを兩々相對して以て、俱に有力有價ならしめんとするに在るものにして、此れ佛敎が常途の倫理道德以上に、又他の宗敎、若しくは乾燥なる哲學等と其趣を異にして、獨得の妙味と威力とを有する點なりとす。

次に現世主義と未來主義とは、前の常無常卽ち樂觀と悲觀と相關連し、互に隨伴するものにして、現世主義は概して樂觀的に傾き、未來主義は現在の悲觀と爲るは自然の理致なりとす、左れば現未の双照は、悲樂の不離と其義を一にす、以下日蓮聖人の證文を見んに、

可延定業抄に曰く、命と申す物は一身第一の珍寶也、一日なりともこれをのぶるならば千萬兩の金にもすぎたり、法華經の一代の聖敎に超過していみじきと申は壽量品のゆへぞかし、閻浮第一の太子なれども、短なれば草よりも輕し、日輪の如くなる智者なれども、夭死あれば生ける犬に劣る。

立正安國論に曰く、問ふて云く、華嚴、方等、般若、阿含、觀經等の諸經を見るに兜率、西方十方の淨土を勸む、其上法華經の文を見るに、亦兜率西方十方の淨土を勸む、何ぞ此等の文に違して、但瓦礫荊棘の穢土を勸むるや、答へて云く、爾前の淨土は久遠實成の釋

迦如來の所現の淨土にして、實に皆穢土なり、法華經は亦方便壽量の二品なり、壽量品に至りて實の淨土を定むるとき、此の土は即ち淨土なりと定め了んぬ、但し兜率、安養十方の難に至りては爾前の名目を改めずして此の土に於て兜率安養等の名を付く例せば此經に三乘の名ありと雖も、三乘あらざるが如し、不須更指觀經等也の釋の意是なり、法華經に結緣なき衆生の、當世西方淨土を願ふは、瓦礫の土を樂ふとは是れ也、分添の淨土なきなり。

以上は日蓮宗現世主義人生尊重論の一段なり、以下更に未來主義に就て、其概要を抄錄すべし。

妙法尼御前御返事に曰く、夫以は日蓮幼少の時より佛法を學び候ひしが念願すらく人の壽命は無常なり、出る氣入る氣を待つ事なし、風の前の露尙譬にあらず、賢も愚も老たるも若きも定め無き習也、されば先臨終の事を習ふて後に佗事を習ふべし。

木尊問答鈔に曰く、佗事をすてゝ此所本尊の御前にして一向に後世をも祈せ給ひ候へ

日女御前御返事に曰く、日蓮が弟子檀那等正直捨方便乃至不受餘經一偈と無二に信ずる故によつて此御本尊の寶塔の中へ入るべきなり賴母し、如何にも後生を嗜み給ふべし嗜み給ふべし。穴賢

持法華問答鈔に曰く、三界無安猶如火宅は如來の敎へ、所以諸法如幻如化は菩薩の詞也、寂光の都ならずは何くも皆苦なるべし、本覺の栖を離て何事か樂かるべき。

第五節　三世無礙論

現世と未來、樂觀と悲觀とを、双々對比せしめて俱に有力有意義ならしむる佛家の所見は前述の如し、然るに百尺竿頭更に一歩を進めて、因果同時、生死不二、悲樂一如の圓融門に至れば、修性不二、久遠實成、三身常在の大哲理よりして、過現未の三世は無碍融卽し、絕對的の現在常住と轉化し來るものなり、之れ因果を撥無するに非らず、三世を滅却するに非らず、三世因果は現象起滅の理法なれば、現象と實在と融合し、渾然一體と爲る時、卽ち自己の實在本體を體證すれば、波の起滅は妨げざるも水の本質常住なると均しく、絕對常住、絕對常樂の生死卽涅槃、煩惱卽菩提の大圓佛界を顯證し得るものなり。

色心二法鈔に曰く、此生死六道四生二十五有に廻りて輪廻今に絕す、然るに佛は此

生死を離るゝを以て佛と云ふ、此生死に遷り迷ふを以て凡夫と云也……止觀五云無明痴或本是法性、以痴迷故法性變作無明起諸顚倒善不善等、如寒來結水變作堅氷、又如眠來變心有種種夢、今當體諸顚倒卽是法性不一不異雖顚倒起滅如旋火輪不信顚倒起滅唯信此心但是法性、起是法性起滅是法性滅、體其實不起滅妄謂起滅云々……此釋意は我等がいとひ悲める生死は法身常住妙理にて有ける也、譬は我等が生死と云へるは過行く日月に付て生死は有也……故に一年十二月は十二因緣の生死也、正月生位より十二月老死滅位に至る、又此滅の位より生の種をついで十界の因果三世不改、十界の生死は過行日月にて有也、又我等衆生の身のみならず、草木も皆此月日の明暮生死に移れて我等と俱に生死する也、譬は生するは心法也、滅するは色法也、色心の二法が不二也と云ば、譬はもみを種にをろすに、もみは去年の菓なれば心法也、此心法を今年種に下すに此種子成苗し、心成色故心法の形不見但色法のみなり、雖然此色法の全體は心法なる故に日月の過行に隨て生長する也、故に色心不二也、色心不二なりといへども又而二也、此色法の苗の中より秋に至て又本の心法を生ずる也、故に不二にして而二也、如是十界の依正色心の二法、一法二義の理にして、生死常住の故に三世に改まる事なし。

生死一大事血脈鈔に曰く、夫生死一大事血脈者所謂妙法蓮華經是也、其故は釋迦多寶二佛寶塔の中にして讓上行菩薩給、此妙法蓮華經の五字過去遠遠劫より已來寸時も不離血脈也、妙死法生也、此生死の二法が十界の當體也、又此云當體蓮華也……傳敎大師云生死二法一心妙用有無二道本覺眞德、天地陰陽日月五星地獄乃至佛果生死二法に非ずと云ことなし、如是生死も妙法蓮華經の生死也、天台止觀云起是法性滅是法性滅云々、釋迦多寶の二佛も生死の二法也、然者久遠實成の釋尊と皆成佛道の法華經と我等衆生との三全無差別解て、妙法蓮華經と唱奉る處を生死一大事の血脈とは云ふ也……過去の生死現在の生死未來の生死三世の生死に法華經を不離切法華の血脈相承とは云ふ也、謗法不信の者は卽斷一切世間佛種として、佛に成べき種子を斷絶するが故に生死一大事の血脈無之也……日本國の一切衆生に法華經を信せしめて佛に成る血脈を繼しめんとするに、還て日蓮を種々の難に値給事心中思遣られて痛まし く候ぞ……過去の宿緣追ひ來て今度日蓮が弟子と成り給歟、釋迦多寶こそ御存知候らめ、在々諸佛土常與師俱生よも虛事候はじ殊に生死一大事の血脈相承の御尋先

代未聞の事也……相構へて強盛なる大信力を致して南無妙法蓮華經臨終正念と祈念し給へ、生死一大事の血脈此より外に全く求ること勿れ、煩惱卽菩提生死卽涅槃とは是なり、信心の血脈なくんば法華經を持とも無益なり、委細之旨又々可申候、恐々謹言。

十如是事に曰く、我身が頓て三身卽一の本覺の如來にてありける事也、是をよそに思を衆生とも迷とも凡夫とも云也、是を我身の上と知ぬるを如來とも覺とも聖人とも智者とも云也、かう解り明かに觀すれば我身頓て今生の中に本覺の如來を顯はして卽身成佛とはいはるゝ也、譬ば春夏田を作り了へれば、秋冬は藏に收て心のまゝに用るが如し、春より秋をまつ程は久き樣なれども一年の內に顯はして我身が三身卽一の佛となりぬる也、此道に入ぬる人にも上中下の三根はあれども同く一生の內に顯はす也、上根の人は聞所にて覺を極て顯はす、中根の人は若は一日或は一月若は一年に顯す也、下根の人はのびゆく所なくてつまりぬれば、一生の內に限たる事なれは臨終の時に至て諸のみえつる夢も覺てうつつになりぬるが如く只今までみつる所の生死妄想の邪思ひがめの理はあと形もなくなりて、本覺のうつつの覺にかへりて法界をみれば寂光の極樂にて日來賤と思ひし我此身が、三身卽一の本覺の如來にてあるべき也、秋の稻には早と中と晩との三稻有あれども一年が內に收むるが如く、此も上中下の差別ある人なれども同じく一生の內に諸佛如來と一體不二に思合せてあるべき事也。

最蓮房御返事に曰く、此の受職を得る人爭でか現在なりとも妙覺の佛を成せざらん、若し今生妙覺ならば後世豈に等覺等の因分ならんや。

一念三千法門に曰く、此の妙法蓮華經とは我等が心性、總じては一切衆生の心性、八葉の白蓮華の名なり、是を敎給ふ佛の御詞なり、無始より以來我身中の心性に迷て生死を流轉せし身、今此經に値ひ奉て三身卽一の本覺の如來を唱るに顯れて現世に其內證成佛するを卽身成佛と申す、死すれば光を放つ是外用の成佛と申す、來世得作佛とは是なり。

授職灌頂鈔に曰く、慇懃の行者は分段の身を捨てゝも卽身成佛、捨てずしても卽身成佛なり。

十二因緣御書に曰く、今法華宗は法華經と云ふ我等が心を捨てざれば死骸六根隨

て失せず、心卽五根、五根卽心なれば心法成佛すれば色法共に成佛す、色心不二にして內外相具せり。

之を要するに迷妄の凡夫が生死あり、迷悟あり、因果あり、現未ありと觀ずるは、恰かも波そのものゝ起滅波動のみを見て、水質の常住不變なるを知らざるが如きものにして、苟くも覺悟成佛して佛眼を以て之を觀ぜんか、如何に波に起滅騷動ありと雖も此れが爲めに水質の常住不變を妨げざるのみならず、水波の本來不二にして、波動は本質の上に現はるゝ順逆兩樣の作動なること覺り得べく、從つて生死は凡夫に於ては二なるが如しと雖も、佛に於ては本來不二にして現未全たく融卽したるものとす之れ卽ち生死卽涅槃の大眞理なると共に、三世常住無碍の根本意義なりとす。

第六節　人道論

既に善惡標準論に於て述べし如く、佛敎の第一義は宇宙の眞相人生の眞歸趣を體得し、驀つて人間社會に處しては發して節に中り、不知不識帝の則に從ふ底の境界に達するに在り、故に佛敎の信念を得たる者は別に仁義忠孝等の人道を云々せざるも心の欲する所に從ふて矩を踰ゆるものに非らず、自ら世道人倫と冥合一致すべきものなりとす。

然れども亦一方には未熟の機に對し、或は萬一を豫防する爲め、常途の人道と類似せる說法規範は、佛敎經論中頗る多し、殊に日蓮宗に至つては、國體論を始めとして、極めて近代的の倫理道德を鼓吹するに努め居れり、今佛敎特に日華宗の人道論を考査するに、そが固より宗敎としての第一義には非らざると同時に、又世間常途の人道論とも大なる徑庭ありて、完全なる社會、眞正なる人道と、所謂佛敎の人道とは全然一致冥合するも、若し社會にして缺陷あり、又御都合主義の人道論ならんか、全たく矛盾正反對の悲劇を見るに至るものなり。

日蓮聖人の迫害、法然上人の流刑等、之れ全たく王法及び世間道德と佛敎道德との衝突より來れる慘禍にして、其非は之を社會組織の不完全卽ち時代の缺陷に歸せざるを得ず、兩上人の態度は宗敎道德として、又其信念の健康なる上よりしても、或は所修法敎に忠實なる點よりしても一點の非難すべき所なし、左れば宗敎家たる者は、宗敎道德及び自家の所信と世法矛盾せる時は、退いて枯仙を學ぶか、或は進んで犧牲と爲り、以て社會の覺醒人道の刷新を企つるの他なきなり、兩上人や基督等所謂宗敎家

が世法の犧牲と爲りしは一方には以て益々宗敎の光輝を發揮すると同時に、他方には世法人道の革命改善の端緒動機と爲りたるは謂ふまでなき所にして、孰れにしても社會人類の幸福を增進し、文明轉進の爲めならざるはなきなり。

上述の意義に於て日蓮聖人と耶蘇基督とは世界人類中尤も偉大なるものにして、宗敎家としての半面を尤も極端に尤も峻烈に發揮せし者なり從つて日蓮宗と基督敎とは、其敎風亦能く此の遺鉢を傳へて、精神界の革新、人道の矯正上、優越なる彈力を有し居れり、尤も現在の敎徒は、退いて、仙を學ぶの靜和もなく、進んで犧牲と爲る勇氣熱烈もなく、却つて世法に媚び、甚しきは社會の幇間と化し了れるものあり、此れ正しく祖師を辱しめ、法を汚かす獅子身中の蟲と云つべきなり。

日蓮聖人の國體主義は別に章を設けて之を闡明すべく、今常途の倫理道德に關する大要の見解を左に紹介すべし、尤も此の節は主として對他的のものを擧げたり、對自道德は卽ち佛道修行なれば、そは成佛篇自度自濟の點に於て、之を諒解し得べきものなりとす、猶日蓮聖人の對他道德公德に關する訓戒的消息文等は頗る多きも、今は其一小部を示すのみ、決つして此に盡きたりと思ふべからず。

觀心本尊鈔に曰く、天晴ぬれば地明なり、法華を識るものは世法を得べき歟。

檀越御返事に曰く、御宮づかいを法華經とをぼしめせ、一切世間の治生產業皆與實相不相違背とは是なり。

太田左衞門尉御返事に曰く、予が法門は四悉檀を心に懸て申すなれば、强ちに成佛の理に違はざれば、且らく世間普通の義を用ふべき歟。

戒法門に曰く、我等が眼は木より生ず、耳は水より生ず、鼻は金より生ず、舌は火より生ず、身は土より生ずるなり、上の五行をもて五根の損ずるを知て病の有樣を知るべし、又五根の損ずるは五戒の破るる故なり。させる虛事をせぬ人もあまりにすき物を好めば舌損じ身に瘡多し、させる物をば殺さねども辛き物を多く食すれば眼損ず、是を以て餘の戒をも知るべし、人目は五戒を持て貴き樣なれども食物に五戒を破て三惡道の主となり、人には善を疑はせ我は佛法を恨む、此頃の世間の人大旨是に似たり。戒を習はんと思はん者能々我身を知るべきなり。

春
仁、以慈爲義
肝、不殺生戒　眼木青酸木の山雨の味酢し歲星東に出て眼の病あり